



# 二十世紀とは 何であったか

追悼と鎮魂の100年

小林 道憲

# 二十世紀とは何であつたか

追悼と鎮魂の100年

## 目次

### ブローグ 二十世紀の光と影

冷戦終結のもたらしたものは 第二次大戦と第一次大戦の意味 非ヨーロッパの世紀 二十世紀の矛盾

### I 非ヨーロッパの世紀

#### 1 ヨーロッパの後退

ヨーロッパの優位とその後 ヨーロッパの自壊 大衆社会の狂騒  
ヨーロッパの再自壊 ヨーロッパの将来

#### 2 アメリカニズムの盛衰

アメリカの抬頭 バックス・アメリカーナ アメリカの科学技術と大衆  
消費社会 アメリカの衰退

#### 3 コミュニズムの興亡

コミュニズムの勃興 一国社会主義の光と影 コミュニズムの幻惑  
コミュニズム国家の解体 コミュニズムの滅亡

#### 4 アジア・アフリカの自立と苦悩

自立への道 第一次大戦後 第二次大戦以後 自立の苦悩 近代化の矛盾

### II 科学技術文明の進展

#### 1 科学技術の巨大化

偉大な革新 大量と巨大への情熱 巨大技術のもたらしたものは

## 2 メディアの復讐

人間と環境の中間者   メディアの反乱   環境の破壊   生命の操作   自動  
車と核兵器   空間と時間の無化   機械の人間化と人間の機械化

## Ⅲ 大衆社会の出現

### 1 大衆消費社会の実現

増大する人口と大都市社会   情報化社会という名の劇場社会   大量消費  
社会と使い捨て文化   大量消費社会と都市文明

### 2 大衆の国家

大衆民主主義と欲望の肥大化   全体主義の幻影   戦争の世紀

## Ⅳ 文化の頹落

### 1 低俗の崇拜と専門化

映画と音楽とスポーツ   マス・メディアと出版文化   知的欠陥人間の登  
場   創造的精神の喪失

### 2 世界像の喪失と対象の破壊

伝統的世界観の崩壊   過剰という名の貧困   芸術の実験化   絵画・音楽・  
建築   文学・詩・演劇

### 3 精神の散乱と永遠の忘却

精神の散乱と実在感の喪失   言葉の頹落と持続の喪失   永遠の忘却

## エピローグ 日本に於ける二十世紀

日露戦争後の精神的空白化   大正時代の精神的もろさ   昭和前期の危機  
経済発展の光と影   魂の喪失と精神の荒廃





### 冷戦終結のもたらしたもの

一九七四年、田ソ連のブレジネフ政権によって国外追放を受けたソルジェニーツィンは、翌年、フランスのル・モンド紙（一九七五・五・三一日付）に「第三次世界大戦は終わった」と書いたことがある。しかも、その結果は、共産主義の勝利・自由主義の敗北に終わったという考えであった。この年、一九七五年四月、長い間泥沼化していたベトナム戦争がアメリカの敗北に終わり、その後南ベトナムは北ベトナムによって統一され共産化されてしまったのである。ソルジェニーツィンはこれを「第三次世界大戦」の終結と捉えた。

彼の考えによれば、第二次大戦後の「東西冷戦」では、多くの国が共産主義に隷属し、多くの人々が虐殺されていった。それは、むしろ、二十世紀における第三番目の世界大戦だったのではないかと言う。「第三次世界大戦」は将来いつかは起きる可能性のあるものというようなものではなく、すでに起き、しかも、それは、自由主義の敗北という形で終焉を迎えたのだと考える。確かに、振り返ってみれば、旧ソ連は、第二次大戦後、東欧、中国、朝鮮、ベトナム、中東、アフリカにまでその勢力圏を最大限に拡大した。そして、ベトナム戦争終結時には、田ソ連は、アメリカを中心とする西側陣営に勝利したかに見えたのである。

ところが、歴史というものは分からない。歴史はいつも予測不可能なものを含んでいる。二十世紀末の世界史の事実は、ソルジェニーツィンの考えを否定した。彼は、一九七五年の時点で、ソ連の勝利とアメリカの敗北を見て、「第三次世界大戦」の終結を確信したのだが、彼が語っていた「第三次世界大戦」つまり「東西冷戦」は、実際には一九九一年まで続いていたと言わねばならない。一九八九年、東ヨーロッパ諸国の共産政権が次々と崩壊し、その余波を受けるように、一九九一年ソビエト連邦そのものが崩壊し、この地球上から消滅してしまっただけである。

ソルジェニーツィンの言った「第三次世界大戦」、通常「冷戦」と言い慣わしている米ソの対立は、一九四七年のコミンフォルムの形成あたりから明確になり、その熾烈な戦いは、一九九一年まで四十年あまり続いた。二十世紀後半、半世紀近くも続いた「東西冷戦」は、アメリカとソ連が直接は関わらずに、他の同盟国を巻き込んで間接的な闘争をや、それによって勢力圏争いをしようとした戦いであった。ソ連は、すでに、第二次大

戦前から世界制覇を狙っていた。だが、アメリカは、第二次大戦中は、特にドイツと日本を敵に回していたために、このソ連の意図を見過ごし、むしろドイツと日本を降伏させるために、ソ連と手を結んだ。アメリカがソ連の世界制覇の意図に気づき、警戒し出すのは、第二次大戦終結後二年、一九四七年のことであった。その後、アメリカは次第にソ連封じ込め政策へと突入していく。それ以来、互いに直接は関わらないことを前提にして勢力圏争いをするという変則的な戦争を、米ソは四十年あまりも継続したのである。

通常戦力による代理戦争は、その間接戦争の手段の一つであった。それは、例えば、中国内戦、朝鮮戦争、中東戦争、コンゴ紛争、そしてベトナム戦争、アフガニスタン紛争などとなって現われた。これらの戦争や紛争で、米ソは、直接は関わらずに、武器援助や経済援助によって、それぞれの紛争地域の当事者同士に関わせる代理戦争という形をとった。もっとも、米ソの一方が直接軍事介入を行なったことはしばしばあったが、それでも、米ソが直接軍事衝突をしたことはなかった。二十世紀後半続いたこれらの戦争や紛争や内戦を一続きの戦争と考えるなら、合わせれば実に多くの血が流れている。犠牲者の数は何千万にもぼった。冷たい戦争ばかりでなく、熱い戦争も行なわれていたのである。とすれば、これは、ソルジェニーツインにならって「第三次世界大戦」と呼んだ方がふさわしいかもしれない。

核兵器の開発競争も、この米ソの間接戦争の重要な手段であった。それは、一応核兵器そのものを使わないということを前提にして、その量や質を争い、世界政治において主導権を握ろうとする別の形の戦争であった。また、集団安全保障体制の構築も、米ソの間接戦争の手段の一つとして寄与した。ヨーロッパではNATOとワルシャワ条約機構が対峙し、アジアでは、アメリカは各国家と二国間安全保障条約を結び、共産圏と対峙した。そういう仕方で相拮抗しつつ、力の均衡をはかりながら、直接戦うということとは回避するとともに、互いが互いの隙をみて勢力圏争いをしてきたのである。さらに、宇宙開発競争、経済援助、情報戦、心理戦、思想戦、すべてが両国の間接戦争の手段となった。平和共存とかデータントという平和戦略でさえ、この間接戦争の手段のうちであった。それは、あらゆる手段を使った闘いであった。

このアメリカとソ連の戦いによって、二十世紀後半の世界は二つの勢力圏に分裂した。それは、あたかも米ソ二国による世界分割の様相を呈した。なるほど、共産圏でも自由圏でも、その内部では対立や分裂もなかったわけではない。また、どちらの陣営にも属さない非同盟諸国も存在した。しかし、それでも、二十世紀後半の世界の主導権を握っ

たのは、アメリカとソ連であった。そのために、第二次大戦後のヨーロッパは東欧と西欧に分かれ、それぞれ東側陣営と西側陣営に入った。二十世紀後半のヨーロッパは、いわば米ソという二つの非ヨーロッパ諸国によって分断されたのである。東アジア地域も、多かれ少なかれ同じような様相を呈した。だからこそ、朝鮮や中国、一時期のベトナムのような分断国家が生じたのである。非同盟諸国も、絶えず東西のどちらかの陣営に揺れ動いた。四度も起きた中東戦争も、〈東西冷戦〉の影響を絶えず受けた。かくて、〈東西冷戦〉はアフリカ、中南米にまで及び、米ソの勢力圏争いは地球規模に達した。

この米ソの〈冷戦〉の結末は、一九九一年のソ連邦の崩壊という結果で終わる。そのかぎり、この四十年戦争で敗北したのはソ連の方であった。しかし、同時に、アメリカの方もこの長い戦争で国力を消耗し、疲弊したことも否定できない。むしろ、〈東西冷戦〉の結果は、ソ連の崩壊とアメリカの後退という現象をもたらした。アメリカとソ連は、徹底した軍拡競争、宇宙開発、経済援助、あらゆる面で勢力圏争いをし、鎬を削ってきた。そして共に膨張し、その膨張の限界近くまで来た。限界にきたのはソ連のほうが先であったが、しかし、アメリカも深傷を負ったことは確かである。人間は愚かなもので、互いに鎬を削って戦っていると、互いに疲弊し、共倒れになってしまうことのあることを忘れてしまう。アメリカとソ連も、長い熾烈な戦いの中で、互いに消耗してしまっただけである。

他方、〈東西冷戦〉の結果は、その間隙を縫うようにして、アジアの新興工業国の抬頭という現象をもたらした。二十世紀末、世界の富はアジアの方へ引き寄せられ、世界経済の重心はアジア圏に移動してきた。米ソ相闘ってあらゆる軍事力の限りを尽くしているうちに、時代は予期せずして経済力の時代に移っていた。そのため、軍拡競争に米ソが血道をあげている間に、経済発展に血道をあげていたアジア諸国が抬頭してきたのである。四十数年の〈東西冷戦〉は、旧ソ連の崩壊とアメリカの後退、さらに、アジア諸国の抬頭という二つの大きな結果をもたらしたのである。

#### 第二次大戦と第一次大戦の意味

だが、このアジア諸国の抬頭という現象は、一朝一夕にもたらされたものではない。これは、差し当たりは、一九六〇年以降の日本の経済発展とそれのアジア諸国に与えた影響が直接の原因となって起きた現象である。しかし、その源泉をさらに尋ねるなら、第二次世界大戦にまで遡ることができる。第二次大戦でのヨーロッパ諸国に対する日本

の反撃とアジア諸国のヨーロッパ植民地からの独立の動きこそ、二十世紀末のアジア諸国の抬頭をもたらしたものであった。第二次大戦後のアジア諸国の独立がなかったなら、アジアの抬頭という現象もなかったであろう。

第二次世界大戦は、普通、ドイツ、イタリア、日本を中心とする枢軸国に対する、イギリス、フランス、アメリカ、ソ連など連合国の戦いであったと言われる。イデオロギイ的には、枢軸国側の全体主義に対する連合国側の自由主義の戦いであり、その結果は、連合国側の自由主義の勝利であったとみられている。しかし、このような立場だけから第二次大戦を断定してしまうと、見誤ってしまう。連合国側にソ連という全体主義国家が加わっていることから、この図式は不十分である。第二次大戦は、むしろヨーロッパ地域とアジア地域に分けて考えるべきであろう。

ヨーロッパ地域の戦線では、膨張するナチス・ドイツとイタリア・ファシズムに対して、フランス、イギリスが、アメリカとソ連の参戦を得て、それを阻止した。しかし、その結果は、ドイツやイタリアの壊滅ばかりでなく、フランス、イギリスの疲弊とヨーロッパ全域の壊滅を招いた。第二次大戦は、ヨーロッパ地域にのみに限れば、第一次大戦の打撃に加え、ヨーロッパの再度の疲弊をもたらすものであった。その意味では、ヨーロッパ地域における第二次大戦は、ヨーロッパ全体の再度の自決行為であった。

なるほど、フランスやイギリスやアメリカから見れば、この戦いは全体主義に対する自由主義の戦いと受け取られたかもしれない。しかし、例えば、ナチス・ドイツが当時最も進んだ民主主義を奉じたワイマル共和制から発生してきたように、全体主義はいわば自由主義の鬼子として登場してきたものであり、その源泉はヨーロッパの近代文明自身の中に根を張っている。ナチズムやファシズムなどの全体主義は、自由主義によって断片化し、平均化し、水平化した社会の極端な組織化であり、それは、むしろ自由主義の矛盾の極に現われた異常現象であった。ヨーロッパ地域における第二次大戦が、自由主義の全体主義に対する戦いであったとしても、それは同じ近代ヨーロッパ文明に源泉をもつイデオロギー同士の戦いであり、従って、その熾烈な戦いはヨーロッパそのものの自滅と後退をもたらした。

他方、アジア地域での第二次大戦は、これとはまた別の様相を示した。日本の欧米諸国に対する絶望的な戦いは、確かに日本の壊滅をもたらしたが、しかし、そこには、同時に、アジアを植民地化していたヨーロッパ勢力への逆襲という意味もあった。そのため、第二次大戦での連合国側の勝利にもかかわらず、イギリス、フランス、オランダの

ヨーロッパ勢力は後退し、戦後二度とアジアに復帰することはできなかったのである。

かくて、これらヨーロッパ勢力によって植民地化されていたアジア諸国、インド、ビルマ（ミャンマー）、マレーシア、ベトナム、インドネシアなどは、第二次大戦後独立を果たしていくことができた。もちろん、このアジア諸国の独立の背景には、十九世紀末以来、二十世紀の第一次大戦、第二次大戦とかけて、長い間試みられてきた各民族の独立運動の長い歴史があった。その長い闘争の積み重ねなくして、独立はありえなかった。これと、日本の反撃、さらにヨーロッパ戦線でのヨーロッパ諸国の疲弊が連動して、多くのアジア諸国の独立はもたらされた。しかも、この独立の動きは、戦後、燎原の火のようにアフリカ諸国にまで及んだ。こうして、遠く十七世紀以来二十世紀半ばまで、三五〇年あまり続いたヨーロッパ植民地勢力の世界支配は終焉を迎え、ヨーロッパ勢力は後退せざるをえなかった。

このようにして、第二次大戦は、ヨーロッパ地域でもアジア地域でも、結果としてヨーロッパの後退をもたらした。そして、その代わり、第二次大戦への参戦によって発言力を強めたアメリカとソ連が大きな力を持ち、大戦後世界分割を行なうことになった。また、これと同時に、アジア・アフリカ諸国はヨーロッパの支配から次々と自立して、世界図式を大きく変えていったのである。とすれば、第二次大戦は、ヨーロッパの後退と非ヨーロッパの抬頭という二十世紀の最も大きな世界史の事実を形成する分水嶺になったと言えるであろう。

しかし、この第二次大戦がもたらしたヨーロッパの後退と非ヨーロッパの抬頭という二十世紀を特徴づける現象は、すでに、二十世紀初めの第一次大戦の結果として現われていたことでもある。第一次世界大戦は、イギリス、フランスを中心とした連合国側とドイツを中心とした同盟国側とが、植民地争奪戦の極限状況のもと、バルカン諸国に対する利害を発火点にして勃発し、その結果、連合国側がアメリカの参戦を得て同盟国側に勝利を取った戦争だとみられている。だが、実際には、ヨーロッパを主な戦場にして世界中を巻き込んだこの最初の世界大戦は、壊滅的打撃を受けたドイツはもちろん、勝利を取ったはずのイギリス、フランスをも疲弊させた。それは各国がその国力を出し尽くして戦う消耗戦であったから、ヨーロッパ各国は互いに消耗した。それはヨーロッパ全体の自決行為だったのである。

十九世紀には、ヨーロッパ諸国はそのすぐれた産業技術文明を背景に世界中に雄飛し、この産業技術文明を世界中に普及させるとともに、世界中を植民地化して、誰はばかる

ことのない優位を世界史上に打ち立てた。十九世紀はヨーロッパの世紀であった。二十世紀初頭でも、このヨーロッパの優位はまた崩れてはいなかった。ヨーロッパ人達は、相変わらず、自分達こそ世界に冠たる民族であり、ヨーロッパを中心にして世界は回り、ヨーロッパの力によって世界の安定と繁栄はあるものと確信していた。誰も、ヨーロッパの世界的優位を疑うものはなかった。二十世紀初頭、ヨーロッパ勢力はアジア・アフリカの隅々に及び、その膨張は最高度に達していたからである。人生がそうであるように、ヨーロッパ人も、十数年後の自らの運命を知るべくもなかった。

だが、膨張の極限は膨張の限界でもある。ヨーロッパはまもなくその膨張の限界に達し、その反動として、急激に縮小する運命に出会う。第一次大戦の結果がそれであった。かくて、一九一八年を境にして、ヨーロッパの世界的拡大は終わる。そして、ヨーロッパ諸国は急激に弱体化し、その代わり、第一次大戦への参戦によって主導権を握ったアメリカが急に大きな力をもつに至った。と同時に、第一次大戦で連合国側につき終戦前に脱落したロシアも、革命によって世界最初の共産主義国となり、ソビエト連邦を形成して、これが第二次大戦後無視できない力をもつに至った。いずれにしても、第一次大戦を境にして、ヨーロッパの後退と非ヨーロッパの抬頭という二十世紀を特徴づける現象が明確に現われる。

#### 非ヨーロッパの世紀

とすれば、二十世紀は次のような時代であった。第一に、第一次大戦でヨーロッパがそれまでの世界的優位を失い、その代わり、アメリカが世界史を動かす主導権を握る。第二に、第二次大戦でヨーロッパがさらに後退し、その代わり、アメリカとソ連が世界の覇権を獲得する。と同時に、アジア・アフリカ諸国が自立する。第三に、東西冷戦で今度はソ連が崩壊し、アメリカも後退して、その代わり、アジア諸国が抬頭してくる。そのような時代であった。いずれも、二十世紀は非ヨーロッパ諸国にその活躍の舞台を与えた時代であった。その意味では、第一次大戦が終結した一九一八年、第二次大戦の終結した一九四五年、そして冷戦が終結した一九九一年は、二十世紀の大きな転機をもたらした年として、二十世紀のメルクマールとなった年であった。その間、約百年の間に、世界史の重心は、ヨーロッパ地域から、一つは大西洋を越えてアメリカ大陸へ移り、もう一つはユーラシア大陸の内陸部に移り、最後にアジア・太平洋地域に移って、地球を一周した。こうして、十九世紀がヨーロッパの世紀であったのに対して、二十世紀

は「非ヨーロッパの世紀」となったのである。

「非ヨーロッパの世紀」としての二十世紀を、その前半から後半にかけてリードしたのは、主にアメリカ、そしてソビエト・ロシアであった。しかし、両国とも、必ずしも、第一次大戦でのヨーロッパの後退によって、急に勃興してきたというわけではない。十九世紀末、アメリカとロシアは、その国力においてすでにヨーロッパ諸国を脅かしつつあった。しかも、この両国がやがて大きな勢力として勃興し、そのためヨーロッパ諸国は衰退するかもしれないという危機感、つとに十九世紀後半のヨーロッパの心ある思想家には懐かれていたことであった。実際、その危機感、二十世紀になって、第一次大戦後アメリカが抬頭し、ヨーロッパが矮小化されたことによって現実となった。さらに、第二次大戦後、アメリカを中心とするNATOとソ連を中心とするワルシャワ条約機構に、ヨーロッパが分断されてしまったことによっても決定づけられた。二十世紀の半ばで、世界史の主導権は、ヨーロッパから非ヨーロッパに移動してしまっていたのである。

第二次大戦後の冷戦の時代は、自由主義と共産主義の対立抗争の時代と捉えられたが、それも、イデオロギーの仮面を取り外すなら、むしろ非ヨーロッパ同士の覇権争いにすぎなかったのかもしれない。アメリカとソ連は両方とも広大な領土をもつ国家であり、同時に、一方は海洋国家として、他方は大陸国家として、地球上の覇権を争った。そのため、国民国家の枠にとどまったヨーロッパは片隅に追いやられ、逆にこれら非ヨーロッパの大国に従属し、その狭間で生存していかなばならなくなったのである。

しかし、だからと言って、ヨーロッパは必ずしも完全に後退してしまっただけではない。現に、アメリカが推し進めた自由主義もソ連が採用した共産主義も、どれもヨーロッパ近代が生み出した思想にその根をもっていた。日本やアジア・アフリカ諸国が目標としてきた国民国家の組織も、ヨーロッパ近代の国家形態を模範とするものであった。その点では、ヨーロッパ近代文明はなお世界を支配している。

アメリカやソ連、そして日本は、むしろ、ヨーロッパ近代文明をヨーロッパを凌ぐほどまでに成就した国家であった。これらの非ヨーロッパ諸国はヨーロッパ近代文明を独自の仕方で受容し、逆に、二十世紀に至って、こぞってヨーロッパに反撃していったのである。これらの非ヨーロッパ諸国は、いわばヨーロッパ近代文明を略奪することによって、ヨーロッパに逆襲したことになる。ヨーロッパ側から言えば、皮肉にも、自らがつくりだした近代文明が異質化されたり純粋化されたりして、非ヨーロッパ諸国から逆



流し、それに苦しみられることになったのである。ヨーロッパ近代の同じ武器によってヨーロッパへの逆襲が行なわれるという逆作用が二十世紀になって生じたのは、十九世紀にヨーロッパ近代文明があまりにも拡大すぎたことへの反動であった。二十世紀は、ヨーロッパ近代文明がお世界中に普及するとともに、そのため、かえってヨーロッパ自身が後退していった時代だったのである。

なるほど、二十世紀末、冷戦の終結とともに、旧ソ連は崩壊し、アメリカも衰退の道を歩むに至り、それに代わってアジア諸国が興隆してきた。二十世紀は、ヨーロッパの後退ばかりでなく、この世紀の半ばを支配したアメリカとソビエト・ロシアの後退の時代でもあった。

二十世紀は「アメリカの世紀」とも言われたが、同時に、アメリカの衰退の世紀でもあった。また、二十世紀は、ソ連を中心とした Kommunizmus の勃興の世紀でもあったが、同時に、その衰亡の世紀でもあった。歴史は無常なものである。二十世紀は、 $\Delta$ アメリカニズムの盛衰と  $\times$  Kommunizmus の興亡という二つの現象を見事に描き上げた。二十世紀末、このアメリカニズムと Kommunizmus の衰微という現象があったからこそ、アジア諸国が、主にその経済力によって、世界史に対して無視することのできない影響力をもつに至ったのである。二十世紀初頭まだ歴然として存在していたユーラシア大陸の極西地域の絶対的な主導権も、二十世紀末には、すで見失った。この点でも、二十世紀は、なお「非ヨーロッパの世紀」であった。

しかし、誤解してはならない。二十世紀末アジアが抬頭してきたと言っても、決してアジアの文化が再生してきたというわけではなく、まして、それがヨーロッパ由来の近代文明を克服しているというわけでもない。逆に、それは、積極的にヨーロッパ近代文明を受容しわが物としようとしてきたアジアの長い苦闘の成果としてたらされた現象である。ここにも、ヨーロッパ近代文明の略奪によるヨーロッパ近代文明の拡散という二十世紀を特徴づける性格が、集約して現われている。

二十世紀は、悲しむべきことに、戦争と革命の連続の時代であった。この時代には、世界大戦を二度、または解釈によっては三度も経験し、文字通り相続く戦争や動乱の世紀であった。さらに、これら世界規模の戦争を契機にして、独立運動に伴う多くの革命や内戦を経験してきた世紀でもあった。これほど多くの戦争や革命があった世紀もなかったであろう。その激動の背後でうごめいていたものは何だったのか。近代化に先んじた国に対する近代化に遅れた国の焦燥感、ナショナリズムとナショナリズムのぶつかり

合い、自由主義と全体主義のイデオロギー上の反目、それらが渦巻いて、多くの戦争や革命が勃発した。二度の大戦も、東西冷戦も、数多くの独立戦争も、ある意味で、近代化の矛盾という同じ原理によって動いていた。そこでは、勝者必ずしも勝者ならず、敗者必ずしも敗者ならず、勝利を取めたものが疲弊したり、敗北した者が盛り返してきたり、下剋上の激動の世紀であった。それは、結局、ヨーロッパ近代の産業技術文明を他の非ヨーロッパ諸国が略奪することによって、あるいは覇権を求め、あるいは権利主張をしようとした過程の中にあつたと言えるであろう。

## 二十世紀の矛盾

十九世紀以来、ヨーロッパは、何度かの産業革命を通して科学技術を発展させ、物質の大量生産と大量消費を可能にする産業機構をつくりあげ、そのために人民主権の政治制度を築き、社会を平等化して、巨大な産業社会を形成することに熱中した。非ヨーロッパ諸国も、その後、遅れ先立ちはあるにしろ、このヨーロッパの産業社会を目指して、それに追いつき越すべく近代化の努力をしてきた。

二十世紀は、この巨大な科学技術文明を地球的規模でつくりあげようとした人類の飽くなき営みの中にあつたと言える。確かに、このことによって、二十世紀の人類は、十九世紀以上に、科学技術による便利さ、産業の発展による豊かさ、近代的政治制度による自由・平等など、より進んだ文明を手に入れ、世界は一体化した。

しかしながら、このより進んだ文明を獲得するために、人類はまた多くの戦争や革命を経験しなければならなかった。二十世紀は、二度の大戦をはじめ打続く数多くの戦争によって、幾千万となき人々が犠牲になつていった悲惨な時代でもあつた。二十世紀の戦争は急速な進歩を遂げた科学技術を使った消耗戦という形をとつたために、大量の戦死者を生み出すことになつたのである。これほど悲惨な戦争は十九世紀以前にはなかつたことであり、二十世紀が生み出した最大の災いであつた。しかも、二十世紀は、戦争を抑止することに成功しなかつた不幸な世紀であつた。

二十世紀の科学技術の絶え間ない進歩も、一方では、自然を破壊して、自然への畏怖の念を奪い、社会を機械化して持続ある時間を奪い、人類を不安にさせなかつたわけではない。より多くの豊かさを約束した産業主義も、爛熟するに従つて、逆に過度な拝金主義を生み出した。広く知識や情報を民衆に解放した二十世紀の大衆社会も、また、文化の低俗化を引き起こした。豊かな文明を獲得したために、人類はかえつて貪欲になり、

必ずしも幸福になっただけではない。

より多くの自由を約束した自由主義も、進展するに従って、逆に社会の無秩序化をもたらした。自由の獲得によって、人々は、逆に、安定を失って、何ともしの不安を懐き続けねばならなくなったのである。

より多くの平等を約束した共産主義も、実際には自由・平等の喪失に陥り、前世紀までにはなかったような悲惨な圧政をもたらした。この共産主義や国家社会主義など、二十世紀が生み出した全体主義国家では、また、多くの人々がゆえなく肅清され、虐殺されさえしていったのである。

これら二十世紀の文明の矛盾は、すでに、十九世紀ヨーロッパの近代文明そのものなかに内包されていたものであった。ヨーロッパは、この矛盾を、二十世紀初頭に集約した仕方で表わした。従ってまた、このヨーロッパ近代文明を積極的に受容し獲得しようとした非ヨーロッパ諸国も、同じような矛盾を抱えねばならなかった。二十世紀末のアメリカやロシアの苦悩もそれを物語っている。二十世紀末抬頭してきたアジア諸国も、文明が爛熟すればするほど、それに伴う矛盾はより増幅し、二十世紀文明の抱える多くの病弊を免れることはできない。文明を獲得すればするほど、文明の毒のみこまざるをえないからである。この文明の毒のみこむためにさえ、過去百数十年、アジアの民も、打続く独立戦争や革命の中で、数多くの犠牲を払わねばならなかった。

二十世紀は、深い嘆きと痛みの感情、そして深い哀悼と鎮魂の想いの中に記憶されねばならない。

I  
非ヨーロッパの世紀

## 1 ヨーロッパの後退

### ヨーロッパの優位とその後

十九世紀も末、一八七〇年代から一八八〇年代にかけて、ヨーロッパは、イギリスをはじめフランスもドイツも、新しい工業の発展による経済繁栄に沸き返っていた。鉄道はすでに網の目のように敷設され、大量の原料や製品を間断なく輸送し、大型汽船も定期的に就航して、大量の工業製品や原料を絶え間なく運んでいた。通信網も完成の域に達し、経済活動上での連絡に不便することはなかった。そのような生産基盤の上に、ヨーロッパは、素材ばかりでなく、繊維製品、化学製品、重工業製品を大量に生産して、世界中に輸出し、その見返りとして、世界中から原料や食料や贅沢品を輸入し、ヨーロッパ各国は豊かな物資に満たされていた。

ヨーロッパ人達は、この経済繁栄を背景に、自分達の世界的優位を信じて疑わなかった。最高度に進歩したヨーロッパ文明が世界の他の地域に広く普及し、ヨーロッパ外の人々が自分達の先進文明に学ぶのは、当然のことだと思っていた。そして、ヨーロッパ各国が世界中に植民地をもつて、それを原料の調達地や製品の市場として支配することは、世界史の必然であると考えていた。また、地球上の片隅で起きたどのような問題も、ヨーロッパ各国間の政治的調整によって解決されないものはないと思込んでいた。ヨーロッパ人が築き上げた文明はあらゆる野蠻を克服し、世界無比であり、そのような文明を生み出したヨーロッパ人の世界支配は神から与えられた使命だとさえ考えていた。その文明がやがて二度にもわたる悲惨極まりない野蠻を引き起こそうとは、予想さえしなかったのである。

繁栄の頂点は、しかし、没落の出発点でもある。十九世紀末、一八八〇年代、繁栄の頂点にあったヨーロッパも、すでに、遠く大西洋を隔てたヨーロッパの最先アメリカと、遠くヨーロッパ大陸の内陸部に控えていたロシアによって、次第に追い上げられてもいた。特にアメリカが勃興してきて、そのために、ヨーロッパが衰退していくかもしれないという危機感は、すでに十九世紀半ばに、トクウィルやブルクハルトなど心あるヨーロッパの思想家には懐かれていたことであつたが、それが現実化してきていたのである。アメリカは、十九世紀後半、南北戦争で黒人奴隷を解放して、工業発展のための豊富

な労働力を獲得し、急速に産業を発展させていた。さらに、石油開発にもいち早く乗り出し、世界最初の発電所を建設して、次の世紀の新しい技術を切り開いていた。新大陸の石油と電気は、やがて石炭と蒸気機関を中心とする旧大陸の産業を凌駕することになる。このようにして、アメリカはヨーロッパを急速に追い上げ、世紀末の一八九〇年代には、ついに工業生産高でイギリスを凌駕し、ヨーロッパを追い越すまでになった。

ロシアも、十九世紀後半、農奴を解放して多くの近代化政策を実行し、ヨーロッパの新しい産業主義を導入し、次第に頭をもたげつつあった。そして、十九世紀末一八九〇年代には、重工業の目ざましい発展をみせ、シベリア横断鉄道にも着工し、次第に無視できない影響力をもつに至っていた。

ヨーロッパは、十九世紀末には、西方からも東方からも脅かされていたのである。そのため、ヨーロッパは、繁栄の頂点にあつたにもかかわらず、あるいは、それゆえにこそ、みずからの地位を失いはしなかつたかと思われ、それがまた、逆に、世界的規模での植民地争奪戦を激化させていった。ヨーロッパ各国は海外の植民地をより拡大していくとともに、そこへ大量の資本を投入し、利益を得ようと血眼になった。二十世紀初頭のヨーロッパは、そのような状況にあつた。

#### ヨーロッパの自壊

一九一四年、バルカン半島の利害を発火点にして、第一次大戦がヨーロッパ全域を戦場にして起きたのは、そのような植民地争奪戦が極限状態にきた時であつた。ヨーロッパは膨張の限界に達し、今度は、ヨーロッパ諸国同士で共食いをする以外になつたのである。そのため、ヨーロッパ諸国がその国力を出し切つて戦われた第一次大戦の結果は、戦勝国も戦敗国も共に壊滅的打撃を受け、互いに疲弊し、共に自滅していく他、道はないようなものであつた。かくて、ヨーロッパは、第一次大戦後その世界支配力を急速に弱め、急激に縮小していく。ヨーロッパは熾烈な内部抗争によつて内部崩壊を起し、主導権を失つて、世界の中心であることをやめた。ヨーロッパは十九世紀末に誇つていた世界的優位を失い、にわかに自信喪失に陥つたのである。その代わり、世界史上に抬頭してきたのはアメリカであり、不気味な可能性を示したのが、共産革命に成功したソビエト・ロシアであつた。

現に、アメリカは、一九一七年第一次大戦に参戦し、戦局を連合国側に有利に導くとともに、大戦後のパリ講和会議でも、ウィルソンの平和十四カ条を掲げて、イニシアチ

ブを握った。さらに、戦後のヨーロッパの復興に借款や物資で大きな貢献をしたのも、アメリカであった。ヨーロッパは、もはやアメリカの力を借りることなくして、立ち直ることはできなかつたのである。

他方、ロシアは、アメリカが参戦した同じ一九一七年に共産革命を成功させ、レーニンの率いるボルシェヴィキが政権を握った。そして、ヨーロッパやアメリカとは明確に対立するイデオロギーを掲げ、米ソ二大勢力の対立時代の出発点をつくった。大戦後の指導原理としても、無併合・無賠償の原則を宣言して、イニシアチブを握ろうとした。

こうして、ソビエト・ロシアは、第一次大戦後から第二次大戦にかけて、アメリカに対抗する勢力として成長していったのである。

異なつたイデオロギーを掲げた米ソ二大勢力の対立という第二次大戦後の図式は、すでに、この第一次大戦にその萌芽をもっている。第一次大戦後、ヨーロッパ諸国は自己決定権を失い、次第に、米ソが掲げるイデオロギーの分裂に巻き込まれていったのである。もともと、アメリカが掲げる自由主義にしても、ソ連が掲げる共産主義にしても、どれも、もとはヨーロッパの近代が生み出した思想であった。このヨーロッパ近代の二つの可能性が、アメリカとソ連の両極に分かれ、それが純粋化されたり変容されたりして、巨大な発展を遂げ、遂にヨーロッパを巻き込むようになったのが、二十世紀であった。ヨーロッパは自らが生み出したものに席卷され、次第に自信を失っていった。

第一次大戦後のヨーロッパの自信喪失は、文化的・精神的にも現われた。シュベングラの『西洋の没落』の第一部が一九一八年に出版され、ベストセラーになったのも、ヨーロッパ人の自信喪失の現われであった。シュベングラは、ヨーロッパ文明も他の諸文明と全く相対的・同時代的な位置にあり、ヨーロッパ文明が他の文明に対して優位していることはないとみて、従来のヨーロッパ中心史観を打ち破った。そして、ヨーロッパ文明も、過去の他の文明と同じように、春夏秋冬、季節が循環するように、誕生から死に至るサイクルを描くものと考えた。しかも、ヨーロッパ文明の現段階は都市文明の段階にあたり、大衆が土から離れて大都市に移動し、感覚的で刹那的な文化を形成する冬の時代に入っているとみた。従って、ヨーロッパ文明は没落する以外にないと断定したのである。

この『西洋の没落』の記述は非合理的な独断に満ちており、必ずしも全面的に支持しうるものではない。しかし、ここで従来のヨーロッパ中心史観を捨て、さらに歴史の進歩に対する先入観を切り崩して、ヨーロッパ人の歴史観を大きく転換させた点は、評価し

なければならぬであろう。しかも、それは、第一次大戦を境にしたヨーロッパの自滅と自信喪失を反映するものであった。シュペングラーを引き継いだトインビーの『歴史の研究』も、第一次大戦でのヨーロッパの自滅の衝撃を契機とするものであった。

すでに、自然科学の分野では、二十世紀初頭の一九〇〇年にプランクの量子論が発表され、物質世界が確率的に出来ており、不確定なものであるという考えに道を開いていた。さらに、一九〇五年にはアインシュタインの特殊相対性理論が発表されて、相対的宇宙観が登場し、従来の絶対的宇宙観が崩れ去っていった。ヨーロッパ人の宇宙観・世界観が、不確定なもの・相対的なものになっていったのが、二十世紀のヨーロッパの最も大きな変化であった。ちょうどそのような世界観の変化を表わすように、歴史観においても相対的・多元論的歴史観が生み出されてきたのである。それは、ヨーロッパそのものの相対化を表現するものであったであろう。しかも、それは、第一次大戦でのヨーロッパの自己崩壊ということなくしては、気づかれなかったことである。

#### 大衆社会の狂騒

だが、依って立つ根拠が相対化し無定形になる時、人々は逆に疑似の絶対性を求めるようになる。民族の絶対性を掲げて大衆の絶大な人気を得て登場してきたドイツのナチズムは、そのようなヨーロッパ人の苛立ちを表現するものであった。

第一次大戦から第二次大戦の戦間期の前半は、第一次大戦に対する厭戦気分がヨーロッパ中を覆い、その気分を反映するように民主主義と平和主義の気分が蔓延していた。大戦後の経済的苦境と復興の労苦の中で、人々は二度と戦争はあつてはならないと考え、民主主義と平和主義の確立によって世界の平和は獲得できるという希望をもった。一九一九年ドイツに成立したワイマル共和制は、主権在民の原則を確立し、二十才以上の男女の普通選挙制度や直接選挙による大統領選挙を規定し、当時としては歴史上最も民主的な政体であった。これも、民主主義による平和への希望を託したものであったであろう。

しかし、この民主主義と平和主義の風潮は、第一次大戦によってヨーロッパ社会が最終的に解体され、根無し草のような大衆社会が登場してきたことの表現でもあった。無定形で絶えず右や左へと流動していく大衆は、戦間期の前半には、厭戦気分も手伝って、民主主義と平和主義に希望を託した。だが、大衆社会は常に流動的で不安定で、感情的で利他的であるから、民主主義と平和主義の気分が一転して民主主義や平和主義の反対



のものに転化していく可能性も秘められていた。大衆の心は振幅が激しく、人の心と歴史は移り気なものである。すべてが相対化し、何を信じて生きていけばよいのか取りずかるべきものを失ったヨーロッパの大衆は、確かに、はじめのうちは民主主義や平和主義に希望を託したが、一旦状況が変われば別のものを絶対化する可能性があった。

戦間期の後半一九三〇年代、イタリアにムッソリーニを中心とするファシズムが、ドイツにヒトラーを中心とするナチズムが登場し、それが、イタリアやドイツばかりでなく、他のヨーロッパ諸国にもそれなりに賛同者を得たのも、第一次大戦後形成されたヨーロッパの大衆社会を前提していたであろう。

なるほど、ファシズムやナチズムがヨーロッパに登場してきた原因には、様々な要因があげられる。ドイツの場合には、ベルサイユ体制でありにも過酷な要求が突きつけられたこと、民族問題の処理があまりにも戦勝国側の勝手な解釈に委ねられたことなどがあげられるであろう。イタリアの場合には、イタリアが遅れて近代国家を形成し、イギリスやフランスに絶えず先を越されていた焦燥感も考えられるであろう。また、イタリアにもドイツにも共通して言えることは、一九二九年の世界恐慌から始まる経済不況が、後進性を宿していたドイツやイタリア社会を直撃したこともあげられるであろう。

しかし、同時に、その背景には、第一次大戦の打撃によってヨーロッパ社会が流動的な大衆社会になってしまい、大衆が時と場合によってはどのようなものにも結びつきうる存在になってしまったということがあった。ファシズムやナチズムが掲げた民族の団結や国家の統合原理は、そのような大衆の不満を吸収していく装置としてふさわしい条件を備えていた。かくて、一九三〇年代、ヨーロッパは、それまでの二〇年代に醸し出されていた民主主義と平和主義の風潮をかなぐり捨てて、国家主義と民族主義の風潮が吹き荒れる。そして、ヨーロッパは再び悲惨な総力戦に突入していったのである。

#### ヨーロッパの再自壊

こうして、ヨーロッパは再度自滅の道を歩まねばならなかった。科学技術の力を最大限利用して、大量の破壊と殺戮をもたらした第二次大戦の惨状を前にして、ヨーロッパ諸国は再び愕然とせざるをえなかった。ナチズムやファシズムを滅ぼしたとは言え、それに払った犠牲はあまりにも大きかった。

しかも、今回も、ヨーロッパ諸国だけでは、この戦争を終わらせることができなかった。ここでも、アメリカの参戦とソ連の参戦なくしては收拾できなかったのである。ヨ

ヨーロッパはすでに自己決定能力を喪失していた。そればかりか、大戦後のヨーロッパは東欧と西欧に分断され、それぞれソ連とアメリカの勢力圏に組み込まれた。そして、東欧と西欧は、やがてワルシャワ条約機構とNATOに属し、相対峙することになったのである。ドイツに至っては、同じ民族が東西に分断されるという屈辱を味わわねばならなかった。一九〇〇年前後、世界中を植民地化していたヨーロッパの優位は、ことごとく潰え去った。かつてのヨーロッパの栄光は見る影もなく、ヨーロッパの没落は明らかであった。

国際政治は、すでにヨーロッパの国民国家の枠を超えて、米ソという合衆国制や連邦制の超近代国家によって決定される時代に移っていたのである。事実、大戦後の世界は、アメリカとソ連の二超大国によって分割され、両極化していった。自由主義と共産主義の対立は、両国による世界分割の単なるイデオロギーにすぎなかったのかもしれない。

ヨーロッパ諸国の世界史上からの後退は、第二次大戦後の米ソの覇権によつてのみもたらされただけではない。ヨーロッパ諸国によつて植民地化されていたアジア・アフリカ諸国が大戦後次々と独立していったことによつても、ヨーロッパの後退は決定的なものとなった。第二次大戦中、ヨーロッパは、ヨーロッパ大陸を中心にして戦われた熾烈な戦争に埋没していたために、アジア・アフリカの植民地を十分顧みることができなくなっていた。そのヨーロッパ諸国の弱体化に乗じて、大戦後、一九四五年から一九六〇年代にかけて、アジア・アフリカ諸国はヨーロッパの軌から離れていったのである。ヨーロッパ諸国は、アジア・アフリカの国々に次々と独立を与える以外に、なすすべはなかった。このことによつても、ヨーロッパは、かつて誇っていた世界に対する指導力を失っていった。

一九五六年のエジプトによるスエズ運河国有化宣言でも、米ソの圧力もあって、イギリスはこれといったこともできず、撤退せざるをえなかった。これも、ヨーロッパの主導権喪失の一つの現われであった。また、フランスが、アルジェリア問題やインドシナ問題を解決できず、結局撤退に追い込まれていったのも、この例に数えてよいであろう。

十九世紀から二十世紀初めにかけて、アジア・アフリカを植民地化し、絶大な覇権を世界史上に確立していたヨーロッパ諸国が、五十年後にはその植民地を次々と手離していかねばならなくなった原因には、ヨーロッパ諸国が世界中に拡大してあまりにも勢力を伸ばしすぎたことがあげられるであろう。植民地の人々は、進出してきたヨーロッパ諸国に服従すると同時に、ヨーロッパの新文明に接触し、これを学んだ。そして、逆に、

その学んだ社会的知識や社会的技術を武器にして、ヨーロッパの支配から自立していったのである。ヨーロッパとしては、アジア・アフリカの隅々にまで勢力を拡張したために、かえって自分達をつくった近代文明の領域にそれらの諸民族を引き込んでしまい、そのため、皮肉なことに、ヨーロッパ自身が空白化していくという運命に出会うことになったのである。

このことは、すでに、十九世紀末、ヨーロッパの植民地政策が最高潮に達していた時から内包されていた問題でもあった。アジア・アフリカの隅々まで植民地化しようとするヨーロッパ各国の競争意識は、ある意味で各国にとつて重荷でさえあった。その莫大な投資ほどには、植民地からの利益は意外と上がってきていなかったし、それどころか植民地住民との衝突を絶えず招いていたのである。この度重なる衝突によって醸し出されてきたアジア・アフリカ諸国の独立の機運は、二度の大戦の結果ヨーロッパが弱体化すると、もはや止めようにも止めることのできない勢いとなった。そして、これが、ヨーロッパの後退にとどめを刺すことになったのである。

ヨーロッパからのアジア・アフリカの離脱という現象は、第二次大戦後の目立った特徴の一つである。この第二次大戦後の世界を形成するのに、第二次大戦中、東アジア地域において、ヨーロッパ勢力が日本から受けた衝撃も大きかった。第二次大戦中、イギリスやフランスやオランダがドイツやイタリアとの戦いに釘付けにされている間に、手薄になった東アジア地域のヨーロッパの軍力は弱体化した。そのこともあって、アジア諸国の独立の機運は増幅され、イギリス、フランス、オランダは大戦後東アジア地域に復帰することができなかつた。こうして、ヨーロッパ諸国がアジアに築き上げた世界支配の秩序は崩壊したのである。

二十世紀初頭には、ヨーロッパ諸国の世界支配は地球に及んでいた。しかし、膨張の極限は膨張の限界でもある。かつての古代ローマ帝国がそうであったように、あまりにも大きくなりすぎた版図は、逆に帝国自身を圧迫するようになる。ヨーロッパにとつて、二度の大戦はその現われであった。半世紀にも満たない間に大戦争を二度も戦うことによつて、ヨーロッパ諸国はその国力をほとんど消耗してしまつた。そして、それが、ヨーロッパ文明の内部崩壊をもたらし、危機をもたらしたのである。その代わり、ヨーロッパ文明を受容した非ヨーロッパ諸国、アメリカやソ連、日本やアジア・アフリカ諸国が抬頭してきたのが、二十世紀という時代に他ならなかつた。

## ヨーロッパの将来

なるほど、一九八九年東欧の共産政権は次々と崩壊し、ワルシャワ条約機構も解体し、ベルリンの壁も壊され、翌年には東西ドイツも統一された。冷戦の終結とともに、米ソによって分断されていたヨーロッパは、一つのヨーロッパとして復活したかにみえる。

それとともに、一九六三年から試みられてきたヨーロッパ共同体の動きも、市場統合から通貨統合、さらに政治統合に向けて、その動きに拍車をかけてきた。このヨーロッパ共同体の動きは、ヨーロッパのアイデンティティを再確立する上で注目される動きである。ヨーロッパがアメリカやアジアに対抗して再び影響力を回復するには、ヨーロッパ諸国の力が結集され、ヨーロッパ諸国が国民国家の枠を超えて統合される以外にないであろう。それは、ヨーロッパを略奪することによって力をつけてきた非ヨーロッパに対して、ヨーロッパから発しうる唯一の応答かもしれない。しかし、この統一ヨーロッパの形成は、必ずしも明るい将来が約束されているわけではない。ヨーロッパ各国の文化の違いや経済格差など、国民国家としての枠組みの障害を考えれば、統一ヨーロッパの将来には多くの困難が待ち構えていると言わねばであろう。

十九世紀末、ヨーロッパは、科学技術、経済、政治、軍事どの面でも、世界的優位を保っていた。だが、非ヨーロッパ諸国は、その当時から、すでに近代ヨーロッパが生み出した科学技術や政治・経済システムを急速に学び、国力をつけつつあった。そして、二十世紀に至って、アメリカやソ連や日本など非ヨーロッパ諸国は、このヨーロッパから獲得した同じ武器によって、ヨーロッパを凌駕し反撃し出した。ヨーロッパは非ヨーロッパによって略奪され、反対に逆襲されたのである。二十世紀はヨーロッパへの逆襲の時代であった。第一次大戦後のアメリカの政治的・経済的影響や、第二次大戦前後、ソ連が共産主義によって与えた影響や、二十世紀末日本が与えた経済的影響などは、そのようなヨーロッパへの逆襲の例である。統一ヨーロッパの形成の努力は、この非ヨーロッパからの逆襲に対する対応の試みではあるが、それでもなおヨーロッパは不安の中にあると言わねばならない。

## 2 アメリカニズムの盛衰

### アメリカの抬頭

十六世紀以来アメリカ大陸に次々と移民してきたヨーロッパ人達が何よりもはじめに

体験したことは、未開拓の広大な土地に対する希望と怖れ、そして、いかなる怪怖もない自由と不安だったであろう。アメリカが純粋な形でヨーロッパ由来の産業主義文明を形成しえたのは、アメリカ大陸が地理的にも歴史的にも何の制約もない新世界だったからである。アメリカ人達は、自由と希望のもと、広大な土地を開発するために大規模な機械を発明し、産業主義を発展させていく出発点に立った。移民によって成り立ったアメリカ社会は、歴史的伝統から切り離された市民社会として成立したから、自由民主主義を社会基盤として、巨大な産業主義文明を築き上げたのである。

現に、十九世紀初頭ヨーロッパの産業革命の波が押し寄せてくると、アメリカはこれを純粋な形で発展させ、豊かな資源と豊富な国内市場を背景に、ヨーロッパ近代の物質文明を大規模化して具現した。特に、十九世紀後半、南北戦争で黒人奴隷が解放され、豊富な工業労働力が確保されると、アメリカの産業主義は急速に進展した。大西洋横断海底電線が敷設され、大陸横断鉄道が完成し、ニューヨークに地下鉄が開通し、鉄道網が大陸の隅々にまで建設され、通信社や石油会社や電力会社が創立され、火力発電所や水力発電所が建設され、パナマ運河が起工された。また、電話機、蓄音機、白熱電灯、写真フィルム、写真機、映画など、新時代を象徴する発明がベルやエジソンやイーストマンなどによってなされ、アメリカの工業生産は飛躍的に向上した。ロックフェラーやカーネギーやモルガンなど大企業家が登場したのも、そのような経済成長を背景にしてであった。

かくて、一八九〇年代には、アメリカは、工業生産においてヨーロッパ諸国に追いつき追い越してしまった。フロンティアが消滅して巨大な大陸国家になるとともに、ハワイ、フィリピン、中国など太平洋地域に進出し、ラテン・アメリカを結束させたのも、この急速な産業発展が背景になっている。こうして、アメリカは、豊かな夢の国として人々の憧れの的になり、ヨーロッパからもアジアからも大量の移民を呼び寄せた。

一九〇〇年、二十世紀が始まったころ、アメリカの経済的・政治的自信は、相当なものであった。アメリカには無限の繁栄が約束されており、アメリカは、あらゆる産業が繁栄し、その繁栄を誰もが享受できる世界一の国家になるであろうと、人々は信じていた。物質的豊かさや民主主義を、国内はもちろんのこと、世界中に普及させる使命をアメリカは帯びているという主張に、政治家も各新聞も与した。

このアメリカの自信に対して、ヨーロッパ諸国では、ヨーロッパもやがてアメリカ化され、世界の重心はアメリカに移ってしまうのではないかという危機感も広まった。事実、その危機感は、二十世紀初頭、特に第一次大戦後、現実化する。アメリカは、第一次大戦に参戦するとともに、ベルサイユ体制の構築でも、民族自決の原則を謳った平和十四カ条を提唱して、大戦後の世界平和の実現を目指し、さらに、ヨーロッパ諸国の戦後復興にも大きな力を発揮した。アメリカは、この時を境に、世界史にその偉大な足跡を残すことになる。

一九二九年、ニューヨークのウォール街の株価大暴落から始まった世界恐慌からも、アメリカは、適切な経済政策によって、かなり早くに立ち直り、世界一の生産力をいち早く回復した。それだけの力を、アメリカはもっていたのである。

経済が順調な時には誰でも自信をもつものである。アメリカ人達も、かつてのヨーロッパ人がそうであったように、世界で最も活力ある自国に対して大きな自信をもっていた。現に、「アメリカは飛行機やラジオや映画を世界中に広めるばかりでなく、科学や芸術も広めなければならない。さらに、国際経済における自由主義体制の発展に指導的立場を取らねばならない。また、国際秩序の確立においても、デモクラシーの精神を普及させ、世界の精神的指導者とならねばならない」というような自信に満ちた声も聞かれたのである。

アメリカが孤立主義の立場を捨てて第二次大戦に参戦したのも、そのような使命感に駆られたという面もあったかもしれない。アメリカは、第二次大戦でも指導的役割を果たし、その巨大な国力を見せつけた。ヨーロッパ地域でも、アメリカの参戦があつてはじめてドイツやイタリアを降伏させることができ、連合国側を勝利に導くことができた。アジア・太平洋地域でも、アメリカの戦力なくして、日本を壊滅させることはできなかったであろう。アメリカの世界史的優位は疑うべくもなかった。大戦後も、廃墟と化したヨーロッパや日本の復興に、アメリカの経済力は大きな役割を果たしたし、戦後の平和維持機構の構築にも、アメリカは大きく貢献した。

こうして、アメリカは、第二次大戦後、世界の自由陣営を指導する超大国として、世界に君臨したのである。アメリカは、実際、第二次大戦後、西欧や日本などすべての自由世界を、その豊かな経済力と強力な軍事力によって統合し、一方の相対立する陣営の指導者ソ連と世界を二分した。二十世紀は「アメリカの世紀」とも言われるが、二十世紀の半ばすぎにあつて、バックス・アメリカナは少なくとも世界の半分以上の地域にお

いて実現したのである。

十九世紀前半では、アメリカはまだヨーロッパの風下に立っており、全くの未知数であった。十九世紀後半のアメリカは、確かに頭をもたげつつあったが、それでもまだヨーロッパ諸国に警戒感を与えた程度であった。ところが、第一次大戦後、ヨーロッパの崩壊とともに、アメリカは巨大な力を発揮するようになり、その後の世界を支配するに至ったのである。

#### アメリカの科学技術と大衆消費社会

アメリカのこの巨大な支配力を支えたのは、大規模な科学技術の力であった。近代の科学も技術も、もとはヨーロッパ近代において生み出されたものであった。アメリカはこれを早いうちから受容し、それを地理的にも歴史的にも何の制約もない広大な大陸に移し替えて、大規模化し、大量生産・大量消費のシステムをつくることに、ヨーロッパ以上に成功した。

例えば、二十世紀は自動車の世紀とも言えるが、この自動車の大量生産システムをつくったのもアメリカであった。一九〇八年、フォードがT型乗用車の量産システムを作ることによって以来、自動車は急速な仕方で大衆に普及し、アメリカ独自の大衆消費社会をつくりだした。上流階級のものであった自動車を大衆のものにするために、大量に生産し大量に消費していくシステムをつくりあげたのは、二十世紀前半のアメリカであった。自動車ばかりでなく、飛行機、電話、ラジオ、テレビ、冷蔵庫、洗濯機、掃除機など、二十世紀を象徴する文明の利器を大量に生産し普及させたのは、アメリカの技術力であった。それによって、二十世紀の人類の生活形態は、十九世紀と比較しても比べものにならないくらいに大きく変化した。

映画も、アメリカが生み出した大衆娯楽であった。映画は、それまで劇場で生の人間が演ずる芝居でしか楽しむことのできなかった演劇や、それほど簡単には見聞することのできなかった世界中の出来事などを映像化して、大量の大衆に一挙に伝え楽しませることを可能にした。もともと、それは、映像という単なる複製を介しての疑似体験を伝達するにすぎなかったが、このような映像文化をつくりあげたのがアメリカ文明に他ならなかった。さらに、この映像文化は、二十世紀後半のテレビに引き継がれて、家庭の隅々にまで直接入り込むことが可能になった。しかも、大衆に対して平等に文化の享受を可能にする映像技術は、アメリカの理想でもあるデモクラシーと深く結びついていた

のである。アメリカ人は、映画に代表される映像文化を、アメリカ・デモクラシーの生み出す偉大な芸術として誇りをもった。

自動車や映画ばかりでなく、画一化されたものを大量に生産し、これを大量に販売し、これを大量に消費する社会、つまり大衆消費社会を、アメリカは二十世紀において作りあげた。この大衆消費社会は、広告によって過度なほどまでに大衆の欲望を刺激し、物や情報を大量に消費させることによって、それらを大量に生産することを可能にするようなシステムであった。このような大衆消費社会の経済システムに乗って、人々は争って自動車を買い、映画を見に行き、ラジオやテレビを買い、家庭電化製品で家中を満杯にし、さらにそれらを速やかに使い捨てていった。今日では当たり前になってしまったこのような大衆消費社会の風景を最初につくり出したのが、特に一九二〇年代以後のアメリカだったのである。アメリカは、この大衆消費社会を世界に先駆けてつくることによって、未曾有の物質的繁栄を謳歌した。このことによって、アメリカは、出身や階級において多種多様な人々を、アメリカ人として画一的に統一したのである。

デモクラシーという政治的・社会的システムのもと、出身や階層、思想・信条の相違を越えて、自動車、家電製品、映画、ミュージカル、ジャズ、ロック、レコード、ジーンズ、ハンバーガーやコーラを誰もが享受するというのが、二十世紀のアメリカの生み出したアメリカン・ウェイ・オブ・ライフであった。科学技術に支えられた大衆消費主義、物質主義、それが二十世紀のアメリカニズムだったのである。

しかも、この人々の欲望を無限に刺激するアメリカニズムは、どんなに伝統のある社会でも拒否することはできなかった。ヨーロッパの心ある知識人達がこのアメリカ文化の軽薄さをどんなに批判しようとも、このアメリカの物質主義は急速な勢いでヨーロッパにも広がり、二十世紀のヨーロッパはたちまちにしてアメリカ化された。ヨーロッパ人の生活も、また、自動車や映画、家電製品その他の消費文化で満たされたのである。このアメリカナイゼーションという現象は、ヨーロッパばかりでなく、一九二〇年代および第二次大戦後の日本も例外ではなかった。日本人の生活様式も、急速にアメリカ化されていったのである。かくて、アメリカ的生活様式は世界中の羨望的になり、アメリカは世界を席巻した。二十世紀はアメリカの世紀だと言われてきたが、実際には、このような形で「世界のアメリカ化」の時代が二十世紀だったのだと言える。

だが、この世界のアメリカ化は、また、世界中の文化の軽薄化をもたらした。例えば、映画の普及は、単なる複製の映像を真の芸術と思いつくつた。確かに、



それは大量の大衆を一挙に楽しませることに成功したけれども、それはまた大衆を画一化することでもあった。同じことは、テレビについても言えるし、テレビを通してなされる広告宣伝についても言える。情報にせよ、製品にせよ、それを大量に生産し大量に消費していく経済システムは、同時に社会の規格化と平均化、そして何よりも文化の低俗化をもたらした。世界中に広がったアメリカ文化は、文化の上品さ、持続ある時間、優雅な空間を奪い、人々の精神を空洞化させてもいったのである。

もつとも、これは、すでに十九世紀のヨーロッパが産業革命以来百年かけてつくりあげてきた近代文明の延長上に出てきたものでもあった。アメリカは、十九世紀にヨーロッパがつくりだした大量生産と大量消費システムを、何の足枷もない広大な土地に移植し、それをより大規模化したのである。アメリカは、この大規模化によって、稀にみる繁栄を築き上げた。

#### アメリカの衰退

だが、繁栄の頂点は、また衰退の出発点でもある。豊かさは衰退を胚胎し、繁栄は没落を内包する。

アメリカは、テクノロジーの力と大衆消費社会の形成によって、世界中にアメリカ文明を普及させるとともに、ソ連をはじめとする共産圏に対抗し、世界を二分してきた。ところが、一九七〇年代、ベトナム戦争への介入の失敗からくる国内の混乱を切掛けとして、アメリカはその支配力を弱め、後退していった。そして、アメリカは、政治的にも、経済的にも、社会的にも、次第に魅力を失っていった。

二十世紀初頭から一九六〇年代まで、半世紀以上も世界を支配してきたアメリカが衰退していかざるをえなかったのは、軍事費の過度な膨張によって国力を消耗しすぎたことにもよるのである。アメリカは、第二次大戦後、ソ連を中心とする共産圏に対抗していくために、その封じ込めを策し、ヨーロッパ地域でもアジア地域でも軍事同盟を形成して、世界のあらゆる地域にアメリカ軍を派遣した。アメリカの防衛線は伸びきっていたのである。同盟国への軍事援助や経済援助は、次第にアメリカ経済を圧迫した。さらに、核兵器の開発、軍事目的をもった宇宙開発など、軍事力の拡張に伴う軍事費の膨張は、アメリカの国力を消耗させた。

そればかりでなく、それに伴う軍産複合体が既得権を主張し、これを縮小できなかつた。アメリカは、軍産複合体を維持しなければ経済が成り立たないが、同時に、これを

維持すれば経済が衰退するという矛盾に面していた。アメリカはある意味で軍事国家であった。軍事産業が発展しなければ他の産業も発展しないという構造になっていた。しかも、アメリカは四十年あまりもソ連と戦ってきたばかりでなく、それ以前にもドイツや日本と戦ってきたから、それは、二十世紀のアメリカを一貫して支配してきた構造でもあった。軍産の複合はアメリカの癌でもあった。ベトナム戦争の敗北は、その矛盾を露呈したのである。なるほど、ソ連との戦いでは勝利を取めた。しかし、アメリカもまた国力を消耗し、結果として自らの後退をも招いたのである。かくて、アメリカはその支配力を弱めていった。

軍事費の圧迫は、当然ながら経済力の低下をもたらした。アメリカが、一九八五年に、貿易赤字と財政赤字を抱えて世界最大の債務国に転落してしまったのも、そのためである。だが、このアメリカの経済力の衰退は、すでに、一九七一年に起きたドル・ショックあたりから始まってもいた。それ以来、アメリカ経済は次第に衰退し、混乱し、低落の一途を辿った。さらに、経済の混乱は社会の混乱をも招き、麻薬の横行や犯罪の急増、家庭の崩壊、人種問題や階級格差など、社会的退廃現象は加速度的に進行した。

アメリカ人は、科学技術文明の進展とそれによる大衆消費社会の実現が素晴らしい未来を約束すると考えていた。しかし、科学技術文明の発達は大都市への人口の集中と社会の退廃をもたらし、大衆消費社会の実現は享楽主義と拜金主義を蔓延させた。そして、それは貧富の格差を増大させ、社会の不満を増幅し、次第にアメリカ社会を解体に導いていったのである。

経済的繁栄は必ずしも幸福を約束するわけではない。アメリカが誇りとした自由民主主義は、商業主義に支えられた物質主義を生み出し、やがて道徳的退廃や社会の無秩序化をも招いた。そのような精神的退廃が、アメリカ文明の衰退をもたらしたのである。こうして、世界の人々の憧れの的であったアメリカ的生活様式も色あせていった。

何事も常住不変ではない。いかなる文明も永遠に繁栄したことはない。どの文明もその繁栄によって膨張し、やがてその膨張した勢力圏を支えきれなくなって、衰退の道を歩みだす。さらに、その文明の繁栄が精神的退廃を招いて、その文明を内部から浸食してもいく。古代ローマ帝国もそうであったし、十九世紀から二十世紀初頭のヨーロッパ諸国も同じ運命を辿った。二十世紀のアメリカも例外ではなかったのである。しかも、愚かなことに、その衰退がどこでどのようにして始まるかということに、人々は気がつかない。歴史は人間の愚かさによって成り立っているのである。

十七世紀以来のアメリカ文明の発展を支えた精神は、勤労と禁欲を尊ぶピューリタン精神であり、広大な大地に立ち向かう開拓精神であった。それが、また、十九世紀以来のアメリカの産業技術文明の発展の基礎にもなっていた。だが、このピューリタン精神は、自分達が額に汗してつくりあげてきた文明を支える理念は最高の美德であり、その文明とそれを支えた理念は世界に広く普及させねばならないという一種の宗教的なミッション精神をもっていた。アメリカが、第二次大戦後の過剰なまでの自由世界への政治的・軍事的介入によって、かえって自らの国力を消耗させることにさえなった背景には、そのようなミッション精神があったであろう。アメリカ的価値観はすなわち神の意志であり、それは普遍性をもつはずだから、当然世界に普及しなければならぬ、アメリカは進んでその使命を果たさねばならないというピューリタン精神が、かえってアメリカの躓きの石にさえなったのである。

どの文明も、自らが発展してきた原理によって衰退する。デモクラシーを基礎とするアメリカの理念を科学技術の力と経済力によって地球的に普及しようという意欲が、二十世紀を「アメリカの世紀」としたのだが、同じ意欲が「アメリカの世紀」の栄光を終わらせることにもなったのである。二十世紀は、 Kommunizmus の勃興と滅亡の世紀であったが、同時に、アメリカニズムの隆盛と衰退の時代でもあったのである。

### 3 Kommunizmus の興亡

#### Kommunizmus の勃興

二十世紀はアメリカニズムの支配した時代であったと同時に、 Kommunizmus が蔓延した時代でもあった。アメリカは、主に、デモクラシーを背景とした生活文化の魅力によって世界を惹きつけたのに対して、ソ連を中心とした Kommunizmus は、万人を解放し平等な社会をつくるというイデオロギーの魅力によって世界を惹きつけた。二十世紀は、この Kommunizmus の挑戦を受けた世紀でもある。

もともと、二十世紀初頭のヨーロッパやアメリカでは、経済繁栄のもと人々は明るい希望をもっていたから、ロシアに共産革命が起き、それが二十世紀の有力なイデオロギーの源になるだろうとは誰も予測することはできなかった。二十世紀初頭の世界は、ヨーロッパも、アメリカも、そしてロシアさえも、産業主義の発展の先端にあるかに見えるのである。

しかし、そこに矛盾がなかったわけではない。二十世紀初頭の繁栄は、貧富の格差や劣悪な労働条件など、社会矛盾を抱えた上での表面上の繁栄にすぎなかった。さらに、遅れて世界史に登場してきたロシアでは、近代ヨーロッパ化がツァー体制による上からの近代化策によるものであったから、十分な産業資本や企業家も育成されていなかった。ロシアの近代化は封建的後進性を残したままでの近代化にすぎなかったから、そこには多くの矛盾が残存していた。

レーニンが擄取の一掃と階級分裂の廃絶を謳って登場してきたのも、そのような帝政ロシアの矛盾を背景にしている。もちろん、レーニンによるマルクス主義革命が、ロシアの矛盾を解決する唯一の手段であったわけではない。一九〇五年の第一革命によってツァー体制を揺るがすことができたのも、日露戦争でのロマノフ王朝の疲弊という背景があつてのことである。また、一九一七年の十月革命に、レーニンの率いるボルシェヴィキが勝利を収め政権を奪取しえたのも、第一次大戦でのロマノフ王朝の疲弊という背景があつた。歴史は偶然に満ちている。もしも、帝政ロシアが日露戦争や第一次大戦であれほど消耗せず、近代化のための国家改造にもっと適切に対処していたなら、レーニンの共産革命は成功しなかったかもしれない。さらに、その後のソビエト政権による近代化程度は、帝政ロシアによってでも成し遂げられたであろう。従って、ロシア発のコミニズムの蔓延という二十世紀を特徴づける現象も起きなかったかもしれない。歴史に必然というものはない。レーニンのボルシェヴィキ革命が偶然に助けられて成功している面も、見逃すことはできない。

レーニンの考えによれば、当時のロシアでは、社会主義革命を受容しうるほど資本主義も成熟していない、労働者階級も成長していない。しかし、だからと言って、資本主義の成熟を待っていることはできないから、その段階を飛び越して、人為的に労働者階級を代表する革命家集団を形成し、それによって革命は成し遂げられねばならない。この革命家集団によって、労働者や農民は指導され、革命のエネルギーとして組織化されていくのなければならない。労働者や農民の階級意識も、そのような革命的エリートによる教育があつてはじめて成長してくるものであるという。

そのため、レーニンの革命運動では、労働者階級の利益を代表する前衛党が歴史の必然を自覚し、これを積極的に宣伝し、革命に向けて積極的に情勢をつくっていくことになる。従って、このボルシェヴィキ革命が成功した時には、職業的革命家集団が絶対的権力を握る全体主義的独裁制がつけられる可能性は最初からあつたのだと言わねばなら

ない。

こうして、レーニンを指導者とするロシア社会民主労働党の多数派は階級闘争理論に基づき真理を独占して、革命の目的を達成するためのすべての権力を掌握した。しかも、その目的を達成するためには、秘密警察組織による統制から、反対派や批判者の徹底的な粛清まで、手段を選ばなかった。現に、レーニンは、権力を掌握すると、革命目的を達成するために、力を背景にした恐怖政治を開き、富農、資本家、司祭、貴族、さらにボルシェヴィキに対する批判者や反対派を、次々と党の名において粛清していった。このような暴力を背景にして、一人の手にすべての権力が集中する全体主義体制は出来上がったのである。革命後短期間で、土地・工場の国有化、銀行・貿易業務の国営化、農民からの強制穀物抛出、労働者自身による工場管理など、中央統制による経済体制が確立したのも、このような恐怖政治を背景にしてであった。

#### 一 国社会主義の光と影

独裁者スターリンが登場してきたのも、このレーニンがつくった恐怖政治のものであった。スターリンは巧みにレーニンを神聖化し、自らをその後継者とし、自己一個の上にあらゆる権力を集中させて、自らを神格化していった。こうして、彼は自らを社会主義建設の象徴的存在に仕立てるとともに、暴力を中心としたあらゆる国家権力を掌握して、人民を社会主義建設に駆り立てていった。スターリンにおいて、一人の独裁者とそれを取り巻く少数の追従者によってすべての人民が支配される全体主義体制は完成した。この体制のもと、あらゆる団体が巨大な党官僚組織に組み込まれ、政治、社会、経済、文化すべてが、スターリンの命令下で動く極く少数の党指導者のもとで一元的に管理計画されるようになったのである。

かくて、この一元的な計画のもと、社会主義建設のために、各地で工場が建設され、鉱山が発掘され、鉄道が敷設され、集団農場が組織されていった。しかも、人民大衆は、スターリンという神格化された偶像のもと、社会主義建設への熱狂に駆られるように、大挙してこれらの労働に参加したのである。そのため、スターリン時代には、ソビエト・ロシアは急速な経済成長を遂げ、一大工業国家に変貌していった。電力、鉄鋼、機械、自動車など重化学工業の生産力は、短期間のうちに何倍にも増加した。とともに、中央の計画に基づいて、人口は農村から都市へ急激に移動し、都市人口は急増した。

スターリンが目指したものは、ロシアの工業化に他ならなかった。しかも、スターリ

ンは、このロシアの工業化のためには、あらゆるものを犠牲にした。マルクス主義では国家は最終的に消滅すべきものであったが、スターリンのもとでは、社会主義はほとんど国家主義と同じものに変質した。スターリンが繰り返して行なったソビエト・ロシアの国威発揚は、その現われである。また、社会主義は最終的には世界革命を目指すものであって、本来インターナショナルなものであったが、スターリンはこれを捨て、一国社会主義に転じ、ナショナリズム化していった。世界同時革命を目指したトロツキーが排除されたのは、そのためである。

スターリン主義のもとでは、社会主義思想のインターナショナルな面は、逆に、ソビエト・ロシアの対外膨張のためのイデオロギーに変質していった。現に、彼は、第二次大戦中、ヒトラーとの密約によってポーランドに進駐し、フィンランドに進撃し、バルト三国を併合し、東欧諸国を手中に収め、ドイツを分割し、多くの国家を社会主義体制の中に組み入れた。東欧が共産化したのは、スターリンにいわば侵略されたことであった。さらに、第二次大戦後はコミンフォルムを結成して、事実上ソ連圏を形成し、アメリカと世界を二分し、東アジア各国の内戦を援助して、ソ連圏を拡大していった。このソビエト・ロシアの膨張は一種の帝国主義的世界政策であり、ある意味で、ツァー時代以来続けられてきた膨張政策を継承するものであった。そのため、社会主義本来の国際主義は無視され、すべてはソビエト・ロシアの国益のために犠牲にされていたのである。

そればかりか、このスターリンの一国社会主義の建設と対外膨張の背後では、ソ連国民の多大な犠牲があった。スターリンは、社会主義建設という目標のためには、レーニン同様、手段を選ぶことはなかった。スターリンに対する批判者は、革命の同志たりとも、次々と粛清されていった。また、欧米並の工業国家建設というスターリンの野望のために、それに邪魔になった富農、元貴族、軍人、少数民族、宗教活動家や農業集団化を躊躇した農民などは、あるいは銃殺され、あるいは強制収容所へ送られ、あるいはシベリアへ送り込まれた。このスターリン時代の大抑圧による犠牲者の数は、数千万人にものぼったという。スターリンの社会主義建設は、このような大量殺戮における多くの犠牲者を礎にしていた。さらに、一九三〇年代初期の農業集団化政策のために起きた大飢饉での餓死者も含めると、その犠牲者は計り知れない数にのぼる。幾千万の罪なき人々が、飢餓や拷問や殺戮の地獄に追込まれていったのである。共産主義国家という神の国のごとき理想社会をこの地上に建設しようという途方もない幻想は、これを実現

させようとしたとたん、想像も出来なかったような地獄をこの地上に現出させたのである。それは二十世紀の罪であった。

#### コミュニズムの幻惑

遠くの国のことは美しい風景のように見えるものである。スターリンの一国社会主義の目ざましい発展の背後で、そのような生き地獄が演じられているとは、当時の西欧の人々には知るよしもなかった。むしろ、ロシア革命後十年の間は、西欧をはじめ世界のどこでも、ソ連の社会主義はバラ色の未来を約束するもののように思われていた。さらに、その後も、多くの人達が、スターリンの一国社会主義による目ざましい工業化の実績に感嘆されて、ソ連の計画経済の素晴らしさを称讃した。そこには、大恐慌に続く一九三〇年代の経済停滞に対する西側の人々の苛立ちもあつたであろう。それが、社会計画という国家主導の方法に対する期待にもつながつたのである。

そればかりでなく、社会主義が振りまく未来への幻想は、特に西側の知識人達を幻惑し、強力な呪縛力を発揮した。第二次大戦および第二次大戦後の東西冷戦の間も、社会主義は少なくとも西側の知識人の間では広く信奉された。人間は幻想を追い求める動物である。このような一種宗教にも似たイデオロギーの呪縛力によって、社会主義思想は西側世界へも浸透し、二十世紀をコミュニズムの勃興の時代としたのである。

さらに、このコミュニズム思想は、発展途上のアジア諸国にとっては大きな魅力であった。急いで近代化を果たしていくためには、強力な中央集権国家をつくり、上から近代化していく以外にない。この近代化のために、ソ連の社会主義の方法は魅力ある方法として、アジア各国に受け入れられていったのである。かくて、第二次大戦後、中国、北朝鮮、ベトナム、ラオス、カンボジアと、共産革命の波は大きな広がりを見せ、ソ連はこれら共産圏の盟主となった。

急激な近代化を求めるアジアの後進国にとっては、暴力的に旧秩序を破壊し、速やかに巨大な中央統制国家を形成する共産主義の方法は、魅力的なものと映つたのである。さらに、共産主義の階級闘争のイデオロギーも、先進国の搾取から一刻も早く解放されたいと願つていた後進国には適つていた面もあつたであろう。このこともあつて、共産主義は、アジアさらにアフリカの後進国に受け入れられていったのである。アジア・アフリカの後進国は急いで貧困から脱出し、自立しなければならなかった。そのためには、ヨーロッパ諸国が何世紀もかかって成し遂げたことを、短期間で成就しなければならな

かった。そのモデルを提供したのがソ連だったのである。ソビエト・ロシアが実現したマルクス主義国家は、アジアの後進国に急激な経済発展を約束した。二十世紀のアジア・アフリカの指導者達が、ソ連の掲げるイデオロギーに幻惑されたのはそのためである。

毛沢東による共産中国の樹立もその一つであった。日中戦争をくぐり抜け、国民党との内戦にも勝利を収め、一九四九年、中華人民共和国を樹立した毛沢東は、人民公社方式による大躍進政策から文化大革命まで、一貫して共産主義による近代化を目指してきた。マルクス主義を独自に解釈し、プロレタリア革命理論を農民に適用した毛沢東は、農業国家であった中国をイデオロギー上も社会組織上も掌握した。

だが、この毛沢東の独裁による中国の共産革命も、大躍進政策に現われているように、その目的とするところは、自国の農業と工業部門での近代化に他ならなかった。だから、本来インターナショナルであったコムニズム思想がナショナル化していったのも、不思議ではない。近代化は、スターリンのソ連でそうであったように、毛沢東の中国においても、ナショナルイズムと深く結びついていった。大躍進政策が終息するとともに、一九六〇年前後から起きた中ソ論争は、その現われであった。毛沢東は、ソ連の国益追求の道具と化した国際共産主義運動に反発し、それに代わって、中国が社会主義のモデルとなるべきだと考えた。中国は、それを、毛沢東思想と人民公社方式に求めたのである。一九六六年から約十年間続いた文化大革命も、そのような考えに基づいてのことであつた。

#### コムニズム国家の解体

西欧諸国の知識人やアジア諸国を幻惑したスターリンの一国社会主義の背後に、おびただしい数のソ連国民の犠牲があつた事実を明らかにしたのは、フルシチョフであつた。フルシチョフは、一九五六年の秘密報告でスターリン批判を開始するとともに、一九六一年にも公然とスターリン批判を發動した。強制収容所生活を描いたソルジェニーツィンの『イワン・デニーソヴィッチの一日』が大きな反響を呼んだのも、このスターリン批判の流れがあつたことであつた。

フルシチョフの行なつた仕事は、官僚機構の改革、アメリカとの平和共存路線の実現などであるが、この間人類初の人工衛星の打ち上げにも成功し、ソ連の社会主義体制はなおその力を保持していた。現に、フルシチョフは、一九六一年の党大会で、七〇年ま



でにアメリカに追いつき追い越し、八〇年には共産主義の時代に入るといふ空想的な綱領を採択した。

ところが、実際には、ソ連は、ブレジネフ時代の後半一九七〇年代に至って、アメリカを追い越すどころか、経済的にも社会的にも停滞していった。腐敗した党官僚による締めつけはますます強くなり、官僚組織に巣くう特権階級がはびこり、経済は停滞せざるをえなかった。ソ連の国民総生産も急速に落ち込み、技術革新でも遅れをとり、ソ連の産業は恐るべき非効率を露呈していった。衛生状態も悪化し、平均寿命も下がり、環境破壊も目増しに進行していった。さらに、ソ連はアフガニスタン侵攻にも失敗し、膨大な軍事費が消費経済を圧迫して、社会不安は広がっていった。ソ連も、アメリカ同様、防衛線は伸びきっていたのである。ソルジェニーツインが国外追放を受けたのも、このブレジネフ時代の後半であった。それはスターリン主義の復活を思わせた。

一九八五年に登場してきたゴルバチョフが、グラスノスチ（情報公開）、ついでペレストロイカ（再編）政策を掲げ、改革に乗り出したのは、このようなブレジネフ時代の沈滞を打破しようとしてのことであった。このグラスノスチ政策によって、腐敗官僚の職権乱用や官僚組織の非効率などがあらさまにされるとともに、スターリン時代の弊害も見直された。さらに、ゴルバチョフは、ペレストロイカ政策によって、官僚主義を是正し、権力を分散させ、停滞する経済を活性化させるために、市場原理を導入しようとした。

しかし、これらの改革路線は時すでに遅く、高級官僚の特権に対する民衆の不満を煽り、消費財の不足への不満に拍車をかけるだけであった。それでいて、民衆は、改革路線に沿って経済再建に乗り出そうとはしなかった。それは、一層の経済の混乱を招くだけであった。

そればかりか、この改革路線は、それまでソビエト体制によって押さえ込まれていた連邦内での民族問題を露呈し、バルト三国をはじめ多くの民族国家の自立への要求が高まり、各共和国はこぞって主権宣言を行なうに至った。さらに、それまで度々の弾圧にもかかわらず抵抗の姿勢をみせていた東欧諸国が、一九八九年、ソ連軍の介入がないことを確認するや、次々と共産主義を捨て、民主化という名においてソ連から離反、民族自立に成功し、一九九〇年、東西ドイツも統一されるに至った。東欧諸国は第二次大戦でソ連に侵略され、その後、一九五六年のポーランド、ハンガリーの民族主義運動や一九六八年のチェコの民主化運動などで抵抗を示していたが、その度ごとにソ連軍によっ

て弾圧されていた。だから、ソ連軍の介入さえなければ、離反するのは早かったのである。

こうして、ゴルバチョフの改革路線は、その実を上げる前に、ソビエト体制の解体を招くことになった。ソ連社会は、すでにロマノフ王朝末期のように、改革して建て直すこととすることがかえって崩壊を招く状態に達していたのである。かくて、一九九一年ソビエト連邦そのものが解体し、一党独裁と国有制を基本とした社会主義体制は七四年の幕を降ろした。何事も永続するものはない。共産主義国家の建設という二十世紀の大実験は、このようにして、大いなる幻滅に終わったのである。

ソ連は、多くの無理をすることではあるが、その中央統制的な計画経済によって、少なくとも重化学工業までは近代化を果たし、アメリカに並ぶ超大国としての地位を維持してきた。ところが、この計画経済という名の命令経済は、その後の情報化革命にそぐわず、この二十世紀末の技術革新に立ち遅れてしまった。そのため、農業経済から素材産業、消費財産業、流通などの諸部門で、その非効率を暴露してしまった。さらに、膨大な軍事費と軍事産業への偏向が国民生活を圧迫し、その不満が党の特権官僚に対する不満とも現われ、社会の活力が失われ、最終的に限界に達してしまったのである。なるほど、中国では、文化大革命の失敗を契機に、市場原理と競争原理を考慮した経済開放路線が鄧小平によって敷かれ、中国は、政治改革を先行させたソ連とは違った道を歩んだ。しかし、ここでも、自由化された経済原理が政治の原理をのみみこんで、一党独裁と国有制を基本においた共産主義は、大きく変質し溶解する方向に進んでいる。

#### コミュニズムの滅亡

資本家階級を労働者の革命によって打ち倒し、労働者だけによる国家を形成し、私有制を廃止して、共有制のもと共同して生産に当たれば、搾取のない社会が出来る。そして、能力に応じて働き、必要に応じて分配を受けられる自由で平等な社会が出来る。このような段階に至って、はじめて人類は解放されるであろう。このように語って、地上における神の国のことき理想社会の実現を謳ったマルクスの予言は、一種の宗教の教義にも似て、あるいは詐欺師の甘言にも似て、人々を惹きつけるものであった。特に、資本主義の矛盾が露呈していた十九世紀末のヨーロッパでは、不満をもつ労働者をはじめ知識人をも巻き込んで、人々に未来への希望を懐かせた。さらに、ロシアのように遅れて近代化の道を歩みだした矛盾の多い社会では、その社会矛盾を解決していくために、

マルクス主義はそれなりに大きな力をもった。ヨーロッパでもロシアでも、マルクスの社会主義思想は、虐げられた者の未来を約束する教義として、大きな魅力をもったのである。

資本家階級を倒して労働者階級の独裁を打ち立てねばならないという社会主義者の掲げるイデオロギーは、社会正義に満ちており、大衆の嫉妬心を煽るのに十分であった。それは、単純なスローガンから、人類の歴史や社会を解明する堅固な理論まで、あらゆるものを用意していたから、大衆から知識階級まで、あらゆる層に対して大きな呪縛力を発揮した。一種の詐欺にかかったようなものではあったが、二十世紀はこの社会革命理論の巨大な実験の世紀であった。

だが、その実験の結果は、人民を代表する党によって人民が完全支配される全体主義国家をつくることになってしまった。プロレタリアートによる革命や独裁は、プロレタリアートを指導する党による革命や独裁に変貌し、共有制は国有制に変貌し、共同生産という理念は、巨大な官僚体制による計画管理に変貌してしまった。そのため、現実に実現された共産主義社会は、人民大衆が国家により搾取される自由も平等もない社会になってしまった。それどころか、この国家は、一人の独裁者にあらゆる権力が集中し、それに少しでも批判的な者があれば、次々と粛清されていく恐怖政治の支配する国家にさえなってしまったのである。

現に、レーニンやスターリンや毛沢東などの独裁によって粛清されていった犠牲者はおびただしい数にのぼった。革命期の処刑者、革命後の処刑者、元軍人、役人、貴族、地主、僧侶、資本家、富農、自営農民、強制移住による死亡者、粛清された共産党員など、ソ連や中国や東欧において命を奪われた犠牲者の数は幾千万人にも達した。それが、二十世紀における Kommunismus の実験のために供された人身御供だったのである。さらに、強制収容所で長期間悲惨な生活を送らねばならなかった人々、迫害されたそれらの家族の痛苦を思うなら、この実験に払われた犠牲はあまりにも大きかった。ソルジェニーツインが『収容所群島』の中で示そうとしたことは、国家によつていとも簡単に大量殺戮が行なわれるこのような体制に対する告発であった。それは、歴史上かつてなかった途方もない犯罪であった。

共産主義国家ではイデオロギーが絶対の力をもち、また、このイデオロギーを権力によつて所有している独裁者が強大な力をもつから、その意図に反した者は容易に人民の敵というレッテルを張られ、抹殺される。たとえ抹殺されなくても、この国には、指導

者を自由に批判する言論・思想上の自由はない。それどころか、人民は上からの宣伝によって操作され、健全な判断力や批判精神を奪われ、国家の奴隷のような状態に陥られて、自由を剥奪されていく。

共産主義国家の指導者は、自分達こそ真理を所有しており、自分達が信奉しているイデオロギーとそれに基づいて行なわれる支配は絶対に正しいと考えていたから、それに反する考えや行動は力によって排除しなければならぬと考えた。そのような独善性から、粛清という悲惨な事態も起きたのである。このような恐怖の支配する社会では、もはや指導者を批判する者がいなくなるから、指導者はどこまでもその権力の座に居座りつづける。そして、彼らは、その権力を利用して特権階級を形成し、権力を乱用し、権力闘争に明け暮れる。

他方、人民の方は、上からの計画に基づいて動かされるだけだから、次第に生産意欲を失い、そのため生活物資にさえ事欠くようになってしまう。国家のあらゆる部門で硬直化した官僚機構のみが巨大化し、国民はこの硬直化した官僚機構に管理され計画される畜車にすぎなくなる。このような体制のもとでは、国力は衰退するであろう。共産国が農業生産でも絶えず停滞し、工業技術でも立ち遅れたのは、そのためである。こうして、強力な権力機構をもった全体主義国家も、その強力な権力機構のゆえに、限界に達してしまっただけである。

資本主義の矛盾を正し、人類を解放しようという理想は、逆に、自由も平等もない抑圧社会を生み出した。神の国のごとき理想社会を建設しようとして、逆に、想像もできなかったような地獄をつくりだしてしまった。合理性と倫理性に裏づけられた社会をつくらうとして、逆に、不合理で非倫理的な圧政を生み出してしまった。労働者を代表する誇り高い党が指導に当たるはずであったのに、その党自身が労働者を抑圧する機構になってしまった。これほどの歴史のアイロニーもなかったであろう。これほど愚かなこともなかったであろう。

確かに、歴史や社会は人間がつくるものではあるが、しかし、それは人間の考えている通りには動かすことができない。人間の歴史や社会は不合理に満ちており、理論通りに動かしていくことはできない。もしも、それを理論通りに動かし改造していこうとすれば、そこに、すかさず人間の権力欲や支配欲、憎悪や嫉妬、自惚れや狂信など様々の不合理なものが入り込んできて、結果は悲惨なものになってしまう。

コミュニズムは、近代の矛盾の根源を私有制というところにみて、これを廃止して共

有制の社会をつくれれば、真に自由で平等な社会が出来、人間性も最高に完成されると考えた。確かに、それは、理想社会の建設によってこの世の矛盾はすべて解決されるという幻想を人々に懐かせ、その教義の実現のために人々を駆り立てるだけの力をもっていた。しかし、人間のつくりだす社会は理論の命ずるようにも動かないし、指導者が計画した通りにも動かない。人間の手では、人間の歴史は動かすことができないものである。人間の手で人間の歴史を計画的に動かすことができると考えたところに、この二十世紀の大きいなる実験の誤りがあつたと言えるであろう。この誤りに気づくのにさえ、愚かなことに、人類は七十数年の歳月を必要とし、おびただしい数の人命の犠牲を必要としたのである。この悲惨な抑圧の中で死んでいった人々の心情を思えば、コミユニズムの勃興と滅亡を目撃した二十世紀は、愚かな世紀であつたと同時に、大いなる悲しみの世紀でもあつたと言ふべきであろう。

#### 4 アジア・アフリカの自立と苦惱

##### 自立への道

二十世紀は、二度にわたる世界大戦を通してヨーロッパ勢力が後退、その代わり、アメリカとソ連が抬頭して両者が対立した時代だと考えられている。しかし、そればかりではない。それ以上に、二十世紀を特徴づける事件は、二度の大戦によるヨーロッパ勢力の後退に乗じて、それまでヨーロッパ勢力によって植民地化されていたアジア・アフリカ諸国が次々と独立を果たしていったことであろう。そのことによって、四世紀ほども続いたヨーロッパの世界支配に終止符が打たれたからである。

なるほど、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、ヨーロッパの植民地主義は極限に達していた。だが、この極限に達した時、アジア・アフリカの人々はヨーロッパ勢力に対して反撃を開始したのである。そして、二十世紀、二度の大戦を経てヨーロッパ勢力が疲弊すると、それに比例して、アジア・アフリカ諸国の自立への動きはもはや止めることの出来ない勢いとなり、特に第二次大戦後、数多くのアジア・アフリカ諸国がヨーロッパ勢力から独立していった。二十世紀の歴史を振り返るとき、二十世紀を特徴づけるその他のいかなる事件よりも、アジア・アフリカのヨーロッパ勢力からの自立という事件ほど重要なものはないであろう。ヨーロッパに対するアジア・アフリカの反撃こそ、二十世紀の歴史で最も特筆すべき事柄であつた。

アジア・アフリカ諸国の中には、インドやインドネシアのように、遠く十七世紀から徐々にヨーロッパの植民地にされていったところから、アフリカ諸国のように、近く十九世紀末から二十世紀初めにかけて分割されたところまで様々である。だが、アジア・アフリカ諸国では、どこでも、ヨーロッパの植民地経営の中に組み込まれるという仕方では、ヨーロッパの文物は流れ込み、ヨーロッパの近代文明はかなりの程度浸透してもいい。もともと、それは植民地各国の伝統的生活様式を破壊するものであったから、それに対する反抗が、十九世紀末、特にアジアおよび中東諸国を中心に、植民地政府に対する反乱という仕方で見られた。それが、アジア・アフリカ諸国のヨーロッパ植民地勢力に対する最初の反撃の試みであった。この反乱は、大概の場合ヨーロッパ植民地勢力の強力な軍事力の前に鎮圧されてしまった。だが、その失敗の反省から、自分達も近代的な政治社会技術を身につけて、それによって自立していかなければならないという考えが出てきた。このどこまでも戦おうとする闘志と勇気が、やがて独立達成へと実を結んでいくのである。

例えば、十九世紀末インドで国民会議派が結成され、その運動がやがて自治要求につながり、反英色を強めていったのも、その一つの例であろう。事実、一九〇五年、「ベンガル分割令」によって宗教的対立をベンガルに持ち込み民族運動を抑えようとした老獪なイギリスに対して、国民会議派は、イギリス製品のボイコットをはじめ、国産品愛用（スワデシ）運動と自治（スワラジ）要求運動を決定、かえってこの運動は盛り上がりつつあった。それに対して、イギリスは「集会取締り条例」を布いて弾圧したが、必ずしもこの運動を抑え込むことはできず、結局ベンガル分割は取り消されることになったのである。

また、エジプトでも、十九世紀末から二十世紀初めにかけて、イギリスの支配が強化されるに従って、反英感情がわきあがり、留学生達が先頭に立って、イギリスへの反抗が試みられた。彼らは、ヨーロッパでの教育によって自由・平等の思想を学んだリーダーであったと同時に、敬虔なイスラム教徒でもあった。このような自由主義的・民族主義的反英主義者の一人であったカメルは、国民クラブを再編成して国民党を組織し、イギリス軍撤退、憲法制定、独立議会の設立などを要求した。このような先駆的な運動が、第二次大戦後のナセルによるエジプト革命につながっていったと言える。

## 第一次大戦後

しかし、第一次大戦前の抵抗運動には自ずと限界があった。ヨーロッパ諸国は、なお軍事力においても、政治力においても、経済力においても、絶大な力を保持しており、いかなる抵抗運動でも容易に鎮圧し、懐柔しえたからである。このヨーロッパ諸国の絶大な力が弱体化したのは、第一次大戦を境にしてであった。第一次大戦で、ヨーロッパ諸国は互いに死力を尽くして戦い、互いに疲弊して、急激に力を失っていった。そのため、ヨーロッパ諸国のアジア・アフリカ支配にかけりが生じ、それはますます拡大していった。それどころか、イギリスなどは、第一次大戦でドイツ、トルコと戦うために、中東諸国に将来の独立を約束することによって参戦させ、戦線を有利に導こうとさえしたのである。

さらに、第一次大戦後のパリ講和会議では、アメリカ大統領ウィルソンが民族自決の原則を提唱し、アジア・アフリカ諸国の人々にも自立への希望をもたせた。もともと、ベルサイユ体制では、ヨーロッパ諸国の策動のために、この原則はヨーロッパの一部地域にのみ適用されただけで、ヨーロッパ各国の植民地に適用されたわけではない。しかし、それでも、これは、アジア・アフリカ諸国の民族自決運動に弾みをつける役割は果たしたのである。また、一九一七年、革命に成功したレーニンは、第一次大戦後の世界について、アジア・アフリカの諸民族は帝国主義支配から離脱すべきであることを提唱していた。これも、ヨーロッパの植民地支配に苦しんでいたアジア・アフリカ諸国にとっては勇気を与えるものであった。大戦が終わってみると、ヨーロッパ諸国が世界のあらゆることを決定する時代は、すでに過ぎ去っていたのである。

しかも、アジアでも、アフリカでも、留学を通してヨーロッパの近代教育を受けた指導層が育ち、彼らは、帰国すると、自由・平等の思想や民族独立に関する新しい考えを鼓吹し、多くの賛同者を得つつあった。皮肉なことに、アジア・アフリカの自立運動に対して思想的にも政治的にも示唆を与え啓蒙したのは、ヨーロッパ自身だったのである。

例えば、エジプトでは、第一次大戦後の一九一九年にワフド党が結成され、エジプトの完全独立を求めて全国的な反英運動が起き、その結果、一九二二年、イギリスは形式的にはあるがエジプトの独立を宣言せざるをえなくなった。さらに、一九一九年にはアフガニスタンが独立し、一九二一年にはレザー・カーンのクーデタが成功してイランが自立し、一九三二年にはイブン・サウドによるサウジ・アラビア王国が成立し、同じ年イラク王国が独立した。これら中東諸国の自立は、第一次大戦でのヨーロッパ諸国の弱体化が前提になっている。

インドの独立運動も、第一次大戦後は、ガンジーを中心として以前にも増して盛り上がった。一九一五年に南アフリカからインドに戻ったガンジーは、会議派とともに、サティヤー・グラハ（真理の保持）と名づけられたインド大衆に根差した非暴力不服従運動を展開、一九一九年に行なわれた同盟罷業が各地で成功した。アムリツァーの大虐殺でもインド人の憤激は頂点に達し、ガンジーは会議派を指導して反英不服従運動を全土に渡って展開した。その後、ガンジーの逮捕によってこの運動は一時下火になったが、一九二九年、会議派は完全独立を要求、ガンジーは再び大衆の行進など不服従運動を展開、運動は盛り上がった。

中国でも、一九一一年の辛亥革命で、孫文が三民主義を掲げて清朝を倒し、すでに中華民国を樹立することに成功していたが、その後後退。第一次大戦後の一九一九年、五・四運動で排日運動とベルサイユ条約反対運動が盛り上がったのを機会に、中国国民党を結成し、革命運動を続行した。五・四運動は中国革命の大きな転機となったと言えるであろう。第一次大戦が終わりパリ講和会議が開かれた一九一九年は、自立運動の盛り上がった年として、中国でも、インドでも、中東でも、互いに運動していたのである。しかも、このような時代であったからこそ、多くの独立の英雄も生まれえたのである。

#### 第二次大戦以後

アジア・アフリカ諸国の独立の動きは、第二次大戦中および第二次大戦後さらに加速され、二十世紀の大きな潮流を形づくった。第二次大戦で、再度熾烈な兄弟殺しをして、ヨーロッパ諸国が無残な姿をさらけ出した時、ヨーロッパ諸国によって植民地化されていたアジア・アフリカ諸国は、まるで屍から去るように独立を果たしていった。相手が弱くなつてからの戦いは成功する。疲弊しきつたヨーロッパを踏み越えて、アジア・アフリカ諸国は次々とヨーロッパの軛から解放されていったのである。このことによって、ヨーロッパはさらに世界史への影響力を失つていった。

しかも、このアジア・アフリカの自立は、ヨーロッパ近代文明を受容し略奪することによってであった。それは、民族主義（ナショナリズム）によるヨーロッパへの反逆であったが、しかし、同時にヨーロッパ的な近代国家の樹立を目指すものでもあった。もともと、ナショナリズムはヨーロッパ近代の国民国家の精神的支柱であったが、この同じナショナリズムを、ヨーロッパによって植民地化されていた国々が略奪していったのである。



現に、第二次大戦が終結した一九四五年にはインドネシアが独立を宣言し、一九四七年にはインドとパキスタンが独立し、一九四八年にはビルマ（ミャンマー）が独立し、一九四九年には中華人民共和国が成立し、一九五四年には、エジプトが、ナセルの革命によって名実共にイギリスの支配から離脱した。さらに一九五七年にはガーナが独立し、六〇年代にかけてアフリカ諸国が相次いで独立していった。

アジア・アフリカ諸国二十九カ国が参集して、一九五五年にインドネシアのバンドンで開かれた第一回アジア・アフリカ会議は、アジア・アフリカ諸国のヨーロッパからの自立を宣言するものであった。この会議で、ヨーロッパの支配に対する明確な拒否と植民地主義の終焉が宣告された。ヨーロッパ諸国が、ユーラシア大陸の極西地域で、血で血を洗うような内部闘争を繰り返しているうちに、世界史の舞台は大きく回転して、状況は一変したのである。

このアジア・アフリカ諸国の独立に至る道は様々であった。例えば、第二次大戦中のインドでは、イギリスに協力して第二次大戦に参戦し、その見返りとして自治を獲得しようとする派、ガンジーのように、再びイギリスに対して不服従運動を展開する派、さらに、チャンドラ・ボースのように、日本と協力してインド国民軍をつくりイギリス軍と戦おうとした派など、多様な派が多様な行動をとっている。しかし、これらの動きは、インドの独立という同じ一つの目的に向かって動いていた。そのような様々の努力があつて、はじめて、インドは第二次大戦後の独立を勝ち取ることができたのである。

インドネシアでも、一九四二年に進出してきた日本によってオランダ勢力は一掃され、インドネシア国民党を率いていたスカルノやハッタを中心に、独立への要求が高まり、日本は、少し遅れてではあるが、独立を承認した。第二次大戦後復帰してきたオランダ軍も、インドネシア人民の独立への情熱の前に撤退せざるをえなかった。一九五五年にスカルノが開いたバンドン会議は、その成果であった。

このアジア地域での独立の動きは中東にも及び、イギリスからの実質的な独立とアラブ世界の統一を目指したナセルによる一九五四年のエジプト革命となって現われた。さらに、この運動は一九五六年のスエズ運河国有化宣言に発展、軍事出動をしたイギリスとフランスは、アメリカの圧力のもと撤退せざるをえなかった。

このエジプトでの動きは、さらにアフリカ諸国にまで及び、アフリカ諸国は、一九五七年から一九六〇年代にかけて、次々と独立を達成していった。このアフリカの独立運動は、アジアと比べれば相当遅れたが、それでも、第一次大戦前の北部・西部アフリカ

から始まり、第一次大戦後次第に高まり、第二次大戦後のヨーロッパ諸国の疲弊とともに盛り上がりつつあった。一九五〇年代には、北アフリカ四カ国の他、ガーナとギニア、一九六〇年には、ナイジェリアなど十七の独立国、さらに、一九六八年までに十五カ国の独立国が生まれた。これらのアフリカ諸国の独立を指導した指導者は、ガーナを独立に導いたエンクルマなどに代表されるように、欧米諸国で知識を獲得し政治的技術の身につけた世代であった。ここでも、独立がヨーロッパ近代の略奪によって成立していることが窺える。

二十世紀初頭一九〇〇年代まで、過酷な争奪戦を演じつつ、ヨーロッパ諸国は地球全体を包み込むほどまでに植民地を拡大した。それが半世紀ほどのうちにほとんど跡形もなく消えてしまい、それぞれヨーロッパの軔から離脱してしまおうとは、誰も予想しなかったに違いない。

しかし、そのような可能性は、もともと十九世紀以来のヨーロッパの植民地経営そのものの中に内包されていたことだと言わねばならない。確かに、十九世紀以来、ヨーロッパは産業技術文明を発達させ、それを運用するための政治的・社会的技術を開発し、その力によって、アジア・アフリカを次々と植民地化するとともに、その支配を強化してきた。その力は、誰も抗することのできない強力な力のようにみえた。だが、ヨーロッパ諸国は、植民地支配を強化し、そこから利益を最大限上げるために、植民地のより合理的な経営を試み、ヨーロッパ本国で開発された近代的な機械工業、運輸・通信施設などを、次第に植民地各国へ移し替えていった。また、植民地各国の現地人エリートに留学させ、有能な植民地官吏を育てようとしたのである。このことが、植民地各国の人々がヨーロッパの近代文明に触れ、その背後にあるヨーロッパの科学技術、政治・社会の仕組み、思想などを学ぶことを可能にした。そのような物質的・精神的影響を通して、ヨーロッパの産業技術や近代的運営の技術は、アジア・アフリカの植民地にもかなり早い速度で伝わっていった。

従って、そのようなところから、今度はヨーロッパと同じような近代的な国家をもちたいという要求が植民地そのものから出てくるのも、不思議はなかった。歴史は皮肉なものである。アジア・アフリカの植民地の離脱の種を播いたのは、アジア・アフリカを植民地化していたヨーロッパ自身だったのである。アジア・アフリカの諸民族はヨーロッパ近代の技術や制度や思想を学び、逆に、それをヨーロッパからの自立の手段にしていた。それが、アジア・アフリカ諸国の独立を可能にした最大の理由である。

なるほど、ヨーロッパの植民地からの離脱はそれほど容易な道ではなかった。その長い苦難の過程では、多くの人々が犠牲になっていったことを忘れることはできない。現に、十九世紀までの反抗はほとんど失敗に終わっている。しかし、今から振り返ってのことではあるが、二十世紀になって、ヨーロッパ自身が二度の大戦で自壊すると、自立への道は意外と容易につかめしたのである。

#### 自立の苦悩

しかし、アジア・アフリカも、ある意味で独立までが華であった。創始そのものは容易でも、それを発展させることは容易ではないからである。アジア・アフリカ諸国も、独立に向かって運動を盛り上げていく間は、それなりに明確な目標があり、共通の敵もあつて強力な団結も得られた。だが、一旦独立を勝ち得、目的を達成すると、その後の自国の自主的な運営は、どこのアジア・アフリカ諸国も難渋を極めた。光あれば影があり、そこには多くの矛盾が内包されていた。

なかでも、近代化と伝統の相剋の問題は、アジア・アフリカ諸国にとって深刻な問題を投げかけた。もともと、ヨーロッパの植民地から独立しようとしたこと自身が、ヨーロッパ風の近代国家を形成することを目的にしていたから、アジア・アフリカ諸国は、独立とともに、政治システムの中央集権化、経済の活性化、軍の組織化など、近代化政策をすぐさま実行に移した。しかし、それは、単に政治、経済、軍事のみにとどまらず、ただちに文化・精神的な問題を引き起こした。あらゆる方面での急激な近代化を実行するには、伝統的な社会構造や生活形態、思想をも根本的に変えていく必要があつた。しかし、そのような文化・精神的方面まで近代化していくと、当然のことながら伝統的根幹は崩れ去り、国家のアイデンティティまであやふやなものになりかねない。近代化すれば伝統が崩れ、伝統を守ろうとすれば近代化できないという矛盾に、アジア・アフリカの各国は直面したのである。

この伝統と近代の問題は、独立運動の当初からアジア・アフリカ諸国の抱えていた問題であるが、独立運動の過程では、この矛盾は比較的隠蔽されていた傾向がある。というわけは、国家の独立のためには、国民のアイデンティティを確立し、それを独立のエネルギーに仕立て上げていく必要があるが、その面のことは各国の伝統的な精神に訴えることができたし、伝統精神はそれに十分応えた。他方、独立の目的は近代国家の建設というところにあつたから、近代と伝統は目的と手段で分業しえたのである。従って、

独立運動の過程では、近代化と伝統の矛盾はそれほど明確な形では現われず、むしろ、両者は互いに補充し合って独立への潮流をつくっていったと言えるであろう。

例えば、インドの独立運動の過程でも、伝統的精神の方はガンジーが代表し、近代精神の方はネルーが代表し、両者はそれほど矛盾することなく相補っていた。ガンジーは宗教的信念に基づく徹底した伝統主義者であった。彼は、西洋近代の機械文明は人間を毒すと考え、インドの伝統的な生き方や思想に自らの運動の根拠を置いていた。そして、それは、独立にとつて必要な民族的同一性の自覚を促し、独立の精神的エネルギーにしていくには適っていた。しかし、同時に、インド独立の目的は西洋風の近代国家の建設であったから、政治、経済、社会、軍事あらゆる面での近代化が必要であった。この近代的な面はネルーが代表した。西洋主義者であった彼は、ガンジーとは反対に、インドの伝統社会は遅れていると考え、インドは伝統の桎梏を離れて急いで近代化しなければならぬと考えた。それゆえに、彼はイギリスとの協調をはかり、議会参加に同意して、自治を獲得していこうとしたのである。インドの独立運動の中では、この互いに相反するガンジーとネルー、伝統主義と近代主義が比較的うまくみ合せて動いていたと言えよう。

ところが、いざ独立して近代国家の建設段階に入ると、近代化と伝統の矛盾が露呈してくる。インドでも、独立後、ネルーとその後継者によって近代化政策が打ち出され、農業生産の向上や運輸・発電部門の強化、さらにそれらを基盤にした重工業化が推進されていくと、それら近代化の流れとインドの伝統文化とが矛盾し、停滞を余儀なくされたのである。インドの底流にあるヒンズー教の伝統、残存するカースト制、多様な言語や宗教など、伝統文化と近代化策とが絶えず齟齬をきたし、近代化は困難な道を歩まねばならなかった。この停滞を克服してより高度な近代化を果たしていこうとすれば、これらの伝統文化を破壊していかねばならないが、破壊すれば民族的同一性を失ってしまうという危険性につかつたのである。共通の敵を失って、伝統と近代は仲違いをしたのだとも言えよう。

#### 近代化の矛盾

人生同様、歴史はいつも陽の当たる道を用意しているとは限らない。第二次大戦後、独立を勝ち取り、植民地主義に終止符を打つと、すぐにアジア・アフリカは新しい困難な問題を抱えた。ネルーやナセル、スカルノなどの華々しい外交の背後には、近

代化に伴う国内の難しい問題が山積していた。アジア・アフリカ諸国が、米ソの冷戦つまり東西問題の狭間で、あるいは自由主義陣営寄りになったり、あるいは共産主義陣営寄りになったり、大きく振幅を描きながら右往左往しなければならなかったのも、近代化に伴う困難から来ていたであろう。アジア・アフリカ諸国は、産業を育成して生活水準を上昇させ、自国を近代国家に仕立て上げていくために、自由主義と共産主義という二つの近代主義のどちらか一方、あるいは両者の中間などを選択しなければならなかったのである。だが、どれを選択するにしても、近代化と伝統の矛盾を抱えて、アジア・アフリカ諸国は苦悩せざるをえなかった。

アフリカ諸国の苦悩はそれを代表している。近代化は、あまりにも伝統の力が強すぎても遅れてしまうが、しかし、アフリカ諸国のように伝統の基盤が弱すぎても、かえって混乱し、近代化は遅れてしまう。アフリカ諸国の独立は、アジア諸国の独立の余勢を借りて、意外と容易にしかも短期間に完了した。しかし、いざ独立してみると、独立直後の熱狂はすぐに醒め、厳しい現実にあつからざるをえなかった。

確かに、アフリカ諸国の民族主義運動も、そのエネルギーを自分達の歴史的伝統から得ていた。そして、それとヨーロッパ近代の要素を融合させて、新しいアフリカの近代国家をつくらねばならないと人々は考えていた。しかし、そのアフリカの伝統は、十六世紀のポルトガル人の進出以来、イギリスをはじめヨーロッパ各国が行なった植民地支配によって寸断されてしまっていた。そのため、アフリカの伝統はアフリカ諸国の近代化に十分貢献できなかった。さらに、アフリカ諸国の独立が旧ヨーロッパの植民地の領域の範囲内での独立だったために、独立国家という近代的領域と言語や文化など民族の伝統的領域とが齟齬をきたしてしまった。そのため、アフリカの場合、伝統文化から近代化の知恵を得てくるのが困難であった。また、ヨーロッパの植民地支配が過酷を極め、近代国家運営のための十分な官僚組織も育たなかったため、近代国家の形成と維持そのものが困難を極めざるをえなかった。部族間闘争や絶えざる軍部のクーデタなどでアフリカ諸国が停滞してしまっただけで、そのためである。アフリカ諸国が飢餓や貧困などで悲惨な状況に陥ったりしているのは、自然環境の変化ばかりでなく、そのような人為的原因にもよるのである。

東西問題が終焉した二十世紀末の段階では、これら近代化に苦悩するアジア・アフリカ諸国と近代化を成し遂げた先進諸国との矛盾、つまり南北問題が、世界史を動かす重要な問題になっている。しかも、これは、おそらく二十一世紀の世界史を動かす最も大

きなモチーフになるであろう。

なるほど、二十世紀末のアジア地域は、近代化と伝統のバランスを比較的うまくとって、経済発展の道を歩み、近代化に成功した。そればかりか、この地域はすでに世界経済の重心の一つにさえなっている。しかし、今日のアジア地域が推進している経済成長の原理は、どこまでも、ヨーロッパ近代が生み出した産業技術文明の原理に基づいている。とすれば、ヨーロッパ近代文明が持っていた多くの弊害は、アジア地域でも免れることはできないであろう。現に、アジア地域でも、近代化が進み、文明が爛熟すればするほど、人心は荒廃し、社会倫理も混乱してきている。アジアの時代にも、近代化に伴う多くの弊害や矛盾が内包されているのである。

アジア・アフリカの独立は、もともと、ヨーロッパ並の近代国家をつくるために、ヨーロッパと同じ政治・社会システムをつくり、生産を向上させ、軍事力をつけていこうとした動きなのだから、当然のことながら、ヨーロッパ近代文明がもっていた弊害をものみこんでしまう。科学技術文明が進展する分、自然環境は破壊され、伝統社会も壊されて、従来の美風は失われていく。次第に大衆の欲望は肥大化し、国家はそれにのみこまれていく。大衆を喜ばすための低俗な文物が蔓延し、文化は低落し、人々の精神は荒廃する。プラスはマイナスを伴う。アジア・アフリカ諸国も、近代ヨーロッパ化を決断した時から、それがもたらす患沢とともに、同時にその弊害をも背負ったのである。患沢のみ得て、弊害を背負わないでおくことはできない。近代化に成功した東アジアも、近代化に成功したがゆえに、近代の暗い影の中に包み込まれてもいくのである。

かつて、中国の孫文は、三民主義を掲げて中国の自立と近代国家化を目指した。三民主義のうち、民族主義は、ヨーロッパ諸国からの自立を目指すものでもあったから、これは実現されたと言える。だが、民権主義や民生主義は、少なくとも大陸では実現されなかった。さらに、この三民主義の背景にあった伝統的儒教精神が、実際には生かされなかった。三民主義は中国固有の道徳の中に基礎づけられ、その道徳に基づいて民族の統一と各階層の大同を実現しなければならないというのが、孫文の考えであった。しかし、この理想は、今日の中国では必ずしも実現されてはいない。急激な革命とその後経済成長のために、儒教精神はむしろ衰退しており、大同精神よりも利己主義や拝金主義が蔓延しているのが現状である。中国は、孫文が理想としたところとは違った道を歩んだのだと言わねばならない。

インドのガンジーが目指したインド独立の理想も実現したわけではない。ガンジーは

西洋近代文明を否定し、インドは西洋とは別の道を歩まねばならないと考えた。しかし、その後のインドは、むしろ西洋近代文明を追い求めるのに苦しんできたのである。ガンジーは、機械は近代文明の象徴であり、重大な悪徳であり、インドばかりでなくヨーロッパをも荒廃させていると考え、人間の徳性をなくさせる機械文明を拒否した。しかし、ガンジーのこの強烈な近代批判の理想は、その後のインドでは生かされることはなかった。

孫文やガンジーは、アジアをヨーロッパの軛から解放した偉大な思想家であり、実践家であった。彼らは、それぞれ、血のにじむような実践から気高い理想を掲げ、アジアの独立に貢献した。しかし、それによって実現したアジアの諸国家は、必ずしも彼らが目指した方向には進まなかった。今日のアジアも機械文明の悪徳に感染し、伝統的倫理観を喪失し、精神を荒廃させつつあるからである。その意味では、孫文やガンジーの理想は悲劇に終わったと言わなければならない。だが、偉大な理想は、悲劇に終わることによって長らく生きつづけ、人類の将来を予告するものである。

## Ⅱ 科学技術文明の進展



## 1 科学技術の巨大化

### 偉大な革新

二十世紀初め、アメリカでは、一九〇三年にフォード社が設立され、それまで上流階級の乗物であった自動車の大量生産方式が開発された。そして、一九〇八年にはT型フォード車が爆発的な売れ行きを示し、自動車は大衆のものになった。また、一九〇三年ライト兄弟が飛行機による空中飛行に成功、これは後急速に改良されて、第一次大戦では戦闘機として活躍、やがて旅客機や輸送機としても長足の進歩を遂げた。

他方、イギリスでは、一九〇一年マルコーニが大西洋横断無線通信に成功、その後の電磁波を使った通信や放送の第一歩を踏み出した。また、一九〇二年にはラザフォードが原子崩壊の原理を発表し、ドイツでは、一九〇〇年プランクが量子論を発表、さらに、一九〇五年にアインシュタインが特殊相対性理論を発表している。二十世紀初頭には物理学が原子核の内部にまで踏み込み、これが基礎になって、第二次大戦以後の原子爆弾や原子力発電など核エネルギーの解放が可能になったのである。

二十世紀初頭、すでに、その後の一世紀を特徴づける科学上の発見や技術上の発明が行なわれ、また、その企業化の出発点が形づくられている。二十世紀は、科学技術の目覚ましい発展のみられた時代であり、この科学技術の発展によって人間の生活が大きく変化した時代であった。生活ばかりでなく、社会も国家も文明もすべてが一変した。二十世紀を考える時、この科学技術文明の進展ということを除いて考えることはできない。

もともと、この二十世紀初めの科学技術の進展は、すでに十九世紀末に源泉をもっている。エンジン、白熱電球、蓄音機、電話、無線通信、人絹など、どれも、十九世紀の最後の三十年あまりで発明されている。これらが改良されて大量生産され、大衆の日常生活にまで影響を及ぼしたのが、二十世紀であった。また、この十九世紀末の科学技術では、科学理論の応用による新技術の開発が意識的に行なわれるようになった。この点でも、それは二十世紀の科学技術の先駆をなすものであった。それだけに、その進展の度合いは急速であり、人々の日常生活に与えた影響も甚大であった。エネルギー源一つをとっても、十九世紀末には石炭から石油、電気へと転換され、この点でも、十九世紀

末は二十世紀の先駆をなした。

確かに、二十世紀は石油と電気の世紀であった。石油は、何よりも自動車、航空機、船舶の動力源として、発電や暖房のエネルギー源として、さらに、数多くの合成製品の原材料などとして活用され、二十世紀の人間の生活を大きく変えた。それとともに、石油資源をめぐる埋蔵地帯の争奪戦も演じられ、石油は二十世紀の世界政治さえ左右したのである。

また、電気ほど、二十世紀の人間の日常生活から社会形態、産業形態まで一変させたものもなかったであろう。それは、何よりも照明のエネルギー源に使われ、二十世紀から闇を追放した。大都会の煌々とした夜景は二十世紀がつくりあげた景観であり、十九世紀にはなかったものである。十九世紀に発電機が発明されてからどれほど経たないうちに、文明国のほとんどの地域が電線網で覆われ、どの家庭でも照明をはじめ多くの電化製品を縦横に使いこなせるようになったのも、驚異と言わねばならない。それは、さらに、動力源としても、二十世紀を支える産業にはなくてはならないものとなり、また、運輸、通信、エレクトロニクスあらゆる部門に応用されて、われわれの生活空間を激変させた。だからこそ、世界に先駆けて共産革命を成し遂げたレーニンでさえ、共産主義はソビエト権力と電化だとさえ言ったのである。共産主義でも資本主義でも、二十世紀は、電力に代表される科学技術に支えられ、その発展を目指すことには何ら変わりはない。

自動車も、二十世紀を一変させた象徴的な交通手段であった。一九〇八年にT型フォード車の第一号が製作されて以来、自動車は急速な勢いで普及していった。初めはアメリカで、さらに全世界へと普及し、二十世紀の人間生活を大きく変えるとともに、人々の考え方も一変させた。自動車道路も縦横につくられ、都会をはじめ地方の景観も大きく変化した。

合成化学の発達も、二十世紀の生活を変えた大きな要素であった。それは、染料や肥料の合成から始まり、ゴム、繊維、プラスチックの合成など、石油化学と手を携えながら、二十世紀の重化学工業を支える基盤になった。なかでも、カロザースによって発明され、一九三七年に工業化されたナイロンをはじめ、数多くの合成繊維の開発は、二十世紀の人々の衣服からファッションまで革命的な影響を与えた。

通信や放送分野での二十世紀の技術革新も、目を見張るものがある。一九〇一年にマルコーニによるイギリス・カナダ間の無線電信が成功して以来、一九〇七年には音声の

無線伝送が成功し、一九二〇年にはアメリカで商業用ラジオ放送が始まり、一九三九年にはテレビジョンの放映が行なわれた。この電波を使った通信放送技術の目覚ましい発達には、地球上の空間を一挙に縮めるとともに、不特定多数の大衆に音声や映像を送ることを可能にした。しかも、ラジオやテレビという形をとって、世界中のあらゆる情報が家庭内に直接入り込むようになったことは、驚くべき生活革命であった。二十世紀末は情報化革命の時代と言われてきたが、この革命は、すでに二十世紀の初めから急速な勢いで進行していたのである。二十世紀は情報化の時代でもあったのである。

また、電気冷蔵庫、電気洗濯機、電気掃除機など家庭電化製品が普及して、家庭内の主婦の労働が大幅に軽減され、余暇が増え、生活革命が起されたのも、二十世紀であった。人は便利さには勝てない。この革命は、一九二〇年代のアメリカでいち早く起き、第二次大戦をはさんで、瞬く間に世界中に広まった。

エレクトロニクスの発達も、二十世紀の驚くべき技術革新であった。それは、一九一六年の真空管の発明に始まり、一九四八年のトランジスタの発明へとつながって、やがてIC、LSI、超LSIへと最高密度に高密度化していった。それは、ラジオ・テレビはもちろんのこと、二十世紀後半にはコンピュータの発達を可能にし、さらに通信技術とも結びついて情報化革命を起した。この革命は、また、省資源、省力、自動化をも可能にし、経営はより合理化され、生産性は向上した。

航空機やロケットも驚異的な発達を遂げた。二十世紀初頭、ライト兄弟が人類初の動力飛行に成功してから、一九六九年、宇宙ロケットで人類が初めて月に着陸するまで、七十年とかがついでない。二十世紀は航空技術と宇宙飛行技術の両方を成功させた世紀であるが、この技術の驚異的発達には、二度の大戦で戦闘機や攻撃用ロケットの開発が急激に行なわれたことも寄与した。これらの技術は、短時間のうちに遠距離の場所に行くことを可能にすると同時に、人間の行動範囲を宇宙にまで拡大した。こうして、人類の行動半径は飛躍的に拡大し、人類は時間と空間を征服することに成功したのである。

原子核のエネルギーを解放し、それをコントロールする技術を獲得したのも、二十世紀が人類の歴史に刻んだ大きな業績であろう。二十世紀の初頭、ラザフォードが原子の崩壊の可能性を予言し、特殊相対性理論の中で、アインシュタインが質量とエネルギーの同等性を結論づけて以来、これら物理学の成果は急速な勢いで技術に応用され、第二次大戦を経て原子力発電を可能にした。この核エネルギーを人類が手にしたことは、人類が初めて火を手にした時以来の革命的な事件であった。それは、火の発見が

そうであったように、偉大な恵沢をもたらすとともに、大きな災厄もたらしたからである。

このような二十世紀の科学技術の急激な革新と、それが人間生活に与えた革命的な影響を考えると、二十世紀は、人類史上でもそれまでになかったような驚くべき世紀だったように思われる。それは、人類が火や農耕技術や鉄器を発見した時の革命的な変化に並ぶ、あるいはそれ以上の変化を、人類にもたらしたのである。

#### 大量と巨大への情熱

二十世紀の技術がそのような巨大な力を発揮しえた背景には、技術が科学と結びついたということがある。ヨーロッパの近世に成立した自然科学は、人間を、自然に対する認識主体と考え、自然を、人間によって認識される対象とみた。そして、帰納法や演繹法を用いて自然の機械論的構造や数学的法則を明らかにし、それを実験によって実証するという方法を確立した。そこには、人間によって自然を再構成しようとする意欲が働いている。そのかぎり、そこにはすでに自然科学の技術的性格が潜んでいる。従って、自然科学が技術と結びつきうる可能性は、最初からあったのだと言わねばならない。近代の技術は、自然を人間のための存在とみ、自然を支配し改造することによって、人間は偉大な力を発揮することができると考えた。近代の自然科学と近代の技術は、人間を自然に対する主体と考える点で共通していたのである。科学技術が成立したのはそのことによる。それ以来、科学と技術は結びついて、車の両輪のように互いに進歩発展していった。二十世紀の科学技術文明は、そのようにして成立したのである。

事実、石油化学、電力、自動車、合成製品、通信、放送、家電、エレクトロニクス、航空機、ロケット、原子力など、二十世紀を代表する高度技術は、どれも、電磁気学、熱力学、高分子化学、量子力学、相対性理論などを利用して成り立っている。このような科学と技術の助け合いがあったからこそ、二十世紀の科学技術の巨大な進歩があり、その進歩が二十世紀の人々の生活を一変させたのである。二十世紀人の科学や技術への信仰は、これに由来する。

大量生産のシステムを開発したことも、科学技術の成果を大量の大量に普及させて、この時代を技術の時代とすることに寄与した。大量生産方式は十九世紀以来のものではあるが、二十世紀は、この量産システムを十九世紀以上に巨大化した時代であった。この点では、特にアメリカがすぐれていた。二十世紀初頭フォードが開発したベルトコン

ベア・システムが、この出発点であった。それ以来、二十世紀の生産技術は、一貫して、均質なものをいかに大量に生産するかに向けられてきた。その結果、高品質の消費財が大量に生産され、安価な製品となって、大量の大衆に供給されるようになった。この安価で均質化された商品の大量生産が、また、大衆による大量消費を促したのである。この大量生産と大量消費のシステムをつくるために、巨大な企業がつくられたのも二十世紀であった。ここでは、製品をより多くより早くより安く生産するために、精確さや効率が徹底的に追求された。二十世紀が生み出した工業化社会は、そのような大量生産と大量消費のシステムを中心に出来上がったのである。

十九世紀の技術と比べた場合、二十世紀の技術が途方もない巨大さを誇るようになった点も、この世紀特有の現象である。この巨大技術は、大量生産を目指して建設された化学プラントや自動車プラントや半導体プラントばかりでなく、国家的にも巨大な計画のもと実現された。アメリカのニューディール政策で実行されたテネシー峽谷計画なども、その例である。テネシー川を巨大ダムで堰止めて発電所をつくり、産業を誘致し、農業生産を高めるために、計画的にあらゆる技術が動員された。原子爆弾開発を目指したマンハッタン計画も、途方もない数の科学者を組織的に動員し、各々特定の研究に集中させ、それを総合して、わずか三年で原爆を完成した。人間の月到着を可能にしたアポロ計画も同様であった。この点では、アメリカの技術開発は、自然改造から宇宙開発までを目指したソ連の巨大プロジェクトと、それほど変わらない。どのような政治体制にあっても、国家的計画によって巨大組織をつくり、科学を組織的に利用する巨大技術が隆盛を極めたのである。二十世紀は、企業の生産設備にしても、都市にしても、国家プロジェクトにしても、何事につけ、巨大なものが計画的につくられた時代であった。二十世紀の科学技術文明は、このような大量と巨大への情熱によって支えられてきたのである。

### 巨大技術のもたらしたもの

二十世紀の技術はあまりにも巨大化したために、社会や国家、文明にまで影響を及ぼさずにはおかなかった。今日みられる工業化社会や大都市文明は、この巨大技術のもたらしたものである。大量生産システムは巨大な企業を生み出し、この企業と企業が集合し、膨大な人口を集めて大都市を形成し、さらに、その大都市は急速に成長して巨大都市へと成長していった。それにつれて、人口は農村から都市へ急激に移動し、農村地帯

は過疎化し、大都市は過密化した。そして、大都市には故郷と大地を捨てた人々が密集し、巨大な大衆社会が形成されたのである。このような現象はすでに十九世紀から顕著になってきた現象ではあるが、二十世紀はこれをより大規模に実現した時代であった。

当然、国家も、このような大都市文明と大衆社会化現象に対応して変化していかざるをえなかった。国家の管理機構が巨大化していったのは、そのためである。また、どこでも、自国の生存をかけて計画的に工業化を進めねばならなかったから、国家自身が、このような大都市文明と大衆社会の形成を加速したものである。こうして、科学技術の巨大化と国家の巨大化は相乗的に進行していった。

工業化に伴うこのような変化は、十九世紀のヨーロッパで最初に起き、その影響は急速な勢いで世界中に拡大して、世界中を変えていった。ヨーロッパ諸国の植民地の拡大も、このような工業化に起因していた。工業化に伴って、ヨーロッパ諸国は原料と市場を求めて世界中に進出し、ヨーロッパ近代文明そのものを拡大させていった。その拡大のエネルギーを形づくっていたものが科学技術の力であり、それに支えられた軍事力、経済力であった。このヨーロッパを震源地とする近代の技術文明が世界に及ぼした影響は大きく、非ヨーロッパ諸国は、否応なく、このヨーロッパ近代文明の支配下に組み込まれざるをえなかったのである。

二十世紀は、このヨーロッパ由来の科学技術文明がアメリカやソ連、アジア諸国に受け継がれて、より巨大化し、より全球的なものになった時代であった。何事も大きなことの好きなアメリカは、広大な土地を背景に、大量と巨大への情熱に支えられて、科学技術文明をヨーロッパ以上に発展させ、世界を席巻した。デモクラシーと大衆文化を基調とするアメリカニズムが世界中を魅惑したのも、アメリカが開発した巨大な科学技術の力が背景にあつたことである。だから、この科学技術の力が弱まる時、その文明の影響力も衰弱する。

ソ連も、相当無理をすることではあるが、国家計画によって、アメリカが実現した科学技術文明を後追した。現に、ソ連は、国家計画による大規模な動員によって巨大なコンピュータをつくり、それを中心に大都市を形成して重化学工業を興し、アメリカに追いつき追い越そうとした。このソ連が二十世紀末崩壊せざるをえなかったのも、このような仕方での科学技術文明の追求が限界にきてしまったからでもある。

アジア・アフリカの自立という二十世紀を特徴づける現象も、同じように、工業化という名においてこの科学技術文明を追求し、近代国家を形成しようとするものであった。

そして、その苦悩も、科学技術文明そのものに伏在する苦悩だったとも言えよう。科学技術文明が伝統社会を破壊することは、避けることのできないものだったからである。

また、二十世紀初めのヨーロッパの後退も、科学技術文明のもつ矛盾からきていたとも言える。ヨーロッパを決定的に後退させていった第一次大戦は科学技術を駆使した軍事力の消耗戦であったが、その消耗戦が、ヨーロッパそのものを消耗させたのである。どんなに発達した科学技術も、人間の知恵までは発達させなかったのである。

その意味では、二十世紀は、ヨーロッパが自ら開発した科学技術文明によってかえって後退し、その代わり、この科学技術文明をより巨大化した非ヨーロッパ諸国が抬頭した世紀であった。そのようにして、世界が一樣に科学技術文明に覆われて急速に一つになっただけでなく、二十世紀であった。二十世紀は、自由主義と全体主義、資本主義と共産主義の対立の時代として捉えられたが、どれも、科学技術文明の進展と豊かな社会の形成を目的としていたことには変わりはない。だからこそ、体制の差違にかかわらず、どこでも共通して、工業化社会が形成され、大都市が構築され、大衆社会がつけられてきたのである。二十世紀の科学技術文明はこのようにして形成され、かくて、巨大な物質文明が地球を覆い尽くしたのである。

## 2 メディアの復讐

### 人間と環境の中間者

どんな生命体でも、環境から働きかけられ、また環境に働きかけ、環境との相互作用の中で自己を維持している。環境からの働きかけを受け取り、環境に対して働きかける生命体の媒体が、身体である。身体は、生命体と環境の中間にあつて、生命体の意志の表現として受動と能動の二つの働きをし、生命体と環境の相互作用を仲立ちする。それは、微小な単細胞生物から植物、動物まで、変わらずにもっている生命の構造である。特に、生命体が身体を通して環境に働きかける能動的な作用に注目するならば、この能力は高等動物になればなるほど増大する。それどころか、高等動物になると、驚くべきことに、身体の延長である簡単な道具まで作って、環境に働きかけ、自己保存をはかっていく。

人間は、道具を使って積極的に環境を作り変える動物の最も進化したものである。この道具を使って環境を作り変える行為が、技術である。そのかぎり、人間は技術的動物

である。人間は、二足歩行を発見し、手に石器を持って獲物を追いかけた時から、身体の延長である道具を使って、環境を生存に適したように改変し、そのことによって生きのびてきた。人間は、手や足など身体の働きを道具として表現し、環境に働きかけ、環境を作り変える。人間と環境は、直接連続しているのではなく、道具を介してつながっている。道具は、人間と環境のメディア、中間者なのである。メディアとしての道具は、人間の身体の延長として人間に直結していると同時に、それ自身自然の産物から出来ており、外の環境にも直結している。メディアとしての道具を通して、人間と環境は一つであり、心と物とは一つに結びつけられていたのである。

二十世紀の科学技術が生み出したもの、自動車、航空機、大型船舶、宇宙ロケット、オートメーションの機械装置、家庭電化製品、電話、無線通信、ラジオ、テレビ、コンピュータ、ロボット、これらも、人間の手や足、口や耳、目、さらに頭脳の延長として発達してきたものである。二十世紀の人間は、これらのメディアを通して環境とつながっている。特に、二十世紀のメディアの特質は、それぞれのメディアが巨大化しつつ複合して、ついに頭脳の延長にまで及んだことであろう。このことによって、二十世紀のメディアは、極大から極小の世界まで捉えることができるようになり、その結果、二十世紀人の環境もまた拡大したのである。

これら文明の利器を縦横に使ってものを大量生産する企業も、企業を中心に出来上がっている大都市も、人間の身体の巨大な延長である。それらを通して、人間は自然環境とつながるとともに、自然環境を改造してきた。

### メディアの反乱

ところが、二十世紀の技術はそのスケールがあまりにも巨大化し、しかも、ほとんど自動的に膨張していったために、それは巨大な怪物と化し、逆に、人間をも、まわりの環境をも支配するようになった。

二十世紀の技術も、人間の身体の延長として、人間と環境を結ぶメディアであった。だが、二十世紀は、この手段であり、中間者であり、メディアであったものが自己目的化し、それ自身として巨大な膨張を遂げた。そのために、本来の目的であった人間や自然までも、逆に手段化してしまった。人間も自然も、巨大な技術文明をつくるための資源にすぎなくなったのである。それでいて、この自己目的化した巨大な技術文明の膨張の行き着く先は、不確定で無目的なのである。ここでは、人間から道具へ、道具から自



然環境へ、自然環境から道具へ、道具から人間へという連続的円環が破壊され、その代わり、メディアそのものがただひたすら自己膨張していく。そのため、人間からは自然が遠ざかり、自然からは人間が遠ざかってしまった。そこに目に見えて存在するものは、諸メディアが複合して巨大化した機械的世界である。人間はこの巨大化した道具の道具になってしまった。

人間のつくったものが人間にとって疎遠なものになるという現象は、すでに十九世紀から認識されていたことであるが、二十世紀の巨大科学技術文明は、この疎外現象の極限であった。よくSF小説などで描かれるロボットの反乱は、遠い将来起きる現象ではなく、すでに起きてしまった現象かもしれない。現に、二十世紀人が生み出した機関銃や毒ガスや原子爆弾など、種々の武器や殺戮兵器によって、どれだけ多くの人々が殺されていったか。どれだけ多くの人々が虐殺され粛清されていったか。また、二十世紀人が自分達の便利のために作り出した自動車や航空機の事故によって、どれだけ多くの人々が死んでいったことか。それらが人間に与えた恵みも大きかったが、それらが人間に与えた災いも途方もないものであった。

また、チャップリンが「モダン・タイムズ」の中で揶揄したように、二十世紀の巨大企業が生み出したベルトコンベア・システムでの長時間にわたる単純労働の中で、労働者がどれほど機械化し畜車化してしまったことか。なるほど、そのような二十世紀前半の過酷な労働環境は、二十世紀末には大幅に改善された。最先端では、全工程が自動化した無人工場まで実現し、人間は単純労働から解放されつつあるように見える。しかし、ものごとは、考えたほどうまくはいかない。今度は、無人工場の保守・管理のために、計器の単純な注視を長時間続けねばならなかったり、機械の故障を知らせる警報に絶えず振り回されることにもなる。人間が機械の主人ではなく、皮肉にも、機械が人間の主人になってしまう。

確かに、工場のオートメーション化は、人間を単純労働から解放し、産業の重心をサービス部門や情報部門に移行させた。だが、この場合でも、なお過労死やテクノストレスはあとを絶たない。また、現代の医療が、人間を機械仕掛けのロボットのように扱いは、高度な医療機器を使って、あたかも機械を修理するかのようにして患者を治療している様子を見ても、患者はまるで医療機器というロボットのロボットになっているようではないか。二十世紀の人間は、機械仕掛けの文明の中で、自ら機械化し、機械に支配されてしまった。

それにもかかわらず、二十世紀人は機械仕掛けの科学技術文明の中を生きてきた。鉄とコンクリートで固められた巨大な都市文明の中を蟻のように動き回り、自動車で高速道路を走り抜け、ラジオやテレビ、電話やコンピュータから間断なく発信される情報の洪水の中を生きてきた。そのような仕方では、人間は巨大な科学技術文明によって支配されるようになったのである。

現代を支配しているものは、巨大化したメディアである。人間は、この怪物のようなメディアの奴隷のようにして生きている。二十世紀は、怪物化したメディアが神になった時代なのである。以前の神々と同様、この二十世紀の神も、文明の利便という恵沢とともに、人間性の喪失という災厄も与えた。人間が自らのためにつくったメディアによって、人間自身が復讐されたかのようにである。

#### 環境の破壊

巨大な科学技術文明によって破壊されたのは、人間性ばかりではない。人間の外なる環境も、また重大な損傷を被った。二十世紀も後になればなるほど、この科学技術文明がもたらした環境破壊の度合いは増幅されていった。一九七〇年代には、まだ震源地の特定が可能な公害が問題とされるだけであったが、一九八〇年代には、震源地の特定されない地球環境全体が問題とされてきた。

大量生産と大量消費を至上命令とする巨大な技術文明は、地球から資源やエネルギーを無限に引き出し、大量の廃棄物を無限に吐き出すことを前提していた。産業システムから家庭生活まで、その構造は変わらない。そのことを前提して、二十世紀の技術文明は膨張に膨張を重ね、飽くことのない利益追求をしてきたのである。

この資源の無限の浪費と廃棄物の無限の排出は、結果として、大気汚染や酸性雨、森林破壊や水質汚染、土壌流出や砂漠化、海洋汚染や野性生物の絶滅、温暖化やオゾン層の破壊などをもたらした。技術文明の破壊の手は、地球の内にも外にも及んだのである。

二十世紀人以外に、これほど凄まじい勢いで、これほど大規模に、自然環境の駆逐を行ないえた人類もいなかったであろう。巨大な技術文明の中で、技術者も科学者も政治家も経済人も一般大衆も、それぞれが盲目的に目先の利益と享楽を追求していった結果として、このことは起きてきたのである。もしも、人間がその限界を意識していたのなら、これほどの規模にまで破壊が進むということもなかったであろう。

二十世紀は、その当初から、大量生産と大量消費のための大規模なシステムを発明し

た世紀であったが、それは、大量の資源を使って、大量の製品を作り出し、大量の大量に消費させるシステムであった。従って、製品の売れ行きをよくするには、販売した製品をすぐに使い捨てさせる必要があった。デザインなどを短期間に変えて、製品を陳腐化し、消費の回転速度を早める方法が取られたのは、そのためである。だが、それは、ますます資源を浪費し、大量の廃棄物を排出し、大規模な環境破壊をもたらすことになった。

人間が作りだした巨大技術というメディアは、それ自身無限に自己膨張して、まわりの環境を無限に駆逐した。人間と環境の中間者であることをやめ、限りなく自己膨張していく二十世紀の巨大なメディアは、すでに、山や川、草や木、大地や海、空や宇宙までも征服し、支配下に治めたかのようにみえる。しかし、そのことによって、地球環境の破壊がもたらされ、人類自身の生存さえ危うくなってきているとすれば、人類は、ここでも、愚かにも、自らつくった巨大なメディアによって復讐されているのだと言わねばならない。

#### 生命の操作

このメディアの途方もない発達とは、二十世紀末には、生命の操作さえ可能にした。二十世紀が始まった一九〇〇年、生物学では、メンデルの遺伝法則が再発見され、染色体中の遺伝子の存在が理論的に予言されていた。これが、遺伝学さらに分子生物学へと、生物学を急速に発展させていく出発点になった。予言されていた遺伝子の正体がDNAであり、その中にすべての遺伝情報が組み込まれていることが発見されたのが一九四四年、一九五三年には、DNAが二重螺旋構造をもっていることが発見され、以来、遺伝学や分子生物学は飛躍的な発展を遂げていった。その結果、下等動物から高等動物に至るまでのDNA中に組み込まれた遺伝情報の解読が進み、遺伝子組み換え技術や生殖技術の発達ともあいまって、二十世紀末には種々の生命操作が可能になった。

例えば、遺伝子組み換え技術を用いた遺伝病の治療も可能になり、また、遺伝子組み換え技術、細胞培養技術などを用いた医薬品の大量生産や農産物の大量生産など、バイオ・テクノロジーも発達してきている。さらに、遺伝子組み換え技術、多排卵操作、複数受精卵移植手術を用いた家畜の大量生産も可能になってきている。他にも、人工受精による代理出産や脳死状態からの臓器移植など、様々な生命操作が実際に行なわれている。

そればかりでなく、ホルモン操作による動物の性転換をはじめ、両性具有の動物をつくることも、動物に複式妊娠を起させることも、遺伝子操作によってビッグサイズやミニサイズの動物をつくることも、動物のクローン（コピー）をつくることも、キメラ（異種合体）をつくることも可能になった。このことは原則として人間にも適用できる。戦慄を禁じえないことだが、遺伝子操作を行えば、体細胞を使った生殖技術によって、全く同一の人間を大量生産することも理論的には可能だという。

二十世紀は、科学上の発見がすぐに技術に応用されて、大きなビジネスに発展する時代であったが、生物学の成果も例外ではなかった。二十世紀末、生命操作が可能になって、人間はついに生命創造という神の業に手を触れたのである。高度に発達したメディアが神の代理を務め、神そのものになろうとした世紀、それが二十世紀であった。

なるほど、生命操作技術の発達によって、不妊の悩みはなくなり、遺伝病は克服され、農産物や畜産物が大量に生産され、人類は幸福になれるかのようにみえる。だが、これらの技術を駆使している科学者や技術者は盲目である。かつて原爆製造にかかわった科学者がそうであったように、彼らは、自分で自分が何をしているのかわらずに、ただ目先の科学的・技術的目標に向かって突き進んでいる。そこに、どのような危険性が待ち構えているかは分からない。

それよりも何よりも、この生命操作技術の発達によって見失われたことは、生命の神秘への畏敬の念であった。この技術の発達によって、生命は全く機械仕掛けのものとして扱われ、従って、死も機械仕掛けのものとして理解され、ともに軽視されるようになった。それが、この技術の発達をもたらした最大の危険性であろう。巨大な科学技術文明の中では、人間はまるで機械仕掛けで生まれ、機械仕掛けで死んでいく物体でもあるかのようなのである。二十世紀が生み出した高度技術というメディアは、生命の領域にまで食指を伸ばし、生と死の意味さえ駆逐してしまったのである。

#### 自動車と核兵器

二十世紀人が生み出した高度技術は、人間と環境の単なる中間者であることをやめて、それ自身の原理で自己膨張し、人間も環境も変質させ、駆逐せずにはおかなかった。例えば、二十世紀が生み出した輸送手段、自動車についても、このことは言える。自動車が大量生産され広く大衆に行き渡ったことは、確かに、人間の行動半径を広め、短時間のうちに遠距離に出向くことを可能にした。しかも、自動車は、ドアからドアへ、個人

の意志通りに走り移動してくれる。自動車によって、二十世紀人は空間と時間の主人になったかのようにみえる。二十世紀の人間は、自動車を通して、どれほど多くの便利さを手に入れたか知れない。

しかし、この便利な輸送手段が世界中に充滿することによって起こされた弊害も、少なくなかった。何より、交通事故が多発して、死者が急増した。また、地方にまで及んだ自動車革命は、人々の行動範囲を大きくしたから、村の共同社会の結びつきを弱め、農村そのものを激変させていった。さらに、自動車は、人間に時間と空間に対する征服感を与え、ますます、人間を自然支配の独裁者のようにしていった。それでいて、人間は、この自動車を使いこなしているうちに、自動車と同じ機械人間になってしまい、外界のものに対する実在感さえ失っていった。

そればかりでなく、自動車は、人間の外なる環境をも激変させた。通勤距離の拡大とともに、都市は郊外へとどんどん膨張し、その分、まわりの緑は次々と駆逐されていった。また、自動車道路の建設のために野や山は切り開かれ、排気ガスによる大気汚染さえ招いた。二十世紀は、メディアの自己膨張によって、人間も環境も復讐された時代なのである。

このことを語る最先端の事件は、第二次大戦以後の核兵器の出現であろう。二十世紀前半にその可能性が予言されていた核エネルギーの解放は、第二次大戦での熾烈な戦いの影響もあって、驚くべき速さで核爆弾の製造を可能にした。アメリカは、第二次大戦中のマンハッタン計画で、約二十億ドルを投下、七千人の科学者、技術者を動員、最高時十二万五千人の従業員を使用し、政府、軍、産業界による巨大な軍産複合体を形成し、瞬く間に原子爆弾を作ること成功した。しかし、この計画に参加した科学者や技術者は、最終的に自分達が何をするようになるのかについての明確な見通しをもってはいなかった。原爆が途方もない破壊力を示し、今だかつてなかったような予想外の惨状をもたらすことを、彼らが知ったのは、一九四五年の広島、長崎への原爆投下があつてからのことであつた。たった一発の爆弾で、広島では約十四万人、長崎では約七万人が被爆し、五年以内の死者を含めて、二十七万人あまりが死亡したと言われる。それは、核戦争というものがいかに悲惨な結果を招くかを、身をもって示したのである。それは、人類への最大の犯罪であつた。

ところが、一旦開発されたものは極限まで進む。その後も核兵器の開発はとどまるとなく、すぐにソ連も追随、他の主だった国々も先を争って、原爆さらに水爆を開発し

ていった。その結果、特に第二次大戦後の米ソを中心とした核兵器開発競争によって、地球上は核兵器で充満し、その数は地球上の人類を何度でも滅ぼしうるほどまでになってしまった。核兵器の破壊力も、ここまでくれば、すでに限界線をはるかに超えてしまっている。人類は賢いのか愚かなのか分からない。地球上の人類を何度でも滅ぼしうるほどの破壊力をもった膨大な数の核兵器を、当の人類が開発したことほどのアイロニーもなかったであろう。そのため、核兵器は、もはやそれを使うことができないということまでできてしまった。核兵器の巨大な破壊力は、核兵器から、兵器としての本来の意味を剥奪してしまったのである。

それでいて、二十世紀後半の人類は、このダモクレスの剣のような核兵器への恐怖感に、絶えず苛まれてもきた。愚かなことに、自らつくった途方もない兵器に自らおののかねばならないということになってしまったのである。それどころか、これも愚かなことだが、二十世紀末には、核兵器の異常な開発競争によって、アメリカもソ連も国力を消耗し、後退または崩壊していかざるをえなかった。

広島、長崎の原爆によって犠牲になった人々をはじめ、その後の原爆実験で被害を被った人々、さらに核兵器の存在に苛まれてきた二十世紀後半の人類のことを考えれば、核兵器というメディアが二十世紀後半の人間に与えた破壊的な影響は計り知れない。それは、人間への最大の犯罪であったが、この最大の犯罪を行なった者がまた人間自身だったのである。核兵器は人間の魂をも破壊した。放射能による環境汚染は言うまでもない。核兵器開発は、人間が生み出したメディアが人間をも環境をも破壊するという現象の最たるものだったのである。人類は、実際の核の投下によつては滅ばないかもしれない。しかし、核を持つことの重荷によつて滅ぶことはある。核兵器は膨張の限界を超えた盲目的兵器だからである。核兵器は、巨大メディアという二十世紀の神から人間に与えられた究極の災いであった。人類は、核兵器を手にしたことによって、イカロスのような運命を辿ることになるであろう。

#### 空間と時間の無化

二十世紀に開発された文明の利器、自動車、高速列車、飛行機、宇宙ロケット、どれも、遠距離を短時間で到達するために、無限の速度を求めて、ただひたすら進歩してきた。また、電話、無線通信、ラジオ、テレビは遠方の出来事を瞬時に伝え、歴大な距離を一挙に無にしてしまった。二十世紀後半に高度の進歩をみたコンピュータも、計算時

間を短縮するために、より高速の処理能力を求めて、ほとんど極限近くまで開発されてきた。これら二十世紀が生み出したメディアは、どれも無限の速度を追求して、空間と時間を征服してきた。無限の速度による空間と時間の征服、それは、二十世紀の技術が運命的に追求してきた目標であった。

確かに、二十世紀人は、この文明の利器の発達によって、地球のどこにでも行くことができ、地球のどこからでも情報を手に入れることができるようになった。さらに、このような輸送手段や情報伝達手段の進歩によって、空間が縮小されたため、世界はより一体化してもいった。船で動いていた十九世紀末には、大西洋や太平洋を横断して行き来するには、まだ相当な労力を必要としていた。しかし、二十世紀末には、ジェット機の発達に伴って、大西洋も太平洋も、ギリシア・ローマ時代の地中海よりも狭くなってしまう。世界政治でも、首脳達が気軽に集まって問題を解決することができるようになったのは、この技術の発達による。

しかし、文明の利器の発達によって地球が狭くなり、世界が一つになったとしても、そこに至るまでには、人類は、二度の大戦をはじめ多くの戦争を経験してきた。輸送手段や情報伝達手段の発達のために、かえって国家と国家が入り乱れ、紛争を起こす原因にもなったのである。もしも、十八世紀以前のように、そのような技術がまだ発達していない時代であったなら、ユーラシア大陸一つをとっても、ヨーロッパと東アジアは、それほど紛糾を起こすことなく互いに共存しえたであろう。ところが、十九、二十世紀と時代が下るに従って、空間と時間が短縮されてきたために、世界の片隅で起きることも全世界に影響を及ぼし、国際的な政治摩擦の原因にもなっていた。二十世紀は、このような技術の発達に原因する戦争や紛争の連続だったとも言える。

そのような交通・通信手段の発達によって空間と時間が征服されたために、二十世紀の人間が陥ったことは、過程の喪失という現象であろう。例えば、旅の意義は、単に目的地に到着することだけでなく、目的地に到達する過程での発見、期待、時間、それらすべてを含んでいる。ところが、時代が下るに従い、交通手段が発達し、この過程はますます省略されていった。そのため、二十世紀末の現状では、人々は、旅行をするにもただ航空会社や観光会社の企画に乗って、忙しく動き回るだけということになってしまったのである。ここには、過程にあったあの余剰の豊かさがない。

通信手段の発達によって、世界中のあらゆる出来事が家庭内で瞬時に見ることができるようになったことも、二十世紀人の空間感覚を大幅に変えた。それは、何よりも、世

界の出来事を知るために時間と距離を必要としなくなったために、人々から実在感というものを奪った。テレビに映し出される世界中のどのような出来事も、単なる映像としてしか受け取られず、実在感をもっては受け取られなくなってしまったのである。そのため、どのような悲惨なことで、まるで他人事のようにしか受け取れないことになる。

確かに、自動車や列車、飛行機などの高速輸送手段の発達によって、二十世紀人は、遠方へ赴くにしてもそれほどの時間を必要としなくなった。また、電話や無線通信、ラジオやテレビの発達によって、遠方の情報を仕入れるにもほとんど時間を必要としなくなった。どんなに複雑な計算をするにも、コンピュータを使えば、どれほどの時間も必要としなくなった。そのように時間を追放して、人々は、短時間により多くの事を成し遂げ、経験し、見聞することができるようになったのである。

しかし、そのことによって、二十世紀の人間が失ったことも多い。短時間に多くのことを見聞することになったために、新しい情報が次から次へと押し寄せてきて、人々はそれに対応することで忙しく、その結果、じっくりとものを考えたり受け止めたりする持続ある時間というものを失ってしまった。そのため、人々は、外界の様々なものをただ通り過ぎていくだけになったのである。

二十世紀は、家庭の中にラジオやテレビ、電話など、多くの放送・通信機器が入り込んだ時代であった。それによって、われわれは生活の便利さと手軽な娯楽を得た。しかし、その反面、われわれは、次から次へと伝達される情報の洪水の中で、ただ目まぐるしく対応し動いているだけで、次第に判断力や批判力さえ失ってきた。二十世紀の人間ほど、目まぐるしい変化の中で多忙に生活してきた人間もいなかったであろう。加速度的変化の中で持続を失った人間、それが二十世紀人であった。

自らつくりあげてきたメディアによって、過程を失い、持続を失い、人々がただひたすら忙しく世界中を動き回っている二十世紀の風景は、いまだかつてなかった風景であろう。高度に発達したメディアによって時間と空間が追放された結果、二十世紀人から永続への感覚が失われたのである。

#### 機械の人間化と人間の機械化

二十世紀がつくりあげた巨大なメディアは、中間者という本来の限度を越えて、それ自身で自立的な働きをし、鉄とコンクリートで組み立てられた機械的世界をつくりあげ



た。われわれはこの機械仕掛けの世界を住みかとして生き、環境として生きている。機械的世界は、われわれにとって第二の自然になったのである。人類は、誕生して以来、自らの身体を延長して道具をつくり、それを通して自然環境を改造してきた。だが、二十世紀に至って、この身体延長である道具が異常に膨張して、逆に、人間自身を組み込む巨大な世界に発展してしまったのである。

二十世紀のメディアも、もとは人間の身体延長であったから、そこから出来る機械的世界もまた人間に似ている。様々な交通機関は足の延長であり、通信機関は目や頭脳の延長である。そのため、巨大な機械仕掛けの世界は、それ自身、人間のように自動的に動く機械のように見える。二十世紀は機械が人間化した時代なのである。自動制御によって多様な仕事を器用にこなすロボットは、機械の人間化の象徴である。だが、それ以上に、現代の世界そのものが、巨大なロボットと化しているのである。

人間はこの巨大なロボットの中で動く黄車のようなものである。人間は、巨大な自動機械の中に住んで、自らも機械化してしまった。二十世紀末の今日では、人間は、すでに、起きてから寝るまで、生まれてから死ぬまで、機械仕掛けの世界に住み、自らも機械化している。もともと、人間をも機械仕掛けのものとしてみた科学技術が、人間を機械化してしまうのは当然と言えるかもしれない。人間が機械化してしまう世界では、人々は次第に思考力まで鈍らせ、外部の刺激に対してただ反応しているだけの人間になっていく。そのようなところでは、感受性さえ奪われてしまうであろう。交通手段の発達によって生じる事故や兵器の発達によって生じる戦争などで死んでいく人々の死も、それほど厳粛には受け取られないような世界が出来上がってしまったのは、そのためである。機械が人間化する分、人間が機械化してしまったのである。

何事も機械的に処理されていく世界では、人間の人間としての能力はむしろ退化していく。何でも機械が叶えてくれる世界の中に育って、人間は自分の力で物事を処理していく能力を退化させ、極度に分業化した専門産業にますます依存していく。機械が賢くなる分、人間は馬鹿になる。自らがつくった巨大なメディアの世界の中で、人間がむしろ退化していったのが、二十世紀だったのではないか。

確かに、二十世紀の科学技術文明の進展は、われわれの生活をより便利にし豊かにしてきた。その点では、二十世紀はいまだかつてなかったほどの発展を遂げた世紀であった。しかし、それは、人間を必ずしも幸福にはしなかった。二十世紀は、科学技術の発達のために、悲惨な戦争を繰り返さねばならなかった世紀でもあり、貧困や環境の問題

を解決できなかった世紀でもあった。機械文明の危険性を警告してやまなかったガンジ  
ーの予言に対して、人類はまだ何の答えも出していない。

### Ⅲ 大衆社会の出現

## 1 大衆消費社会の実現

### 増大する人口と大都市社会

十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて、先進諸国では、科学技術の進展とともに新しい産業構造が形成され、大量生産と大量消費経済は時代を追い越すことに大規模化して行く。それに従って、人口は加速度的に都市に集中し、運輸、通信の技術の発達も伴って、都市はますます膨張していった。こうして形成されてきた大都市には、田舎の土地から離れたおびただしい数の人々が密集し、これが、右にでも左にでも容易に動きうる流動的な大衆社会を形成した。しかも、この大衆社会の出現によって、二十世紀は、社会構造から政治形態まで大きく変容していかざるをえなかったのである。

大衆社会の出現は科学技術文明の進展の所産であり、大衆は科学技術文明の落し子であった。人々は、文明の利器によって固められ機械化された大都市空間を第二の環境として自由に動き回り、科学技術文明の与える恩恵を享受した。不特定多数の人々が大量に出現し、経済はもちろん社会も政治も動かすようになったこと、それは二十世紀の見逃すことのできない事実である。

現に、第一次産業革命、第二次産業革命と、産業構造の大変革が行なわれるたびに、世界の人口は幾何級数的に増大し、その増大した人口はほとんど都市に吸収されていった。そのため、ここ二百年間、地球上には、百万、五百万、一千万という膨大な人口を抱えた巨大都市が、次から次へと生まれていった。単に近代文明の進んだ先進地域ばかりでなく、後進地域でも、多くの都市が巨大化の一途を辿った。ロンドン、パリ、ベルリン、モスクワ、ニューヨーク、デトロイト、サンフランシスコ、メキシコシティ、東京、大阪、北京、上海、カルカッタなどは、その一例にすぎない。これら巨大都市は、産業経済の発達によって、大量の人口を養う能力をもっていた。そのため、人口は、農村部から巨大都市へとますます集中していったのである。

この集中する人口を養うために、大都市には高層ビルが林立し、地下鉄が走り、自動車道路が縦横に伸び、鉄とコンクリートで固められた機械的環境を形成して、大都市はますます膨張していった。そのような欲望の巨大組織とも言うべき大都市の中で、人々は享楽的な生活を享受したのである。二十世紀の文明は大都市文明でもあった。

このような大都市にひしめき合って生活したのは、膨大な数にのぼる故郷喪失者達であった。彼らは、故郷の共同体を捨て、自由と便利さを求めて都市に流入してきたのだが、しかし、それゆえにこそ、自らの拠り所を失って、右往左往する群衆と化していった。都市において、旧来の秩序が崩壊し、巨大な機械仕掛けの管理体制が必要になったのも、故郷を喪失した大量の群衆が都市に密集するようになってからのことであった。

十九世紀以来、産業技術文明の発展とともに、人々は共同社会から解放されて自由になったのだが、同時に、そのために、人々はバラバラになり断片化してもいった。この断片化した人々を再組織化していったのが、二十世紀の大都市文明であった。企業や労働組合、政党や宗教団体など、様々な集団組織は、断片化された大衆の再組織化の道具であった。近代の自然科学は、物質を細分化して原子にまで至り、それを再統合して物質の組成を明らかにしようとしたが、現代社会も、同じように、断片化した原子のごとき人々を再統合して、多くの巨大組織を形成していったのである。このような大衆社会化は、確かに十九世紀から始まっていたのだが、二十世紀は、これをさらに大規模に実現するとともに、そのような社会構造を地球上に広汎に拡散させていった。

十九世紀も、二十世紀も、産業技術文明の目覚ましい発展とともに、社会の階層的秩序や慣習は瞬く間に崩壊し、人々は平均化され水平化されていった。この平均化され水平化された人々が大都市に群居し、巨大な大衆社会を形成したのである。そのような人々は、旧来の秩序から離反したために、自らのアイデンティティを失って、内面に孤独と不安を抱えていた。そのために、彼らは、また、皆が同じであることを確認するために寄り集まり、様々な標識のもとに様々な集団を形成したのである。現代の大衆社会は、そのような平均人によって形成される多くの集団によってつくられている。そこには、どれほどの個性というものもなく、ただ画一化された群衆が液体動物のようになっている。めくだけである。

#### 情報化社会という名の劇場社会

そのような平均化された大衆を一挙に糾合して、情報や映像が間断なく飛び交う均質な社会を築き上げたのが、二十世紀のマス・メディアであった。新聞は言うに及ばず、何より、ラジオやテレビが人々に大量の情報を提供して、人々の意識を支配し、社会全体に君臨した時代、それが二十世紀という時代であった。二十世紀は情報化の時代でもあった。

それまで主に通信に使われていた電波を民間企業に最初に開放し、商業放送を開始したのは、アメリカであった。一九二〇年にペンシルベニア州ピッツバーグのウエステイグハウス社が設立したKDKA局は、世界最初の商業放送局であった。以来、ラジオ放送は世界中に広まり、二十世紀の情報化社会の幕が切って落とされた。ラジオ放送は、ニュース、スポーツ、音楽、演説、ドラマ、娯楽、教養、健康、あらゆる番組を編成し、あらゆる情報を不特定多数の聴衆に伝達して、大衆の心を一挙に捉えた。世界中の情報が家庭の中に直接飛び込んで、人々は、居ながらにして音楽会やスポーツ競技の雰囲気を楽しむことができた。家庭の居間が、そのまま、世界中の情報を獲得し、それに反応し興奮する劇場と化したのである。

ラジオ放送の開始こそ、二十世紀の情報化社会の出発点であり、それは、十九世紀末以来の科学技術の進展の大きな成果であった。しかも、ラジオ放送が最初に開始されたのがアメリカだったというのも、二十世紀を象徴する出来事であった。二十世紀は、アメリカの世紀であり、科学技術の世紀であり、同時に、大衆文化の時代だったのである。ラジオが普及した二十世紀前半は、また、映画の流行した時代でもあった。映画もアメリカで最初に開発されたものだったが、これも瞬く間に世界中に広がった。映画は、世界中の出来事やドラマを直接目に見える映像として人々に提供し、人々は、それらを楽しむために足繁く映画館に通った。

この映画とラジオを結びつけてテレビジョンとして開発したのもアメリカであり、すでに第二次大戦前には、その実験的な放送が開始されていた。そして、第二次大戦後、テレビ放送は急速に世界中に普及していった。音声ばかりでなく、映像までも伴って、あらゆる情報を直接家庭の中に送り込むことを可能にしたテレビは、ラジオ以上に、社会をますます劇場化していった。テレビの画面に登場する映像は単なる現実の影にすぎなかったのだが、二十世紀後半の大衆は、この現実の影を裏と見込み、この幻影世界の中で生活するようになった。その幻影が膨大な大衆によって共有され、この共同幻想の中に人々は埋没していったのである。

二十世紀末は情報化革命の時代と言われたが、情報化革命は、実際には、すでに、二十世紀前半から後半にかけてのラジオ・テレビの普及とともに進行していた。二十世紀末は、ラジオ・テレビをはじめとして、電信、電話、映画、テープ、ビデオ、CD、コピーなどの複写技術が、コンピュータや集積回路の技術の発達のもと、様々な複合されて、より複雑な情報機器を生み出し、より複雑な情報化社会を形成した時代であった。

このマルチ・メディアの発達とともに、社会全体のネットワーク化はますます進展し、社会の劇場化はほとんど極限にまで達した。ここでは、大量の情報が激しくやりとりされ、あらゆる情報が飛び交って充満し、社会は一種の発熱状態を呈した。二十世紀末の段階では、世界各地の事件はほとんど時間をおかず衛星放送で同時放送され、多国籍企業では、地球全体に張り巡らされた本支店網が二十四時間稼働し、国際金融市場も昼夜休むことなく動き、瞬時に情報が交換されるようになったのである。

二十世紀は、このように、情報化という名のもとに、世界全体が一つの劇場と化していく過程の中にあつた。ここでは、思想からファッションに至るまで、東の間の流行が世界中の大衆を支配し、大衆はマス・メディアによって操作され盲動した。大衆は、マス・メディアによって形成される得体の知れない世論に支配され、時折登場してくる大衆煽動家の後を追ひ、煽り立てられるセンサーショナルな事件に興奮し、独裁者や映画スターやスポーツ選手を偶像化した。

だが、これらマス・メディアが過剰なまでに提供する刺激的な情報も、また、大衆によつていとちやく消費されてもいった。次々と津波のように押し寄せてくる情報を、人々は十分吟味するということもなく、すぐに忘れ去つてもいったからである。マス・メディアが送り出す政治家や映画スターやスポーツ選手の情報も、単なる商品、消費物資にすぎず、その時々々の単なる記号にすぎなかつた。二十世紀の情報化社会は、すべてのものを単なる記号に還元してしまつたのである。

十九世紀の社会は、主に、人間の手足の延長としての機械が支配した社会であつた。それに対して、二十世紀は、特に、人間の目や耳の延長としての機械、つまりマス・メディアが社会を支配した時代であつた。二十世紀人は、人間の目や耳の延長としてのマス・メディアを通して、外界を認識した。ラジオやテレビはそのような人間の器官の延長上に発達したものであるが、それらは、登場すると同時に、二十世紀人の知覚器官と化し、二十世紀人はそれなくして外部の世界を捉ええないほどになつてしまつた。しかも、二十世紀人は、ラジオやテレビがつくりだす世界が実在の世界以上に実在的な世界でもあるかのような錯覚に陥つたのである。

人間は、昔から、自らの身体を延長して、種々の道具つまりメディアを発明することによつて、外界を認識してきた。だが、また、人間の知覚構造は、この人間が発明したメディア自身によつても支配されてきた。メディアの変革と発達に応じて、人間は外界の認識を変革してきつたのである。かくて、二十世紀が生み出したラジオやテレビとい

うメディアは、人間の聴覚や視覚を刺激し、広大で感覚的な外界を形成するとともに、大量の感覚的人間を生み出したのである。

二十世紀が開発した電磁波利用技術は、時間と空間を一挙に克服したため、世界中の大量の情報を大量の大衆に一挙に伝えることを可能にした。だが、この大量の情報を受け取る大衆は、洪水のように押し寄せてくる過剰な情報を、ただ感覚的に受け取り、それに感覚的に反応し、すぐに忘却していくだけであった。人々は、与えられるセンサーシヨナルな情報にしばしば興奮するが、またすぐさま忘却もし、これを繰り返すうちに、逆に無感動な人間にもなっていた。二十世紀の大衆は、ラジオやテレビなどメディアを通してのみ外の世界を知覚するようになったから、次第に外界の自然に対する実在感を失い、思考力や判断力さえ麻痺させていったのである。人々の精神は散乱し、持続を失っていった。それは、メディアというものが二十世紀の人間になした復讐だったのかもしれない。

#### 大量消費社会と使い捨て文化

このようなマス・メディアが作りだす劇場社会の中で、二十世紀の人々は、耐久消費財からファッションに至るまで、大量の消費生活を享受した。

大量消費生活を最初に生み出したのも、アメリカであった。第一次大戦が終わって、一九二〇年代に入ると、アメリカの大量生産技術は耐久消費財の量産に向かった。ラジオや蓄音機が大量に出回り、電気冷蔵庫、電気洗濯機、電気掃除機、電気アイロン、扇風機など、家庭電化製品が大量生産され、アメリカの家庭を満たした。さらに、すでに二十世紀初頭に大量生産方式が開発されていた自動車も、想像を絶するほどの量産が行なわれ、自動車は大衆レベルまで普及していった。多くの家電製品によって家事労働を軽減し、余った時間でラジオ番組やレコード音楽を楽しむ、週末には自家用車で買い物やピクニックに出掛けるといった、今日の先進諸国では当たり前になった生活様式を最初に編み出したのが、二十世紀前半のアメリカだったのである。それ以来、このアメリカン・ウェイ・オブ・ライフは世界中の人々を魅了し、誰もがこのような豊かな暮らしぶりを夢み、受け入れていった。抗することのできない消費生活への魅力によって、大衆消費生活は急速に世界中に広まっていったのである。

十九世紀半ばにヨーロッパに生まれた百貨店も、二十世紀には、アメリカの大都市で隆盛を極め、大衆の消費意欲を掻き立てた。このデパートという新しい流通産業こそ、



二十世紀の大衆消費社会の象徴であった。それは、大衆の欲望を刺激し、消費を奨励し、豊かな生活を演出した。そのことによって、より大量の製品の生産を可能にしようとしたのである。豪華なデパートには多種多様な商品が陳列され、しかも、人々はそれを自由に手に取って選ぶことができたために、買い物は一種の娯楽になっていった。そして、消費者は王様に祭り上げられ、消費は最大の美德に変わっていったのである。

大量仕入れによってコスト・ダウンをはかり、量販を可能にしたチェーンストア方式を生み出したのも、一九二〇年代のアメリカであった。それは、同じ形の小店舗を広い地域に分散させ、あらゆる面で大幅な経費節減をはかり、安価で豊富な商品群を大量に売りさばいた。

賞賛すべきなのか、批判すべきなのか、同じ頃、アメリカでは、分割払いのクレジット方式も生まれている。それまでの耐久消費財の購入は、貯金をしてお金がある程度たまってから購入するというやり方が一般的であった。ところが、この頃から、クレジット会社が登場し、そのため、金を借りて先に商品を手に入れ、その後、借金返済のために働くという生活形態が生まれた。それによって、大衆の欲望はますます刺激され、消費意欲も掻き立てられ、労働意欲も引き出され、アメリカ経済は膨張に膨張を重ねていったのである。

この大衆の欲望の刺激に貢献したのが、マス・メディアを使った広告であり、それを企業化した広告業であった。それは、大衆の要求に応えるというよりも、むしろ、大衆の欲望を無理に掘り起こし、大衆がもつべき夢を無理強いさせた。大衆は、その夢を追うのに駆り立てられたのである。

二十世紀前半のアメリカ経済の発展を支えていたのは、そのような過剰なまでの欲望の刺激と過剰なまでの消費の奨励によって成り立つ大衆消費社会構造であった。世界の先進国は、どこも、このようなアメリカの大衆消費経済を採用し、自らの経済発展を実現せざるをえなかった。

だが、このようなアメリカ的生活様式は、物の使い捨ての上に成り立つものでもあった。過剰なまでの大量生産を可能にするには、大量の消費を必要とし、その回転をより早くする必要があった。そのために、自動車から家電製品に至るまで、次から次へと使い捨てられていった。他社を追い抜くためにも、自社の新製品を買わせるためにも、自動車や家電製品は次から次へとモデルチェンジがなされ、以前のものは、まだ十分使用に耐えるものでも、人工的に陳腐化され、スクラップ化されていった。企業によってあ

あらゆる商品がファッション化され、そのファッション感覚が売られたのだが、ファッションであるがゆえに、それさえすぐに使い捨てられていった。激しい流行の変化の中で、商品の寿命はますます短くなっていたのである。しかも、企業によって誘導される使い捨て文化の中で、人々は、ますます利那的な時間感覚に支配され、持続するものを失い、飽きっぽくなってもいった。アメリカ的生活の豊かさは、大量浪費経済の上に成り立つ砂上の楼閣のようなものだったのである。浪費の生活を営むには、お金はいくらあっても足りず、ますます拝金主義は募っていった。このような生活様式がアメリカから世界中に広がり、世界を席卷したのが、二十世紀だったのである。

#### 大量消費社会と都市文明

二十世紀の都市文明は、そのような大量消費社会の縮図であった。

大都市では、どこからともなく大量の物があふれ出てきて、どこへともなく消費されていった。ここでは、人々は消費の一単位にすぎず、個性をもった個人としては扱われない。なるほど、大都市の巨大市場では、その発達とともに、消費者の個性にあった商品が売られ、個性ある消費文化が作りだされていくようではあった。しかし、その個性ある消費文化そのものが、企業によって企画され、画一的に大量生産されたものによって成り立つものであった。個性と言っても、人工的に作りだされた個性にすぎない。個性的な生活ということまでも含めて、すべてのものが画一的に生産されていくために、人々の好みも画一化していった。人々は、そのような画一的な消費文化に否応なくはめ込まれ、消費の一単位としての大衆にされていたのである。

巨大都市は、生活空間を均質化し、人々を平均化したのである。この平均化された大衆が大量の物資を消費し、ファッションやレジャーに時間を費やす社会、それが二十世紀の生み出した都市社会というものであった。確かに、都市社会に生まれる文化は、刺激的で変化に富み、人々を魅了するものであった。しかし、それは、また、感覚的で利那的な持続性のない文化にすぎなかった。

巨大な都市文明は、情報、通信、交通網を縦横に巡らし、文明の利器に囲まれた豊かな生活を実現した。人々は、この過剰な体制の中で、まるで玩具を扱って楽しむ子供のようになり、生活必需品から耐久消費財に至るまで、大量の物を消費し、あり余る余暇を、スポーツや演劇、映画やイベントに明け暮れて暮らすようになった。ここでは、遊びは単なる気晴らしとなり、必ずしも精神の充足が得られたわけではなかった。そこに生み

出される消費文化は、マス・メディアが作りだすセンセーションや企業が企画するイベントなど、凡庸な文化にすぎなかったが、大衆は、ちょうど劇場の中の聴衆のように、それらが生み出す幻想を共有し、それに埋没して生きていくようになった。人々は、与えられた豊かな体制の中で、いつまでもそれに満足し、甘えて生きていくとした。巨大な都市文明の中で、大衆は、まるで文明の寄生虫のように、世界中から集まる物資や情報を消費していった。大衆は、思想でも科学でも、スポーツでもファッションでも、何ものも消費してやまなかったのである。

しかし、このようなことを繰り返していれば、いずれ答めはある。

現に、大量消費経済は、多くの問題を投げかけた。大都市での住環境の悪化や交通渋滞、水質汚染や大気汚染、大量の廃棄物など、大量消費経済のもたらした環境悪化は、次第に大都市の生活空間を蝕んでいった。このまま大都市の生活環境が悪化していくと、やがて富裕層が都市から離れ、その代わり貧困層や第三世界からの労働者が都市に住み着き、都市はスラム化していくであろう。すでに、その傾向は、ニューヨークなどには現われている現象であり、二十一世紀の都市文明の行方を暗示している。

十九世紀以来、世界の都市は膨張に膨張を重ね、その勢いを地方にまで及ぼし、地方をも都市化してきた。しかし、膨張には限界がある。都市文明も、どこまでも膨張していけるものではない。二十世紀が生み出した巨大都市も、やがて人間の魂と環境を浸食して、活力を失っていくであろう。

二十世紀がつくりだした豊かな文明は、同時に、それを消費していく大衆を大量に生み出した。この大衆の消費的な生活は、それを成り立たせた社会そのものを浸食していくことになるであろう。そのことによつて、二十世紀の豊かな文明も、また、衰退していくであろう。二十一世紀の文明は、そのような衰退の兆候を内包しながら、しかも、それに人々が気づかぬまま浮遊する無定形な文明になるであろう。

## 2 大衆の国家

### 大衆民主主義と欲望の肥大化

十九世紀後半から二十世紀にかけての科学技術の進展、産業構造の大規模化、人口の増大などによって形成された大衆社会は、二十世紀の政治形態をも大きく変化させた。自由民主主義を採用した国家も、この大衆社会化現象によって、個人主義的な自由主義

から集団主義的な民主主義へと大きく変わっていった。

古典的自由主義では、自立した個人の自由な意思が尊重され、たとえ代議制民主制がとられた場合でも、代議員一人一人の自由で責任ある見解が重んじられた。ところが、工業化の進展とともに人口が増大し、国家の抱える国民の数が膨大な量になって、社会が大衆化してくると、大衆の政治参加の要求は日増しに募り、どの国家でも、次第に普通選挙が実施されるようになってくる。そして、普通選挙が実施される段階になると、代議制民主制も政党中心の政治に変化していった。その結果、代議員も、個人の自由な意見よりも、党の意見に従って行動しなければならなくなり、選挙民も、個人としての代議員より、政党の方を中心に選ぶようになってきた。そのため、各政党は、できるだけ大衆の支持を得るために、絶えず大衆に取り入った。代議員も、大衆の支持を取りつけるための政党の道具とされ、政策決定も、できるだけ多くの大衆の支持を得るために、大衆への迎合に終始することになった。こうして、大衆社会の登場とともに、自由民主主義は次第に大衆の目先の欲求に左右されるようになった。古典的な自由民主主義は、大衆民主主義へと変貌していったのである。

古典的な自由民主主義から大衆民主主義への変化は、普通選挙の実施あたりをメルクマールにしてみることができる。成年男子による普通選挙が最も早くに発達したのは、十九世紀のアメリカにおいてであった。ついで、十九世紀後半のイギリス、フランス、ドイツなどヨーロッパ諸国やその海外植民地国家が続き、二十世紀になって、日本などにも波及してくる。婦人参政権も、これより少し遅れて、アメリカを先頭に、十九世紀後半から二十世紀前半にかけて実施されるようになった。この選挙民の数の急激な拡大とともに、古典的な自由民主主義は次第に合わなくなり、大量の有権者の多様な要求を糾合するために、政党政治が確立されていったのである。ほとんどの先進自由主義諸国が普通選挙制度を拡大し、政党政治を制度として確立したのは、二十世紀になってからとみてよいであろう。かくて、二十世紀は、政治が大衆の大衆の気分によって左右される大衆民主主義の時代になったのである。

選挙民の数の拡大とともに、複数政党制が確立していったのも、大量の大衆の多種多様な要求を吸収し、政治に反映するためであった。だが、それとともに、政党の力は強大になり、代議員は党議への服従を要求され、一人一人の代議員の価値は次第に低下していった。また、重要な政策に関する決定は、まえもって多数政党やこれと他党との妥協によって決められ、議会での討論は単なる儀式と化していった。議会の地位も次第に

低下していったのである。

大きな力を揮うのは多数政党であり、議院内閣制をとっている場合には、この多数党とこれによって形成される行政府であり、政府や政党の長である。やがて、重要な政策決定は、多数党を牛耳る一人または少数の実力者によって決定されるようになっていく。本来の民主主義は、主権をもった多数の国民の意思を反映した各議員が議会で自由に討論し、政策を決定するところにあった。ところが、この本来の民主主義の理想は、政党政治の爛熟とともに、次第に少数者による支配へと変質していった。選挙民の量が増えるに伴って、選挙民一人当たりの価値も低下していったのである。民主制が、選挙民の量の拡大とともに、一種の寡頭制に逆転していくという矛盾を抱えたのも、二十世紀のアイロニーであった。

しかも、政党は、できうるかぎり多くの代議員を擁し、議会を制する必要があるから、その政党の長には、しばしば、大多数の大衆に人気のある政治家を当てるようになった。政策の立案や実行に関する能力は、二の次にされたのである。こうして、選挙は、次第に大量の大衆による人気投票と化していった。

このような大衆民主主義のもとでは、凡庸な大衆が、自分たちの願望や幻想を託して、凡庸な代表者を、まるで人気投票のようにして選びだしてくるようになる。従って、選びだされてきた大衆の代弁者は、大衆の願望や幻想を象徴する凡庸人であることが多かった。政治的な定見も手腕もない人格・識見ともに劣った芸人のような政治家が、大量の票を集めて政治家に選ばれたりするようになったのは、そのためである。

一九三〇年代に、ドイツの大衆の不満や苛立ち、不安や願望を一手に吸収して登場してきたヒトラーなども、大衆民主主義の生み出した怪物であった。だが、大衆民主主義の生み出す凡庸な代表者は、ヒトラーのような独裁者だけとは限らない。第二次大戦中、「ユー・アー・マイ・サンシャイン」というよく知られた歌をラジオで歌って、ルイジアナ州知事に当選した歌手、ジミー・デイヴィスなども、大衆民主主義が生み出す典型的な政治家であった。大衆は、大衆とただ共鳴しているだけの凡庸人を押し立ててくるようになったのである。大衆民主主義のもとでは、およそ指導者としての資格のない者が指導者として登場してくる。大衆が自らの凡庸に合わせて凡庸人を偶像化し崇拜し出したのが、二十世紀であり、二十世紀の大衆民主主義であった。

そのような凡庸な偶像を政治指導者として仕立て上げるのに、二十世紀の生み出したマス・メディアの果たした役割は大きい。二十世紀は、ラジオやテレビなどマス・メデ

イアが大量の大衆を糾合し、砂のような大衆社会を一時的な興奮の渦巻く劇場社会に変えた時代であった。政治が、マス・メディアによってつくられる劇場社会を利用しないはずはない。マス・メディアを意識的に利用し、大衆を思うように引っ張っていく大衆煽動家が現われたのも、当然であった。二十世紀前半に、ラジオを利用して出てきたヒトラーなどはその典型であった。だが、政治がマス・メディアを通して意識的にせよ無意識的にせよ大衆操作を行なうようになったのは、二十世紀後半も変わりはない。そのため、二十世紀の政治指導者でも、時代を追うことに、ただ大衆受けするだけの凡庸な政治指導者しか登場しなくなったのである。

かくて、大衆民主主義のもとでは、政治は、大衆の目先の欲望によって盲動することになった。凡庸な政治指導者は、大衆の欲望の記号にすぎなかったのである。民主主義がその原理とした自由・平等も、欲望の自由、欲望の平等となり、大衆は、自由のもとに、多種多様な要求を突きつけ、平等のもとに、社会的経済的条件そのものの平準化を要求するようになった。

多くの利益団体が結成され、それが政党や議員を動かし、政治そのものを動かすようになったのも、大衆民主主義における欲望の肥大化現象の一つであった。その結果、議員は利益団体と党とのパイプ役に、政党は利益団体と国家とのパイプ役にすぎなくなった。政府は、政府の方で、それら諸政党から上がってくる利益団体の利害の調整役にならざるを得ない。大衆民主主義のもとでの国家は、このようにして、大衆の欲望の溜まり場と化したのである。

二十世紀の国家が時代を追うことに巨大な組織国家になったのも、大衆の欲望が肥大化の一途を辿っていったからであろう。国家は、利益団体などを通して上がってくる大衆の膨大な量の要求を調整し処理するために、巨大な官僚組織を擁し、しかも、それは巨大化の一途を辿った。そして、逆に、個々人は、この巨大組織に管理されるだけの欲望の一単位にすぎなくなっていくのである。もしも、今日の自由民主主義国家が、このまま大衆の膨大な欲望に還元され、それに指導者が絶えず迎合していく衆愚政治を繰り返すなら、国家は、生産力の低下や経済力の後退、治安の悪化を招いて、衰弱していくことになるであろう。

#### 全体主義の幻影

二十世紀が生み出したナチズムやコミュニズムなど、全体主義国家も、科学技術や産

業主義の発展によって形成された大衆社会化現象を抜きにしては考えられない。

過度な欲望の渦巻く二十世紀の大衆社会では、大衆の欲求は無限であり、それが叶えられないと、大衆の不満はいよいよ昂じ、かえって強力な指導者を求めるようになる。そのようなところへ、大衆のすべての不満を吸い上げ、その不満解決を約束して、大衆の人気を博す大衆煽動家が現われ、それが大衆の偶像にのし上がってきたりする。そして、大衆の過剰な願望がこの煽動家一人に託され、かくて、この煽動家はあつというまにすべての権力を掌握し、大衆の名のもとに国家を独占し、一個の独裁者になってしまう。

一九三〇年代のドイツに登場したヒトラーは、そのような独裁者の典型であった。一九二九年の世界恐慌は、第一次大戦の敗北から立ち上がろうとしていたドイツに大きな打撃を与え、経済危機はいよいよ深刻化し、社会は混乱を極めた。そのような状況のもとに抬頭してきたのが、ヒトラーの国家社会主義党（ナチス）であった。ヒトラーは、混乱の中にある国民大衆に、民族の血の団結と大ドイツ主義のスローガンを掲げ、ベルサイユ条約の破棄、対外債務の破棄、国家社会主義的諸政策の実行など、ドイツの現状打破を次々と約束していった。こうして、国民大衆の不満を吸収していったヒトラーは絶大な人気を獲得し、その結果、ナチスは、一九三〇年に四議席から一〇七議席に躍り出、三二年には第一党に躍進した。ヒトラーは、翌年には首相に就任、三四年には大統領制を廃して總統制を敷き、大衆の絶対的な支持のもと、民主的手続きによって、その独裁制を確立していった。同時に、ヒトラーは急激に神格化されて、ドイツ国家は、ヒトラーと一部のナチ黨員に占有され、強大な全体主義国家に変貌したのである。

一九一七年のロシア革命を成功に導いたレーニンも、同様に、ロシアを強大な全体主義国家に仕立て上げた。マルクスの階級闘争理論を受け入れたレーニンは、第一次大戦での国民生活の破綻とロマノフ王朝の弱体化を契機に、比較的容易に政權奪取に成功した。そして、権力を掌握すると、共産主義国家建設のために人民を駆り立て、反対者は容赦なく粛清し、独裁制を確立していった。スターリンの恐怖政治も、単にこれを引き継いだにすぎない。

レーニンやスターリンも、ヒトラー同様、大衆を如何に操作し動員するかに心を砕き、それによって国家建設を成し遂げようとした。そのために、報道機関を独占し、「人間による人間の搾取の掃蕩」「階級の完全な廃絶」「社会主義の建設と勝利」というような目標を掲げ、ユートピア実現に向かって盛んな宣伝戦を展開し、大衆を駆り立てた。

その宣伝は一種の宗教的な呪縛力を持ち、ヒューマニズムと抑圧への怒りに目覚めた大衆の心を掌握した。全体主義国家にとって、目標とする社会を建設するには、大衆動員は不可欠だったのである。

さらに、大衆の心を捉えるために、 Kommunismus は教義を極度に単純化して、諸悪の根源が資本家階級と私有財産制度にあり、これさえ倒せば理想社会が出来るとした。大衆は、紋切型の単純な考えを好む。社会主義国家の大衆も、そのような単純な教義に魅せられて、社会主義建設に向かって熱狂的に行動したのである。マス・メディアはすでに一人の独裁者の意のままに動くようになっていたから、批判意欲や判断力を失った大衆は、一方的に宣伝される教義を信じ、独裁者の命令を繰り返し、それに積極的に協力していった。全体主義国家は人工的につくられた劇場社会であり、従って、そこに見られたのは、異常な熱狂と集団的狂信現象であった。何度かにわたって実施されたスターリンの五カ年計画で目覚ましい経済成長が達せられたのも、大衆の狂信現象に支えられたことであった。大衆は、熱狂的に、工場の建設、運河の掘削、鉄道の敷設、集団農場の組織に参加した。その結果、スターリンは、神のように崇拜され、讃美され、偶像化されていったのである。

反ユダヤ主義や大ドイツ帝国の建設を叫んで大衆の熱狂的支持を獲得し、一個の独裁者となったヒトラーも、このスターリンの方法を模倣し、大衆を動員して失業を克服し、経済発展を企図し、対外戦争を企てた。大躍進政策や文化大革命で膨大な数の大衆を集団魔術にかけ、人民公社化や走資派追放を実施した毛沢東なども、大衆を意識的に操作した独裁者であった。そのような数々の独裁者に操られた二十世紀は、集団的狂気の世紀であった。二十世紀は、いわば、自分自身を人一倍正気と思いついでいる狂人に導かれた時代だったのである。

ナチズムにせよ Kommunismus にせよ、全体主義が掲げるイデオロギーは、大衆動員と大衆操作を可能にする道具であった。全体主義国家では、イデオロギーが疑ってはならない絶対の真理とされ、しかも、この真理を党や一人の独裁者が独占し、このイデオロギーに基づいて支配が行なわれた。そのため、全体主義のイデオロギーは教条化され、しばしば敵対者の抹殺のためのレッテルに利用されてもいった。だが、そのような単純化されたイデオロギーは、大衆に好まれもしたのである。レーニンやスターリンは、階級闘争のイデオロギーのもとすべてを割り切り、これに抵抗する者は、すべて人民の敵というレッテルを貼って抹殺していったし、ヒトラーも、人種至上主義のイデオロギー



のもとすべてを割り切り、ユダヤ人を共通の敵に仕立て上げて、ナチ運動に大衆を巻き込んでいった。

大量虐殺というような戦慄すべきことが起きたのも、イデオロギーの教条化のためでもあった。レーニンやスターリンは、社会主義建設の名のもとに、おびたしい数の人々を虐殺していったし、ヒトラーも、第三帝国の建設のために、ユダヤ人をはじめポーランド人やロシア人を次々と虐殺していった。のみならず、毛沢東の中国革命でも、ボル・ポト派によるカンボジア革命でも、共産社会建設のために、大量の罪なき人々が虐殺されていった。二十世紀の裏面史は虐殺の歴史でもあった。邪教の流行した時代だったのである。

ナチズムにしても、コミニズムにしても、二十世紀が生み出した全体主義は、どれも未来に素晴らしい国家や社会の到来を約束した。だが、それらが思い描いた理想国家や理想社会は、どれも大いなる幻滅に終わった。そこに残ったものは、ただ、おびたしい数の虐殺された人々の屍だけだったとも言える。二十世紀は、人々が奇妙な幻想にかられた時代であり、しかも、その幻想によって多くの人々が殺されていった時代であった。人間は幻想を求める動物であり、幻想なくして生きていくことのできない動物ではあるが、その幻想によって、自分達自身を殺戮することのできる動物でもあったのである。

### 戦争の世紀

二十世紀は、戦争の世紀でもあった。この世紀の前半には、二度の世界大戦があり、後半の東西冷戦でも、第三世界を巻き込んで多くの熱い戦争が戦われたことをみれば、〈第三次世界大戦〉が戦われたとみることできる。二十世紀は、戦争の絶えなかった時代であり、戦争に明け暮れた時代であった。この二十世紀の数多くの戦争によっておびたしい数の人々が犠牲になっていったことを考えれば、二十世紀は悲惨な時代でもあった。大衆消費社会では物が使い捨てられていったが、ここでは、人が使い捨てられていった。

現に、第一次大戦や第二次大戦では、科学技術の発達に伴って、兵器の殺傷力が極度に高まり、戦争は総力戦化し、国民全員が戦争に巻き込まれざるをえなかった。そのため、戦闘員はもちろんのこと、民間の非戦闘員も含めて、犠牲者は膨大な数にのぼった。第一次大戦でも、戦死者八百五十万人、負傷者二千万人、行方不明者と捕虜八百万人に

のぼったと言われる。近代兵器を使った戦争が大量の人命と物資と富とを消耗する消耗戦になることを、第一次大戦は証明したのである。

そのことは、第二次大戦でも変わることなく、むしろ、アジア・太平洋地域への戦線の拡大や科学技術の発達に伴って、犠牲者の数は何倍にも増幅した。特に、第二次大戦では、アジアでもヨーロッパでも、発達した爆撃機によって都市空襲が行なわれ、前線から離れた本国の多くの民間人が殺傷され、住む家を焼き払われ、住む土地を失った。さらに、第二次大戦末期にアメリカによって広島と長崎に投下された原爆は、一瞬にして何十万という人命を奪い、傷つけ、生き残った人々も放射能による後遺症に悩んだ。これほど悲惨な戦争もなかったであろう。二十世紀は殺戮の時代であったと言わねばならない。そこには、戦さによる死の名誉はない。それは、高度に発達した科学技術の背後にある空恐ろしい虚無の深淵をあらわにただけである。技術が発達した分、知恵は退化した。今日われわれが享受している科学技術によってしつらえられた快適な空間も、数多くの屍の上に築かれたものである。

第二次大戦後の代理戦争やゲリラ戦も、戦闘員と非戦闘員の区別をなくし、大量の殺戮を生むことになったという点では、何ら変わることはなかった。二十世紀の戦争ほど悲惨なものはない。十九世紀までの戦争では、まだこれほど殺戮兵器が発達してはいなかったこともあって、戦争ほどこまでも政治の延長として戦われ、まだ法と秩序と節度の世界の中にあつた。それに対して、二十世紀の戦争では、それらすべてが失われ、無視され、無秩序化したのである。

だが、この二十世紀の悲惨な戦争も、単に好戦的な独裁者や政治指導者のみによって引き起こされたのではない。そこには、大衆の支持があつた。発達した科学技術を駆使した二十世紀の戦争は、必然的に前線と本国、戦闘員と非戦闘員の区別をなくしたから、物量戦を遂行していくためには、本国における国民の生産努力が大きな意味をもつようになった。そのため、国家は、国民大衆の戦意高揚のために、積極的にラジオや新聞などマス・メディアを使って、宣伝戦を繰り広げた。このような国家による大衆操作に、大衆はいともたやすく便乗し、敵愾心を剥き出しにし、マスコミも積極的にそれを煽り立てたのである。このことは、一人の独裁者によって支配される全体主義国家ばかりでなく、民主主義国家も同様であつた。全体主義国家の独裁者や民主主義国家の政治指導者は、そのような大衆の支持と熱狂に基盤をおいて、戦争指導を行ないえたのである。

全体主義にしても、民主主義にしても、ナショナリズムは、大衆の情念を捉えるのに最も適したイデオロギーであった。二十世紀において、国家と国家のナショナリスティックな闘争が可能になったのも、大衆の支持を抜きにしては考えられない。二十世紀は、国際連盟でも、国際連合でも、この国家と国家のエゴイズムのぶつかり合いを抑制することに失敗した世紀である。

二十世紀は、大衆民主主義と全体主義の相対立する二種類の国家を生み出した。民主主義国家では、自由・平等の原則のもと、主権は国民大衆に散在し、国家は大衆の限らない欲望に還元され、無定形な国家となった。それに対して、全体主義国家では、一人の独裁者にあらゆる権力が集中し、国民大衆はその奴隷のように扱われ、国家は恐怖の支配する独裁国家になっていった。一方の国家では、自由は過剰なほどに許され、他方の国家では、自由はあまりにも欠如していた。節度というものが失われたのである。しかも、どちらの国家体制をとるにしても、互いにナショナリズム化して、悲惨な戦争を繰り返した時代が、二十世紀であった。国家というものが国民の性状を表現する一種の作品だとすれば、二十世紀は、国家が人間の中の非合理的な面を噴出させ、表現した時代だったと言うべきであろう。

Ⅳ  
文化の類落

## 1 低俗の崇拜と専門化

### 映画と音楽とスポーツ

十九世紀後半から二十世紀にかけて、科学技術の発達に伴い何倍にも増加した人口は急激に都市に集中し、流動的な大衆社会を形成した。大衆は、科学技術の成果によって形成された大都市の中で、あふれるばかりの物と情報に囲まれ、快楽に満ちた心地よい生活を送った。そのような大衆に刺激的な情報や映像を提供して社会を糾合したのが、二十世紀に発達したマス・メディアであった。ラジオやテレビ、映画やレコード産業、新聞や出版業が、人々の好奇心を満たす情報や映像を次から次へと提供し、人々の心を捕獲した。

ラジオやテレビは、報道ばかりでなく、スポーツや音楽、ドラマや娯楽番組を毎日編成して人々を一時間毎に楽しませ、映画も、サスペンスやメロドラマ、時代物から現代物まで、あらゆる種類の映像を大量の人々に提供した。レコード産業も、ジャズやロック、クラシックからポピュラーソングまで、あらゆる音楽を供給し、新聞は、ニュースやスポーツ記事、出版業は、大衆小説や漫画、時事解説やハウツーもの、ファッションや旅行案内、月刊誌や週刊誌、あらゆるものを作り出し、大衆の娯楽に供した。そのような中から、映画スターや人気歌手、人気タレントや人気作家など、大衆の偶像が次から次へと生み出され、これを二十世紀の大衆は崇拜した。センチメンタリズムやセンチシヨナリズムやスキヤンダリズムなど、大衆の好みに合わせて製作され、大衆が享受することによって作り出されていく文化、つまり、手軽で軽快ではあるが安易で軽薄な大衆文化を生み出したのが二十世紀であった。

なるほど、十九世紀後半も大衆文化の時代であった。だが、同じ大衆文化でも、映画の登場は、十九世紀と二十世紀を区別する画期的な事件となった。映画は、それまでの演劇とは違って、喜劇でも悲劇でも、フィルムに大量に複写され、それが多数の映画館で再現されることによって、一挙に大多数の大衆を楽しませることを可能にした。その意味で、映画は二十世紀の大衆文化を象徴するものであった。特に、映画が、無声からトーキーへ、モノクロからカラーへと発達するに従って、それは、よりリアルに人々を疑似体験の世界へと誘い込み、大多数の人々の熱狂的支持を得た。

映画がまず最初に産業として隆盛を極め、世界中に影響を及ぼしたのは、もちろんアメリカにおいてであったが、なかでも、ハリウッドで製作された映画は娯楽性に富み、世界中の大量の大量の大量に受け入れられた。全国各地に雨後の筍のように建てられた数多くの映画館は、次から次へと製作される新作映画を上映し、毎週、大量の観客を集めた。時代を象徴するような大スターが大衆の人気を博して登場してきたのは、そのような状況からであった。二十世紀前半、イギリスからアメリカに渡って大喜劇王となったチャップリンなども、大衆の心をつかんだ独特の演技力とともに、映画という大量複写による大衆文化なくしては登場しえなかったであろう。第二次大戦後、肉体派女優として人気を博したマリリン・モンローなども、繁栄を極め爛熟期にあったアメリカの象徴として、世界中の大衆を魅了した。

音楽も、レコードという大量複写技術が開発されたことによって、大量生産と大量消費が可能になり、二十世紀の大衆文化の重要な一翼を担った。この音楽の大量複写がレコード産業として最初に興隆したのも、やはり二十世紀前半のアメリカであったが、これが、たちまちにしてヨーロッパや日本にも普及した。特に、二十世紀前半は、ジャズが、その直感性と即興性、自由なリズムと個性的なサウンドによって大衆の人気を獲得し、因習からの解放というその時代の風潮を表現した。第二次大戦後は、特に、ロック・ミュージックが、若い世代の反抗心や怒りや飢餓感に訴え、若者の熱狂的支持を得て、爆発的人気を獲得した。その代表的スター、エルビス・プレスリーやビートルズは、その時代その時代の世界中の新世代の象徴的存在となった。

スポーツも、十九世紀末以来、二十世紀全体を謳歌した大衆文化であった。巨大な競技場に多数の観客を呼び入れ、しかも、ラジオやテレビや新聞などマス・メディアを通じて大量の大衆に報じられるようになったスポーツは、急速に大衆が見て楽しむ見せ物になっていった。そして、そこでの優勝者はたちまちにして大衆の英雄となり、大衆の熱狂的支持を獲得した。そのような大衆動員力をスポーツはもっていたために、例えば、近代オリンピック競技などは、第二次大戦前にせよ、第二次大戦後にせよ、ナチス・ドイツやソ連の国威発揚の場にさえなっていたのである。このように、大衆や国家、マスコミや商業主義の支持があったために、各種スポーツは、その本来の紳士的なフェア・プレー精神から次第に外れていくことにさえなっていた。限界近くまでの記録への挑戦のために肉体を極限にまで改造したり、記録争いや勝敗のみにこだわるという幼稚な症状さえ現わし出したのは、そのためである。人間は、目先のことにこだわり

だと、本来の目的を忘れてしまい、子供っぽいことに夢中になる。そのような幼稚症こそ、大衆文化の行き着く先でもあったのである。

#### マス・メディアと出版文化

映画にしても、音楽にしても、スポーツにしても、それらが大衆に知られ、大衆に聴かれ、大衆に見られるのに、ラジオやテレビや新聞など、マス・メディアが果たした役割は大きい。一部のマス・メディアは、大衆の好奇心を買うために、映画スターにせよ、人気歌手にせよ、有名スポーツ選手にせよ、よりセンセーショナルに、よりセンチメンタルに煽り立て、大衆の過度な興奮を誘い、それによって金儲けをしようとさえした。様々な大衆の偶像を作り出し、これを崇拜させるのに、マス・メディアは大きな役割を果たした。それどころか、マス・メディアは、積極的に偶像を作り上げ、仕立てあげて大衆に売り込みさえしたのである。この大衆の偶像は、大衆の心情や願望を表現する象徴記号にすぎなかった。人間は幻想を追う動物ではあるが、マス・メディアが作り出すそのような象徴記号を、人々は、実際に見たことも会ったこともないのに、自己同一視して、偶像として崇めたのである。

だが、また、そのような大衆の偶像は、空しいことに、マス・メディアによっていとも簡単に使い捨てられてもいった。低俗なマス・メディアは、映画スターや人気歌手や有名スポーツ選手のスクリーンを暴き出し、偶像破壊によっても商売をしようとした。大衆も、薄情なもので、自ら崇めた偶像の墜落を楽しんだ。マス・メディアによって過度な好奇心を刺激された大衆が、次から次へと生み出されてくる大衆の偶像という愚神を崇拜し、同時に、残酷にもそれを使い捨てていった時代、それが二十世紀であった。恥知らずな時代だったのである。そこには、ただ、移ろいやすい空しい記号のみがあるだけで、何一つ永続し、持続するものはなかった。大量の大衆に一律に同一の情報を提供するマス・メディアの技術が発達しても、それによって表現される内容まで発達するわけではない。むしろ、内実は退化したのである。

二十世紀は、物にしても情報にしても、大量生産と大量消費の時代であった。マス・メディアは、そのような構造の中にあつて、情報の大量生産と大量消費を可能にした。だが、大衆のために大量に生産され、大衆によって大量に消費されていく情報は、そこに込められている意味内容を希薄化し、すべてを低い方に引き下げて、平準化してしまう。そのため、二十世紀の大衆文化は民衆文化としても低落してしまつたのである。

マス・メディアばかりでなく、二十世紀は、出版文化も低落の一途を辿った。出版文化の大衆化はすでに十九世紀後半から始まっていたことだが、二十世紀も時代を追うごとに出版物のレベルは低下していった。出版の世界でも、大量の大衆のために、大衆向けの通俗なものが商品として大量生産され、そして、大衆によって大量に消費されていた。そのため、出版物は、より興味本位の俗受けするものばかりが幅を利かすようになったのである。

ベストセラーというものが登場してきたのも、十九世紀末から二十世紀にかけてのことであった。それは、どのような種類のものであれ、大衆のその時その時の気分や好み、指向を反映して、短期間に大量に売りさばかれるが、また、速やかに使い捨てられてもいった。だが、それは企業の利益につながったから、商品価値のあるものとして高く評価された。それどころか、逆に、ある種の出版物は、人為的にベストセラー狙いで出版されるようにさえなったのである。そのため、出版物の質は目を追って低下していった。かくて、膨大な大衆によって構成される二十世紀の社会は、低級な出版物で氾濫することになった。消え去るべきものではあるが、世にあふれるものは、大衆小説や俗受けする言論やジャーナリズムなど、大衆向けの出版物ばかりであった。

ベストセラー作家や気の利いた評論家、芸人のような学者が、まるで映画スターやマスコミのタレントのように登場してきて、あたかも現代の賢人でもあるかのようにもてはやされるようになったのも、このような出版文化の大衆化という現象を抜きにしては考えられない。そのため、二十世紀は、三流四流の作家や知識人が大衆に迎合してその時々を謳歌する時代になったのである。彼らが生産するものは思想や文学の代用品にすぎなかったのだが、二十世紀の大衆は、それを価値あるものとして尊んだ。

二十世紀の大衆は、自分より卓越したものを畏敬することを忘れ、むしろ自分達におもねる者のみに敬意を表したのである。より高いものが忘却され、より低いもののみがもてはやされるようになったのは、そのためである。印刷術の発達によって出版物の大量生産が可能になったこと、普通教育の普及によって識字率が上昇したことは、大衆の教養を高めるよりも、逆に文化の方を低め、目を覆うばかりの出版物の質の低下をもたらした。大衆による文化の引き下げと、文化の低い方への平均化は、二十世紀全体を支配した抵抗することのできない流れであった。

二十世紀は、より高いものを求める精神を失った大衆が絶大な力をもった時代であり、その大衆によって文化が大量消費されていった時代であった。その大衆の消費傾向に合



わせるようにして、大量の低俗文化が生産され、それをマス・メディアが媒介し、ますます文化の水準は低下していった。商業主義の抗しがたい勢いの中で、大衆文化は、興奮と刺激を求めて加速度的に低俗化していった。このようにして、二十世紀の文化は、より低い方に水平化し、平均化されていったのである。大衆は善美なものへの憧憬の念を失い、偽物と本物の区別ができなくなっていたから、二十世紀の文化は、大衆をより高くするどころか、自ら低俗化していったのである。そのため、この低俗文化の大洪水の中で、まだ十九世紀には存在していた教養ある階層は次第に地下に潜り、それに応じて、高貴な精神も次々に時代から隠れていった。大衆が増長し、低俗を崇拜し、文化を引き下げ、高貴なものを排除していった時代が、二十世紀だったのである。

#### 知的欠陥人間の登場

文化の低落は、大衆文化のレベルでのみ起きただけではない。大衆から超絶している高度な文化、例えば学問の分野でも、低落と墮落は加速度的に進行した。十九世紀の少なくとも前半までは、まだ、諸学問はある共通の世界観のもとに統一され、有機的に連関し、一つの全体を形づくっていた。ところが、二十世紀になって、諸科学は、人文・社会・自然との分野でも、どんどんと細分化され、学問は、時代を追うことに専門化し、全体像を見失っていった。確かに、諸科学が細分化し専門化するに従って、諸科学から提出されてくる情報量は膨大な量にのぼっていた。しかし、その分、十九世紀にはまだあった全体的な統一と統合的理念、統一ある世界観はますます見失われていった。

二十世紀の社会が極度に分業化し、それに応じて、大量の情報が生産され、伝統的秩序を失ったように、学問の世界でも、それを反映して、学問分野の細分化と情報の大量生産が行なわれ、統一的理念は次第に見失われていったのである。なるほど、社会政治的なイデオロギーは統一的理念を提出してはいたが、これは、二十世紀のほんの百年の間にも、目まぐるしく興亡盛衰を繰り返して、永続する世界観とはなりえなかった。こうして、二十世紀の諸科学はますます細分化し、われわれの生きている世界とは関わりをもたなくなった。そして、一つの学問分野と別の学問分野の間に、何の統一性も共通理解ももてなくなっていたのである。

このような学問の細分化に対応して登場してきたのは、専門バカと言われる知的欠陥人間であった。この知的欠陥人間は、自己の専門領域にのみ閉じ籠って、ますます全体を見通せなくなっていた。というより、彼らは全体観をもつ必要がなく、ただ極く狭

い研究領域にのみ埋没しているだけで満足している人種なのである。この全体感覚を欠如した知的欠陥人間は、二十世紀の機械仕掛けの社会の構造に合致した歯車人間であり、二十世紀の精神の頹落を表現する人間類型であった。彼らにとつては、世界がどうなるうと一向に関係なく、ただ同類の間だけで通ずる言葉を交換し、閉鎖的な学問世界に安穩として生きているのが、何よりの幸福であった。学問が、世界との有機的連関を失ったのである。彼らは、全体の立場にないから、時代というものに責任をもつことなく、それでいて、機械仕掛けの時代に合致して生きていくことができた。

賢いと言ふべきか、愚かと言ふべきか、知的欠陥人間は、狭い領域の知識に精通はしているが、専門以外のことは知らず、知ろうともしない。それどころか、専門外のことについて知らないことを権利とさえしている。専門的知識が与えられていれば満足し、その限界内にとつてもとどまって、無風状態で暮らそうとする。社会や時代がどのように変化していても、狭い領域の知識に埋没して生きていく。

知識層というものは、本来は、人間社会一般について全体的統一観をもっていなければならなかったのだが、知的欠陥人間は極く一部の知識しか通じていないから、自分のやっていることが社会にどのような影響を及ぼすかということには、無関心である。そのような閉塞状態の中で知識や技術が追究されていくために、専門家集団が集まって発展させていく科学や技術の場合、全体としてどのような方向に行くのかということについては、誰も知らず責任をもたない。彼らは閉鎖的世界で業績の競争に血眼になり、一団として視野狭小的に動いていくために、全体としては空恐ろしいことを実現してしまうことさえある。二十世紀に開発された原水爆なども、そのような科学者の視野狭小に助けられて実現されたのである。二十世紀末の段階で急速な発展を遂げている生命操作技術も、何を生み出すことになるかは、当の専門領域に埋没している専門家自身にも分かっていないことなのである。

あらゆる科学は、科学という名が示す通り、本来その分野別の限界をもっている。しかし、それぞれの分野は、同時に、ある一つの真理を写し取つてもいる。ところが、知的欠陥人間は、その全体に通ずる真理については気づかず、従つて、他の分野への理解を示そうともしない。自分の信ずるある一つのパラダイムのもとに、それを際限もなく専門分化させ、その限界内にとどまろうとする。諸科学は、人文・社会・自然どの分野でも、世界をどのように見、どのように考えるかという視点を提供するものであった。そして、二十世紀も、偉大な科学者はそのような世界観を提供してききた。ところが、

知的欠陥人間は、ただ、与えられたパラダイムのもとで、極く小さな分野をこと細かく調べ尽くすのみで、大きなパラダイムが発見された時の驚異の感情を忘却してしまっている。人間は世界の中で世界を問うものであるが、彼らは、そのような人間の原初的な問いを忘却してしまつたのである。

いつまでも冬眠している動物のように、知的欠陥人間は自己の専門の中に埋没し満足している。彼らは、人生観や世界観については、たとえ自分の学問分野に関することでも、借り物の知識で済ませている。無知を知ることこそ知の出発点になるのだが、彼らは、まるで洞窟の中の囚人のように、専門以外のことに對する無知を、あろうことか美德と考へている。彼らは自己の限界を越えて飛躍しようともせず、飛躍し冒険することを極度に嫌う。知的ロマンを喪失してしまつたのである。この知的閉塞状況こそ、二十世紀の学問の低落をもたらした。際限もなく専門分化していつた二十世紀の諸科学は、学問としても頹落したものだつたと言わねばならない。

なるほど、二十世紀も前半から後半にかけて、各分野からの詳細な情報だけは大量に積み上げられてきた。だが、二十世紀は、同時に、この大量の情報の中から共通なものを見出し、諸学問を統一していく世界観が失われてもいつた。二十世紀の諸科学の発展は専門知識の量の増大に支えられていたのだが、知識量が増大すればするほど、世界の全体像は見失われていつたのである。

主に、ヨーロッパにおいてのことだが、十九世紀末も、確かに世界像の散乱の時代であつた。だが、十九世紀末の文化は、散乱を散乱として自覚した少数の例外者によつて持ちこたえられた。また、二十世紀前半の戦間期のヨーロッパも、世界観の混乱の時代であつた。しかし、ここでもなお、危機が危機として自覚されることによつて、まだしもすぐれた学問が生み出された。だが、第二次大戦後は価値観は混乱したままであり、学問はより細分化し、学問の統一像は失われたままであつた。理念というものが見失われたのである。しかも、それを学問の危機として自覚する者がほとんどいなかった。学問の細分化と知識量の膨大化によつて、諸科学の体系化が不可能になつてしまつたのである。学的精神という言葉で、人間と世界の統一像の追究を意味するとすれば、二十世紀は学的精神の崩壊の時代であつたと言わねばならない。

現に、今日出版される学術的な著作や論文は膨大な量にのぼるが、しかし、それらは、あたかも最初から博物館にしまいこまれるべき過去の遺物でもあるかのように、空しいことに、ほとんどのものが社会に何の影響も与えない。それらの著作物は、まるでひ

とり言を言っているだけにすぎないかのようなものである。評価されたとしても、せいぜい仲間うちだけでの評価にすぎない。そのような学問は、すでに社会から孤立し孤独になっているのだが、無感覚な専門家はそれを孤独と理解しない。

現代の諸科学では、各専門領域にのみ通ずる記号でコミュニケーションが行なわれているだけである。また、学界というところが、そのような専門領域のみのコミュニケーションの場を用意する。この知的野蠻人の巣窟は、社会から隔絶していることを誇りとする。学者は、学界という閉鎖社会の中で互いに肌を温めあい、学閥や派閥を作つて安穩としている。自己の殻の中に閉じ籠つて満足している学者は、自分の狭い関心のみの中で眠りこけているという意味で、大衆に属すると言ふべきであらう。

#### 創造的精神の喪失

創造的精神が失われたのである。特に、二十世紀後半の人文科学は、一般に過去の遺産の解釈や解説に終始した。なるほど、先人の遺産に学んで新しい創造的エネルギーを見つけるのが、ある意味で人文科学の精神ではあった。しかし、人文科学が単なる文献学に堕してしまい、過去の文献の一字一句にのみ拘泥し、その議論に時間を費やすようになった時、研究者は専門技術者にすぎなくなり、学問は創造性を失う。単なる文献学が流行する時、その時代の学問はすでに終末に來たとみるべきである。二十世紀末の人文科学は精神的衰退期に入り、創造的精神を失つたと言ふべきであらう。

過去の研究を専らとする歴史学でさえ、本来は、過去と現在の対話の中で、過去の人々の生き方とその時代の全体像をつかんで、生きた歴史を語り出すべきであった。ところが、歴史学も、時代が下るに従つて、ただ過去の微細な歴史事象を調査することだけに満足し、それを高度な学問と勘違いするようになった。歴史学も専門主義化し、袋小路に入り、創造的精神を失つていったのである。

かくて、人文諸科学では、多くの文献が注釈され、解釈され、翻訳されるが、新しいものを生み出す生命力は失われた。すさまじい情熱ではあるが、東西古今の古典は隅々まで解説され、集大成され、事典化されるが、そこからは、創造的なものはどれほども生み出されなくなった。学問が博物化し、単なる遺産の食いつぶしになってしまったのである。東西の文化遺産は大量に集積され、その量ほどの時代にも増して蓄積されたのだが、それでいて、人々は何を支柱に生きていけばよいのかかえって迷い、多くの思想や文物を前にして、人々の精神は逆に散乱してしまった。人文科学が、かつての偉

大な人々が追究した道と同じ道を歩むのではなく、偉大な真理を追究したかつての人々の解釈や解説にのみ終始することになってしまったからである。

二十世紀は、十九世紀と比べても、出版技術がより高度に発達した時代であった。そのため、過去何千年にもわたる膨大な知識が、主に出版物として集積されたのだが、知識量がかえって増大し、統一ある理念は見失われていった。歴史があまりにも長くなりすぎ、歴史の重荷に耐えがなくなってきたのが、二十世紀ではなかったか。どのような些細な分野でも、一人が一生かかっても追跡しきれないほど集積された知識量は、逆に、人文諸科学をより狭小な専門分野に極限化させ、骨董学化させていったのである。

自然科学にしても、人文・社会科学にしても、学問の専門化や技術化、巨大化や百科全書化は、今後も免れえないであろう。自然科学やテクノロジーの面でも、専門分化がより進行するとともに、その分、科学の巨大化はより進行し、行き着くところまで行き着くであろう。宇宙科学にしても、原子力工学にしても、生命工学にしても、二十世紀は、科学の専門化と巨大化が進んだ時代であった。十九世紀とは異なって、科学者は集団化して、巨大計画のもとに共同プロジェクトが進められるようになっていったが、その分、科学者はますます歯車化し、どこへ進んでいくのか誰にも分からないという状態になっていった。科学は、各分野が閉鎖的になってしまったため、ちょうど癌細胞のように、減るまでは巨大化し膨張し続けるようにみえる。専門的知識量の膨大化に比例して、研究分野はより細分化し、科学はより巨大化する。とすれば、科学自身が自らの知識量の重荷に耐えきれなくなる時が来るかもしれない。

## 2 世界像の喪失と対象の破壊

### 伝統的世界観の崩壊

現代は哲学の貧困の時代と言われてきた。しかし、よく考えてみれば、二十世紀だけをとってみても、この時代は、ヨーロッパをはじめとして、アメリカでも、アジア諸国でも、ある意味で、多くの思想が過剰と言ってもいいほど生産された時代でもあった。むしろ、新しい思想が次々と目まぐるしく生産されてきたために、何を信じて生きていけばよいか分からなくなった時代が、二十世紀だったのではないか。人々は、大量に生産されてくる思想をほとんど消化しないうちに、消費してしまい、結果として、全体的な世界像を見失ってしまったのである。

しばしば耳にすることはあるが、二十世紀は、思想的には、フロイトとマルクスに導かれた時代であったと言われる。確かに、フロイトは、人間の自我を無意識の方から解いてみせ、マルクスは、社会の上部構造を下部構造の方から解いてみせ、どれも、ヨーロッパの伝統的世界像を破壊し逆転させたという点で共通していた。

現に、フロイトの『夢判断』が出版されたのが、二十世紀の初頭、ちょうど一九〇〇年であった。それ以来、二十世紀は、人間の自我の基底にある無意識の世界に迷い出ることになった。フロイトは、夢を解釈することによって、人間の意識下にある世界を掘り下げるとともに、その最も奥深くに潜む性の衝動、リビドーを発見した。そして、この性の衝動、リビドーが抑圧されて、他にはけ口を求めることによって、人間の芸術、宗教、実践、あらゆる創造行為が出てくると考えた。人間の自我は、自我意識によって自覚されない意識下の衝動に支配されており、それまでの均衡のとれた自律的人間というイメージは幻想にすぎないと考えたのである。

ヨーロッパの伝統的なキリスト教世界では、人間の魂は神によって創造されたものと考えられていたのだが、フロイトはこれを逆転して、人間の魂を意識下のリビドーによって支配されるものとみた。そのため、天才の創造行為も、犯罪者の犯罪行為も、神経症患者の異常行為も、等しく抑圧されたリビドーから解かれ、人間は水平化された。その結果、個人の決断と自由は、機械仕掛けの心理構造の中に溶解してしまったのである。それは、人間破壊の思想であった。フロイトは、理性に基盤を置く人間観を全く逆転させて、ヨーロッパの伝統に反逆したのである。

フロイトの思想は、それまでの神の代わりに、リビドーという絶対者の代用品を設定することによってすべてを解こうとする悪しき一元論であり、神なき時代の代用思想にすぎなかった。それは、むしろ、ヨーロッパの伝統的精神とヨーロッパ的世界像の喪失の表現にすぎなかった。気違いじみた思想であり、一種の邪教なのだが、このようなフロイト流の人間解釈が堰を切った流れのように普及し、社会観や芸術観、神話解釈にまで広く影響を及ぼしたのが、二十世紀であった。二十世紀は、確かに何もかを失った時代であった。

一方、マルキシズムも、二十世紀を支配した有力な思想であった。実際、二十世紀も初めのころ、ちょうどフロイトの『精神分析学入門』が出版された一九一七年に、マルキシズムは、レーニンによるロシア革命の成功という形で、地上に実現した。それ以来、マルキシズムは、有力な社会思想として、ロシアばかりでなく、ヨーロッパ、日本、ア

アジアの知識層に深い影響を及ぼした。マルキシズムは、人間の営む社会における宗教、文化、思想、制度、政治など、いわゆる上部構造は、社会の下部構造つまり生産関係に規定されると考えた。人間の営む社会は最終的には生産力によって動かされ、歴史は、その生産力と生産関係の矛盾、つまり、生産力をもつ階級と生産手段を独占する階級との闘争によって動いていくとしたのである。

マルキシズムは、歴史や社会の複雑な事象をすべて生産力によって解き、複雑な人間をすべて階級によって解くという単純な一元論をもっていたために、知識層をはじめ一般大衆にも強力な呪縛力をもった。それは、神という絶対者の代わりに、生産力という絶対者の代用品を設定し、神の国という理想世界の代わりに、共産社会という地上の楽園を設定していたために、神なき時代の疑似宗教として、二十世紀の有力な思潮を形作り、多くの学問分野へ浸透していった。フロイディズムにしても、マルキシズムにしても、単純な一元論はいかわしいものを含んでいるものだが、これらは、どれも、ヨロツバの伝統的世界像の崩壊の表現であった。

他方、十九世紀以来進展してきた自然科学を背景にして、二十世紀になって主にイギリスで展開されてきた科学哲学は、ラッセルに代表されるように、感覚的実在と形式論理という科学的真理に基礎を置く科学主義の立場をとった。それは、感覚的実在と形式論理を尺度にして、今までの宗教的形而上学的哲学を不合理なものとして排除し破壊した。それは、非合理に満ちた人間存在の生きた現実や生の事実を捨象し、すべてを科学的真理に還元していった。

この哲学は、抽象化された無矛盾の世界にのみ閉じ籠ろうとするから、それを超えた人間精神の非合理なものを理解することができなかった。現実の自然科学そのものは、すでに二十世紀の初頭から、相対的なものへ、確率的なものへ、不確定なものへ、相補的なものへ、流動的なものへと、パラダイムの大きな転換が行なわれていた。そして、それが二十世紀の新しい自然像や宇宙像を切り開いてきていたのだが、科学主義は相変わらず十九世紀的概念にとどまった。自然科学そのものは多くの限界をもち、その限界を自覚しているために、絶えず自然の神秘と非合理にぶつかり、それを取り込もうとして、絶えず自らのパラダイムを変え発展していった。それにもかかわらず、一部の頑固な科学主義は相変わらず形式主義にとどまったのである。

二十世紀の思想の中で一部の無視できない潮流をつくった科学主義は、古典的な科学の神話に依拠し、形式論理の枠内にとどまって、過去の形而上学的構築物を破壊し、そ

のことに存在意義を見出した。それは、科学への信仰のもと、形式主義と機械主義が支配し、生命力が失われていった現代という時代の思想的反映であった。二十世紀の科学主義も、有機的な世界像を喪失し、精神の砂漠に迷い出た時代の思想にすぎなかった。

デュロイに代表されるように、イギリス経験論の流れを汲んで、二十世紀のアメリカで完成されたプラグマティズムも、真理の基準を有用性に置き、日常の生活に役に立つものを価値あるものとして、実用性を超越した旧来の形而上学的諸概念を批判した。価値は、人間が環境に働きかけて得られる経験から創造されるべきものであり、その手段として真理や知識も使われるべきであると考えた。それは、言語にしても、概念にしても、知識一般を経験の道具と考える道具主義の立場に立ち、真理をどこまでも手段価値と捉えた。そこには、知識や科学を自然支配の道具と考える進歩主義的思想があり、二十世紀のアメリカの民主主義的・産業主義的発展の思想的な反映が見られた。従って、それは、進歩を阻害する伝統的な制度や枠組みを極度に憎悪した。だが、そのような仕方、二十世紀人は、また、統一ある有機的な世界像を見失っていったのである。進歩主義という未来信仰に頼らざるをえなくなったのは、そのためである。

十九世紀のキェルケゴールやニーチェに根差し、第一次大戦後流行した実存主義も、大戦後のヨーロッパの精神状況を反映して、ヨーロッパの伝統的世界観の破壊を表現した。暗い時代には、暗い思想が流行する。第一次大戦によって徹底的に破壊され、旧来の伝統的世界が崩壊したヨーロッパは、人間存在の限界状況を露呈した。そのため、実存主義は、外部の有機的世界を失い基盤を喪失した人間存在そのものを問題にした。根拠を見失い、無の不安にさらされ、裸になった人間存在を捉えようとしたのである。ここでは、もはや、十九世紀以来の体系的主体性の形而上学は不可能になった。それは、科学技術によって支配され、機械的世界に置かれた現代の人間の孤独の表現であり、それ自身、伝統的世界像の喪失の表現であった。

十九世紀末以来、二十世紀の哲学は、ある意味で、ヨーロッパの伝統的世界観の破壊の連続であった。なるほど、二十世紀の思想も、伝統的有機的体系を破壊することによって、新しい世界像を構築しようと努めてはきた。しかし、次々と生み出されてくる新しい世界観も、また、次に登場してくる新しい思想によって破壊されてもいった。一九六〇年代に主にフランスを中心に流行した構造主義の思想潮流も、それまでのマルクス主義や実存主義の世界観を切り崩すとともに、ヨーロッパ近代の合理主義的世界像を根底から覆した。特に、未開社会の研究から出発したレヴィ・ストロースは、人間生活を



囲む無意識の社会構造を明らかにすることによって、それまで支配的であったヒューマニズムや歴史主義や実証主義に鋭い批判を浴びせた。だが、次に続くポスト構造主義の流れの中では、この構造主義にあったシステム思考が破壊され、構造主義にはまだあったヨーロッパ的思考の残滓が破壊されていったのである。

十九世紀末以来、ヨーロッパの伝統的世界観とその体系は破壊され続けてきた。破壊したものを、また、次に続く思想は破壊し、二十世紀は、ある意味で、思想の破壊の歴史だったようにもみえる。何ひとつ永続する思想とてなかった。かくて、二十世紀末の世紀末には、ただ、あらゆる思想的構築物が破壊されたあとの精神の廃墟が残っただけであった。

#### 過剰という名の貧困

二十世紀も、哲学は貧困だったわけではない。それどころか、おびただしい数の思想が大量生産され、そして大量消費されていった。思想も、大量生産と大量消費という二十世紀の経済構造と無縁ではなかったのである。二十世紀は、有機的世界が散乱したために、世界に支えられない別々の思想が過剰に生産され消費されていった時代であった。

諸思想を解釈し解説し翻訳することを専らとする思想研究の専門家が大量に出現したのも、そのような構造においてであった。専門家は、それぞれ専門とする思想家の思想を、知的大衆にのみこみやすいように解説し、それを知的大衆は使い捨てていった。そのため、膨大な数の思想が次々と流行し、そして、砂漠に水をまくように消滅していった。二十世紀が目まぐるしい思想の変化をみせ、右往左往したのも、そのためであった。二十世紀の知的大衆は、まるで交通信号に反応するかのように、その時代の流行思想に飛び乗り、そして飛び移っていった。知的大衆にとって、思想は、カセットを回しているようなものにすぎず、その時代その時代の流行の思想を頭に載いていけばよかったのである。マルキシズムにしても、フロイダイズムにしても、実存主義にしても、構造主義にしても、その他のような思想にしても、そのようにして消費され、そして終焉していった。

哲学は次から次へと豊富に生み出されてはきたのだが、それを包み込む有機的世界がなかった。というより、人間そのものを包み込む有機的世界が崩壊した時代が、二十世紀であった。第一次大戦や第二次大戦によってもたらされた廃墟のように、持続ある思考を護る世界が散乱していた。そのため、この散乱の構造は、持続ある思考そのものの

中にも住み込んで、思想の体系化を不可能にした。その代わり、人間を取り囲んだものは機械仕掛けのシステムであった。二十世紀の思想は、ちよつどその機械仕掛けのシステムの部品交換のように、目まぐるしく取り換えられていったのである。

このように、おびただしい数の思想が生み出されては消えていく時代の中で、二十世紀人の価値観はかえって混乱し、不安な精神状況を露呈した。多くの価値観が次々と登場してはきたが、それらを統一する中心はなく、ただ次々と消え去るだけであった。そのため、二十世紀人の精神は逆に混乱し、崇高な価値を見失ってしまった。なるほど、二十世紀の前半も後半も、ナチズムやコミニズムやナショナリズム、その他様々なイデオロギーが登場し、この二十世紀人の不安を隠蔽しようとした。だが、それらも、時代の激しい変化の中で現われては消え失せ、何一つ持続しなかった。二十世紀人は、思想においても過剰という名の貧困の世界を生きてきたのである。

確かに、このように数多くの思想が現われては消えていく中で、人間尊重を主張するヒューマニズムの価値観は、深く難解な哲学とは違って、大衆に受け入れられやすい思想内容と、分かりやすく単純なスローガンをもっていた。それは、誰が唱導したというでもなく、二十世紀人がことあることに叫んできた価値観であった。

もつとも、二十世紀は、人間性を極度に無視してきた時代でもあり、大量の人間を殺害し、使い捨て、操作してきた時代でもあった。人間は機械化され、画一化され、平均化され、個性を剥奪され、人間そのものが大量消費されてきた。人間が人間を超えるものを忘却した時、人間性さえ破壊される。二十世紀がかえってヒューマニズムの幻滅の時代となり、現実によつて絶えず裏切られてきたのも、当然のことであった。人間は、人間を超えるものとの連関の中で、はじめて人間でありうる。

二十世紀のヒューマニズムは西洋近代以来の人間中心主義の末裔であるが、人間中心主義は人間を破壊し続けるであろう。人々がこぞつて人類の将来を問題にし、人類の存続を叫ぶ時、すでに人間性は危機に瀕している。人間を超えるものを忘却し、人間が人類という価値のみを叫ぶ時、人間はすでに抽象化された空虚な概念の中に吸収されてしまっている。個々の人間は、むしろ、無視され、ないがしろにされている。人々が共通して人類の存続を叫び、そのために地球を守ろうとまで思い上がった時代は、人類が病気になる時代だと言わねばならない。

二十世紀の時代精神は、時を追うごとに、加速度的に頹落し衰弱してきた。思想や知識や情報の量は膨大化した、そのために、かえって統一ある世界像が見失われた。二

十世紀は、物質が粒子化し、人間も粒子化し、世界像も粒子化して散乱していった。二十世紀は、散乱した知識を堆積してきただけで、それらを統一ある理念に集約する思想体系を、必ずしも生み出しはしなかった。たとえ生み出しても、それは時代の精神とはなりえなかった。構築的体系が無力化したのは、二十世紀という世界の崩壊の時代の表現だったのである。

すでに、十九世紀末、神の死を宣告したニーチェは、来たるべき時代が、生命力を失い、俗物が跋扈し、末期の人間がはびこるニヒリズムの時代になるであろうと予言していた。そして、進歩主義の偽善を剔抉し、あらゆる価値観を解体した。二度にもわたる世界大戦を経験し、統一ある世界像を見失った二十世紀は、このニーチェの予言をそのまま実現したのである。

#### 芸術の実験化

二十世紀は、また、芸術においても、世界像の喪失という現代的精神状況を表現した。絵画、音楽、建築、文学、詩、演劇など、芸術は、一般に、自己と対象を包む世界を表現し、写し取るものであった。その意味では、二十世紀の芸術も、二十世紀の世界を表現し、写し取った。二十世紀は、科学技術によって支配された機械仕掛けの世界をつくりあげたが、芸術家もそのような世界に生きたから、芸術もこの機械仕掛けの世界を写した。自然科学は物質を細分化し、技術は社会を断片化し、それを再組織化した。世界は散乱し、機械化した。芸術も、また、そのような世界を表現したのである。そのため、二十世紀の先端的芸術では、そこに描かれる対象は、分解され、断片化され、そして再構築され、大幅にデフォルメされていた。二十世紀の芸術が人工的・技術的性格を帯び、実験的なものとなったのはそのことによる。

二十世紀の芸術は、多種多様なスタイルを作り出そうと試みてきた。素材から形式に至るまで、あらゆることが試みられた。二十世紀の芸術は、十九世紀以来の流れを受けて、型の喪失という特徴をもっているとみられているが、それは必ずしも正確ではない。思想と同じく、型やスタイルは、ある意味で過剰に生み出され実験されてきたのである。ただ、次々と間断なく生み出されてくる新型車のように、絶えず新しい型が生み出され、それがまた破壊され続けてもきた。そのことによって、芸術は、二十世紀独自の型を作れなくなったのである。

現に、第一次大戦までは、十九世紀末以来の流れを汲んで、芸術は伝統的形式に対す

る反逆に終始した。また、第一次大戦から第二次大戦の戦間期には、社会改造の実験が行なわれたのに照応して、芸術においても、あらゆる分野で、あらゆる表現形式の実験が試みられた。そして、第二次大戦後の芸術では、これら戦間期に行なわれた様々の実験が忘却され、無定形化していった。このような二十世紀の芸術の流れの中で、多様なスタイルが作り出されては破壊されていったのである。

そのため、二十世紀の芸術には、自己と対象を超え包む世界が見失われてしまった。現代芸術と言われる先端的芸術に、精神の浄化、カタルシスというものが欠如していたのはそのためである。それは、第一次大戦や第二次大戦で破壊された世界を映すように、精神の破壊と散乱の世界を表現していたにすぎなかったのである。

#### 絵画・音楽・建築

例えば、二十世紀初頭登場してきたキュビズムやフォービズムは、対象を分解したり極端にデフォルメして、十九世紀にはまだ残っていた再現前化という表現基調を崩壊させた。現に、キュビズム時代のピカソは、対象を多視角から見、これを要素に分解し、それを二次元に並列するという実験を繰り返した。なるほど、対象の要素への分解の予兆は、十九世紀末の印象派から始まってはいる。しかし、印象派には、まだ、ものの本質と生命力を捉えようとする強烈な意志があったのに対して、キュビズムでは、本質を捉えるのではなく、本質を破壊することに情熱が傾けられ、従来の形式が完全放棄された。それは徹底した対象の破壊であり、型の破壊であり、第一次大戦でのヨーロッパ世界の崩壊を予知するものでさえあった。

第一次大戦後に絶頂期を形づくったダダイズムやシュールレアリズムも、キュビズムやフォービズムの流れを受けて、第一次大戦後の世界の崩壊を表現した。捨てられたガラクタを集めて作品を作ったりしたダダイズムは、その時代の不安な精神状況を反映し、意味をもった実在という信仰を破壊して、伝統的価値観を否定した。このダダイズムに続いて起きてきたシュールレアリズムは、ダリに代表されるように、フロイトの影響のもと、好んで無意識や夢の世界を表現し、現実世界を超えようとした。だが、ここでも、描かれる対象は流動化し無定形化するとともに、理論が先行し、表現はその実験と化していった。この点では、不調和な色彩と大胆な形象の歪曲によって、現代世界の不安を表現しようとした表現主義も、同じような特徴をもっていた。

また、抽象主義も、対象の分解と再構成、型の破壊と無定形化という点で、共通した

流れの中にあつた。確かに、モンドリアンやパウル・クレーの作品には、目に見えない事物の本質を目に見えるようにしようとする表現意欲が感じられる。しかし、それでもなお、それらは、自然から切り離され抽象化された二十世紀人の世界を表現するものであつた。逆に言えば、二十世紀人の世界そのものが一つの巨大な抽象と化したとも言えるのである。

二十世紀は、絵画においても、考えるあらゆる実験が行なわれた時代であつた。特にヨーロッパでは、二十世紀の前半に実験に実験が重ねられ、多くの試みがなされたために、第二次大戦後はかえつてそれらが消滅し、絵画芸術はますます混迷していったほどであつた。二十世紀の絵画芸術は、徹底的に対象を分解し、変形し、変容し、型を破壊して、世界像の喪失を表現した。それは、第一次大戦や第二次大戦で表現された世界の崩壊、人間と対象の崩壊、そして、価値体系の崩壊を反映するものであつた。

同様のことは、二十世紀の音楽についても言える。音楽においても大胆な実験が試みられた。一九二〇年代、シェーンベルクによって開拓された十二音技法による無調音楽は、均衡の取れた形式の中で世界と世界を超えるものを表現した古典主義音楽に終止符を打つとともに、その束縛から離脱した。これも、世界像の喪失と対象の解体という意味で、二十世紀の精神的散乱状況を表現するものであつた。なるほど、古典形式の崩壊は、すでに十九世紀から始まっている。主観性の表現を重んじたロマン主義から、感覚の対象としての要素を重んじた印象主義音楽に至る過程で、古典形式は放棄されてきたのだが、二十世紀の無調音楽はその極限状況であつた。同じ傾向は、世界を個人の内面に吸収しようとした表現主義音楽にも見られた。ここでも、あらゆる束縛から脱して、自己の感覚像を純粋化することが試みられた。音楽も、また、世界像の無定形化と対象の解体という二十世紀の精神世界を表現したのである。

ル・コルビュジェやグロピウスなどによって切り開かれた近代建築様式も、産業社会化を反映して、伝統の様式からの離脱を宣言した。それは、産業主義の発展によって形成された大都市での集合生活と機械文明を反映し、これを建築と一体化させた。それは、機械時代の美学を表明し、徹底的な機能主義と合理主義を追究し、伝統様式を一掃して、技術時代に適応した表現形式を見出した。だが、この機能性と合理性の観点からのみ造られた近代建築は、それ自身機械的組織化の時代の表現であり、そこには、建築が集約して表現すべきコスモロジーが欠けていた。鉄骨とコンクリートによって造り上げられた二十世紀の高層建築は、なお断片の集積にすぎず、世界像の喪失という二十世紀の精

神状況を表現するものにすぎなかった。だが、そのような機械時代に適応した建築様式が、ヨーロッパからヨーロッパ外の世界へと急速に拡散し、地球上の多くの大都市を形成していったのが、二十世紀だったのである。

なるほど、一九七〇年代以後、そのような機能性と合理性のみを追究した近代建築様式に対する抗議が、ポスト・モダニズムという形で現われてはきた。しかし、このポスト・モダニズムも、近代的様式や古典的様式や歴史的様式を引用し、混合させ、新しい方向を模索する試みにとどまっている。ポスト・モダニズムも、まだ様式と言えるには程遠く、多くの様式の混合・混在という点で、むしろ、現代の混迷と精神的散乱状況を表現するものにすぎないように思われる。

#### 文学・詩・演劇

文学においても、二十世紀は、世界像の喪失と精神の散乱、対象の解体という時代精神を表現した。確かに、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、すでにチェーホフやリルケなどが表現していたように、文学や詩は、世界の急激な変革の時代を反映して、崩れゆく古い価値観と、そこでの孤独感を表現していた。だが、そのような世界の解体と、世界によって支えられる人間と対象の解体を、最も深刻な形で文学や詩が表現し出したのは、第一次大戦の衝撃を経験してからであった。ブルーストやカフカやジョイスの作品に表現されたように、そこに描かれる世界は、論理的脈絡を失い因果関係を失った世界であった。そのため、そこに描かれる人間は、統一性を失い、その存在も無意味と化していた。秩序ある世界が崩壊し、あらゆる確信が崩れ去った世界が露呈している。そのような空虚な世界に投げ出された存在については、ハイデッガーの哲学やシェーンベルクの音楽がすでに表現していたが、文学や詩も、また、世界を喪失した存在を表現したのである。深刻な問題ではあった。

そのような精神状況は、第二次大戦後の文学や演劇にも引き継がれた。カミュの作品が描いたように、人間は、すでに世界を喪失し、人生の不条理に耐える存在でしかなかった。イヨネスコやベケットの不条理劇でも、一切が崩壊しつつある世界と、そこでの人間解体、世界の無意味さが表現された。なるほど、二十世紀のすぐれた文学者や詩人や劇作家は皆真摯であり、どれも、崩壊した世界の中で彷徨する人間を描きながら、それを超える世界を求めようとはしていたのだが、しかし、人間を超える明確な世界が見出されたわけではない。その点から言っても、人間と自然を包む壮大な世界の中で描き

上げられた古典文学の世界からみた場合、二十世紀の文学は矮小化せざるをえなかった。詩の世界でも、言語を可能な限り事物から引き離し、言語の別の連関がどこまで可能かという実験が盛んに行なわれた。そのため、ここでは、言葉の無連関な結合によって、連関性の失われた世界が表現された。現代詩のもとでは、ちょうどキュービズム絵画と同様、対象は破壊され、しかも、破壊されたことへの嘆きの感情はもはやない。本来の詩空間では、ある永遠なるものが詩人を通して語り、天地が詩人を通して表現することによって、その作品の中に世界が写し出されていた。ところが、現代詩では、そのような永遠なもの、人間と事物を超える世界が破壊されてしまっていた。言葉と言葉の連関性の破壊によって、ここでも、人間と対象を超える大きな世界が瓦解してしまっていたのである。同様のことは哲学や科学でも表現されたが、芸術も、同じような世界の崩壊現象を映し出したのである。

なるほど、二十世紀のヨーロッパの世界では、文学でも、絵画でも、音楽でも、怒濤のように押し寄せてきたヨーロッパの形式や手法と、伝統的な形式や手法の融合がなされ、伝統に根差す情念や美観が表現された。その点では、ヨーロッパの世界では、伝統と近代の融合のもと、芸術においても新しい形式が獲得され、その中でまだ壊されていない世界が表現されたとと言える。哲学でも事情は同様であり、ヨーロッパの思想と伝統的な思想の融合がなされ、伝統に根差す思想や世界観が新しい形式を得て表現された。しかし、二十世紀の後半、特に世紀末には、ヨーロッパの世界でも、近代化の進展とともに、人間と自然を囲む世界はより流動化し、無定形化していった。そのため、二十世紀前半で生み出された新しい型も、次第に説得力を失い、混迷の度を深めていったと言わねばならない。

### 3 精神の散乱と永遠の忘却

#### 精神の散乱と実在感の喪失

世界像の喪失という精神状況は、今に始まったわけではない。ヨーロッパの産業革命と自由主義革命以来、それまで宗教的に統一されていた世界観が崩れ出し、その時以来、世界像の喪失という予兆はすでに見えていた。だが、それでも、宗教や哲学の観点からみれば、十九世紀前半までのヨーロッパは、まだ伝統的世界観の中にあり、世界は秩序と調和の中に把握されていた。

世界像の喪失と精神の散乱という精神状況が目に見えてあらわになってくるのは、一八四八年の二月革命あたりから以降、十九世紀後半とみてよいであろう。このころから、ヨーロッパの伝統的世界観は加速度的に崩れ去っていく。哲学が宗教的世界観から離反し、諸学問が哲学から独立して、自然科学も互いに分化し、そのため、人間と世界の統一的把握が困難になってくる。しかも、この世界像の喪失と精神の散乱現象が、ヨーロッパの産業技術文明と世界政策の波に乗って、ヨーロッパ外の世界に侵入し、ヨーロッパ外の世界の伝統的世界観を切り崩していった。

こうして、二十世紀は、ヨーロッパも非ヨーロッパも含めて、世界的に混沌状態に陥っていった。二十世紀が経験した二度の大戦は、この地球規模で生じた世界像の喪失と精神の散乱を象徴するものであった。人間中心主義を原理とした近代がいかに人間性の喪失を結果するか、神なき時代がいかに人間の悲惨さをもたらすかを、それらは証明した。二十世紀は、十九世紀以来の精神の散乱と魂の破壊の極限状況をあらわにした。精神のタガがはずれ、拠り所を失った人間が、どれほど不安な生き方をしなければならぬかを、二十世紀の歴史は教えたのである。

その意味では、二十世紀がプランクの量子論とアインシュタインの相対性理論で開幕したのも、象徴的であった。これ以後、物理学的世界像は確率論的・相対的なものとなり、すべては流動化し、それまでの安定した基盤は失われた。物理学は、物質を無限分割していった結果、確率論的・相対的世界に突入していかざるをえなかったのである。それと並行するかのようには、二十世紀は、社会も流動化し、統一像を見失っていった。二十世紀初頭の第一次大戦は、そのような統一像の破壊と精神の散乱を決定づけるものであった。

これを境にして、二十世紀は、すべてのものが相対化し、散乱する時代になっていった。おびただしい数の主義や思想が登場し、しかも、それが世界中に拡散して、価値観は分裂し、無政府状態になっていった。そのため、二十世紀人の魂は連関のない雑多なもので満たされ、統一と秩序を失った。二十世紀人の魂は、中心を失い、持続を喪失し、錯乱状態のような様相を示した。二十世紀人の精神は散乱し、断片化し、分裂症的症状さえ見せたのである。

世界像が失われ精神が散乱する時、裸のままの存在が露呈して、一つの問いと化す。第一次大戦後、主に実存哲学の中で、この自明性を失った存在が問われたのはそのためである。存在が確固とした世界像あるいは時代精神に包まれていた時代には、存在は自



明であり、意味が与えられ、逆に存在の存在性は隠蔽されていた。ところが、世界が崩壊し、そのペールがはがされる時、存在は、もはや世界に守られていないために、その意味が失われる。第一次大戦や第二次大戦によって破壊し尽くされた廃墟は、この世界の喪失を象徴した。存在の意味が問われたのは、そのためである。たとえ、その後、その廃墟が瞬く間に復興され、巨大な建造物によって満たされた世界が構築されたとしても、それは、必ずしも、二十世紀という時代が露呈したニヒリズムの世界を克服することにはならなかった。

現に、この二十世紀に再構築された技術的世界の中で、二十世紀人は、まるで洞窟の中の囚人のように、映画やテレビの映像、この存在の影をまるで実在でもあるかのようには確信し、次から次へと洪水のように押し寄せてくる情報の中で、物事への素朴な驚きの感情を失っていった。目まぐるしい変化の中で、人々は次第に実在感を失っていったのである。二十世紀がつくりあげた機械仕掛けの世界の中で、存在はむしろ溶解していった。二十世紀は、現実には、存在そのものを問い、その真理を問うよりも、存在から逃避していったのである。

#### 言葉の頹落と持続の喪失

二十世紀は、言葉も溶解し、崩壊していった。言葉は存在を包む場である。精神は言葉の場に宿り、この言葉の場に住み込んで、人間ははじめて人間である。ところが、二十世紀は、言葉が破壊され、そのため存在は溶解し、人間の魂も断片化していった。

二十世紀は、ラジオやテレビや新聞など、マス・メディアが発達した時代であったが、そこで語られ書かれる言葉は、大量に生産され大量に消費されていく消費物資にすぎなかった。そのため、言葉は、現われ出てきたかと思うとすぐに消え去ってしまう。その分、言葉は断片化して、二十世紀の世界は断片語の氾濫の世界となった。

ラジオ、テレビ、新聞を通じて、言葉は間断なく生産され、おびただしい量の宣伝広告の文句がひっきりなしに飛び交い、政治宣伝のスローガンが次から次へと叫ばれ続けた。ナチズムやコミュニズムのスローガン、コマースリズムのキャッチフレーズなど、断片化した言語は人々を惹きつけ、人々を動かした。だが、それらも、また、消費される言葉、叫びにすぎず、持続するものではなかった。そのために、かえって、その空白を埋め合わせるように、また、断片語が大量生産され、断片語が氾濫したのである。言葉は単なる音声と化し、大量に生産され大量に消費されていくうちに、その意味は次第

に希薄化していった。そのような希薄化した言葉の氾濫によって、言葉の重みが略奪されていったのが、二十世紀であった。二十世紀は、照明器具を発明することによって闇を破壊したと同時に、ラジオやテレビや拡声器を発明することによって沈黙を破壊し、騒音によって埋め合わせようとした時代だったのである。

二十世紀ほど、目まぐるしい変化の中で人々が生きてきた時代もなかったであろう。おびただしい数の事件が次々と起き、人々は、それらをラジオやテレビの報道によって知り、かつすぐに忘れ、落ち着きのない生活を送った。そのうち、新しい事件が次々と起きてこなければ、人々は退屈するようにさえなってきたのである。打ち続く激しい変動の中で、事柄の持続する間隔はますます短くなり、時間は加速度的に過ぎ去っていった。

なるほど、変化は人生の常ではあるが、二十世紀人の人生を取り巻く環境は、激変と言うにふさわしいほど恐るべき変化であった。生活をより豊かにする技術は加速度的に進歩し、そのために、社会は絶えず激しい変化を繰り返した。そのような激しい変化に追い立てられるようにして、熟考する余裕もなく、二十世紀人は、過去を振り捨て、現在を滑り落ち、未来へと突進して、百年を駆け抜けてきた。「ああすべきだ」「こうすべきだ」と終始掛け声をかけながら、絶えず未来を先食いして、忙しく安らぎのない生活を送ってきた。時間が直線的にしか前進しなくなったのである。

そのため、何事も持続することがなく、長続きしなくなった。この百年というものの、種々雑多な思想や行動様式が恐ろしいほどの速度で波及していったが、また恐ろしい速度ですたれてもいった。次々と新しい思想や行動様式が現われては消える中で、すべてのものが利那的になり、持続を失った。ベストセラーも次々と登場してきたが、また、すぐに忘れ去られ、次のものに取って代わられた。情報の大量生産と大量消費の中で、すべてが時間的にも空間的にも散乱してしまっただけである。二十世紀が、果たして、歴史に残るものをどの程度残せるかは定かではない。歴史に残るものを育む世界が失われ、精神が散乱してしまっただけである。歴史はいつの時代も無常ではあるが、これほど時代が目まぐるしく変化していった時代もなかったであろう。

二十世紀の百年、第一次大戦の前と後、第二次大戦の前と後、冷戦終結の前と後の数十年をとっても、それぞれの時代の思潮にほとんど共通性というものが無い。右から左へ、左から右へと、価値観は一変した。目まぐるしい変化の中で人も変わり、それどころか、驚くべきことに、同一人物が一変してしまっただけでなく、平和から戦争へ、戦争から平和

へ、それがまた平和から戦争へ、戦争から平和へと変化し、それに応じて、人々の意識も絶えず変化していった。二十世紀人は、一種の精神分裂病にかかったかのようであった。狂気の世紀、それが二十世紀ではなかったか。

持続が失われていく世界で、二十世紀の人間は、その都度その都度押し寄せてくる情報の洪水の中を利根的に生きてきた。目まぐるしい変化の中で、次々に報道される事件も速やかに忘れ去り、次第に何事にも感動しなくなっていた。心に留められる事柄も少なく、善美なものへの感覚も磨滅し、記憶が失われ、ますます利根的感覺の中で生きるようになってきたのが、二十世紀人であった。

#### 永遠の忘却

永遠というものが見失われたのである。永遠根源的なものへの畏敬の念が忘却されたのである。そして、散乱の世界に埋没してしまったのである。

十九世紀末のヨーロッパでニーチェが宣告した神の死は、二十世紀になって、おびただしい数の犠牲者を出した第一次大戦の惨状となって露呈した。その惨状を前にして、ヨーロッパ人の魂のうちでも、神によって統一されていたヨーロッパ的世界観の体系が崩れ去った。この時から、二十世紀は、神の死後を生きねばならなかった。第二次大戦の惨状は、いわば、このヨーロッパにおける神の死のヨーロッパの世界への拡散であった。それ以来、ヨーロッパの世界でも、天地の神々は次第に背後に隠れ、人々の魂の中でも、善美なものへの憧憬の念が希薄化していった。

神々がこれほど無力になった時代もなかったであろう。神々に代わって、これほど人間が叫ばれた時代もなかったであろう。しかも、大規模な戦争や革命によって、人間がこれほど大量に殺されていった時代もなかったであろう。永遠なものへの畏敬の念を失ったために、人間の精神が頹落し、魂が衰弱していった時代、それが二十世紀であった。

二十世紀末に問題になった環境破壊も、その源泉を尋ねれば、二十世紀人の魂の混濁と永遠の喪失に至りつく。日や月、雨や風、山や水、大地に宿る神々も力を失ったかのように見える。その代わり、人間の限らない欲望が氾濫し、あらゆるものを駆逐していったのである。夜になってはじめて星のきらめきが見えるように、この神なき砂漠を前にして、はじめて、人間が失ったものがいかに大きなものであったかが見えてくるように思われる。

なるほど、この二十世紀の不安を前にして、多くの新しい宗教が登場し、神々は復活

したかにみえる。人生を支えていた精神世界が散乱してしまったために、人生はもはや自明なものではなくなり、人生そのものが不安に差しかけられた。その不安の解消を約束して、新しい宗教は続々と生まれてきた。

二十世紀は、故郷を離脱した人々が大都市に充滿し、波に浮かぶ浮草のような大衆社会を形成した。そのため、人々は孤独になり、寄る辺のない不安な生き方をしなければならなくなった。なるほど、この断片化した大衆社会は、多くの自由を大衆に与えはしたのだが、その自由は不安と隣り合わせであった。かくて、この自由の重荷を預け、不安から逃れるために、多くの人々が新しい宗教に走った。人間は、安定というものを得られない動物である。

二十世紀は、人々に豊かさを約束し、貧困からの脱却を保証した時代であった。だが、豊かさを実現し貧困から脱却したとたん、人々は目標喪失に陥り、豊かさの貧困に陥ってしまった。豊かさによっても、不安は拭えなかったのである。豊かな社会を実現してからも新しい宗教が絶えることなく生み出されてきたのは、そのためである。

だが、それゆえにこそ、また、これら新しい宗教には、同時に、現代社会の不安定な要素が集約して現われてもいる。新しい宗教は断片化した大衆を糾合し、散乱したものを再び束ねて、巨大な組織になっていった。それは、断片化した大衆を糾合した企業、政党、労働組合など、現代的組織と変わらない社会的現象であった。そこには、何よりも、地縁的生活と密着した有機的世界が欠けていた。それ自身が大地から浮足立った機械的組織に変貌してしまったのである。

確かに、数多くの新しい宗教が登場し、二十世紀は、神の死どころか、神々のラッッシュのような様相を見せてはいる。しかし、これらの神々は、二十世紀の人々がそうであったように、孤独で散乱していた。多くの神々が一つのものへ帰一するような世界が、そこには失われていた。神々もまたバラバラのアトムと化し、根無し草ようになってしまったのである。群衆ばかりでなく、神々も孤独であった。新しい宗教も、散乱の時代を象徴する散乱の宗教だったのである。

これら新しい宗教も、神への回帰と人間性の回復を叫んではいる。だが、それも、すでに失われてしまったものへの叫びにすぎない。単なる叫びだけでは、回復されはしないであろう。たとえ回復されたとしても、それが有機的世界の中で生かされることはいずれであろう。もしも、それが、嘆きや痛み、罪の自覚がないままで、安手の救いや癒しを約束する宗教になってしまったなら、たちまちにして、欺瞞やまやかに満ちた邪教

になつてしまふであらう。人間はいつまでも夢見ていた動物ではあるが、悪魔はしばしばイエスの衣を着て登場し、幻想をまき散らしていく。それは、単に世界が失われ裡所が欠如したために起きた一つの散乱現象にすぎないのかもしれない。永遠なものはお見失われたままである。

二十世紀は、なお、深い嘆きの感情と痛みの感覚、大いなる悲しみのうちに包み込まれねばならない。



#### 日露戦争後の精神的空白化

一九〇〇年、二十世紀が始まった時、日本はまだ明治であった。この年、欧米諸国をはじめロシアや日本の中国進出に反対して起きた義和団の乱に対し、日本は、イギリス、アメリカ、ロシア、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリアとともに大陸に出兵し、これを鎮圧している。それ以来、ロシアは南下、すでに、満州、朝鮮を巡って、日本と対立していた。この満州、朝鮮を巡る日露両国の権益争いを契機に起きたのが、一九〇四年から五年にかけての日露戦争であった。

この戦争に日本が一応の勝利を収めたということは、二十世紀の世界史に無視できない意味をもった。それは、それまでおよそ四十年にわたる日本の西洋近代化の一応の成果であると同時に、アジア諸国の自立という二十世紀の世界史の大きな側面と深くつながっていた。

日露戦争は、日本の西洋主義的側面と反西洋主義的側面の両面の合流点であった。日本の明治近代化の底流には、西洋を受け入れて文明化を果たそうとする西洋主義的側面と、それによって西洋諸国に対抗しようとする反西洋主義的側面の相反する二重の側面があったが、両者の微妙な緊張は、日露戦争にも集約して現われた。日露戦争は、西洋化することによって西洋に対抗しようとした近代日本の一つの頂点だったのである。

日本は、明治維新以来、富国強兵・殖産興業を目標に、産業を育成し、近代軍を形成し、内閣制度や議会制度を導入し、四民平等策を取り、国民皆教育を実施し、急激な欧化政策を取ってきた。この面から言えば、近代日本の主流は西洋近代化の流れの中にあり、国家のほとんどの力がヨーロッパ近代文明の輸入に向けられてきた。だが、一方では、この急激な西洋近代化、文明開化に対して、日本の文化的な植民地化を排除し、日本の文化的同一性を守ろうとする伝統主義からの反発もあった。明治近代は、結局、この近代化と伝統の対立と葛藤の中で、両者の調和と融合をどのようにし、日本の存立を保つかという努力であった。しかも、明治近代は、伝統的精神の中に西洋近代を融合させ存立をはかることに、一応の成果をあげることができた。二十世紀初頭の日露戦争は、この両者の融合、調和によって成り立っていた明治近代化の最後の成果であり、完成であった。

しかし、完成はまた終焉でもある。一九〇五年、日露戦争の終わりとともに、それまでの明治の近代化の流れに伏在していた精神的空白化が顕在化する。人々は虚脱状態に

陥り、方向性を見失い、精神的支柱を失った。この主体性の喪失という精神状況は、文明開化の結果でもあり、近代化というものに内包する矛盾でもあった。

二十世紀初頭の日本に登場してきた自然主義文学は、日露戦争後の精神的支柱の喪失という精神状況を反映するものであった。それは、田山花袋の作品などに表わされたように、赤裸々な自己を見つめ、それを愚直に描写することによって、それまでの倫理的な精神に対する懐疑を表明した。文学における自然主義は、ヨーロッパではむしろ十九世紀末に属することであるが、日本では、二十世紀初頭に独特の仕方を受け入れられ、それが、日本の明治近代に内包されていた伝統的因習や道徳、形式的な建前や名分への批判として現われてきたのである。ヨーロッパでも、二十世紀の初頭には、伝統的な芸術観への懐疑を表明する文学が登場し、ヨーロッパの伝統的な世界像の崩壊を表現したが、日本では、それが自然主義文学という形で現われた。

だが、この無遠慮な自然主義文学は、人間の衝動や本能をありのままに描くという仕方、むしろ、人間を包み込むそれ以上の世界の喪失と、人間を成り立たせているより深い基盤の喪失を表現した。そこには、文学を包んで、それを成り立たせているより大きな思想や世界がなかった。この文学が、やがて、こじんまりとしたいかにも日本的な私小説の袋小路へと迷い込んでしまったのは、そのためである。

夏目漱石や森鴎外は、このような日露戦争後の精神的空白から出てきた日本文学の新しい傾向を批判して、そこに、文明開化つまり西洋近代化の虚妄を見るときに、近代一般の虚妄を見て取った。

日露戦争が終結した一九〇五年から書かれた『我輩は猫である』の中でも、不愉快をかこっていた漱石は、戦争に熱狂している社会に対し傍観者の態度を取るとともに、無理をして近代化してきた日本をことあるごとに批判した。富国強兵のスローガンのもと、産業主義を推し進め、近代国家を形成してきたために、世間には成金の俗物がはびこり、育ちの悪い自然主義文学が蔓延して、人間の品性は極度に低劣化したとみる。しかも、漱石は、『それから』の中でも語っているように、そのような精神の低落を二十世紀の墮落と捉えた。そして、それは、近代化によって膨張してきた欲求が伝統的精神を崩壊させたことから起き、結局、それは、ヨーロッパ近代の墮落が押し寄せてきたことに起因するとみた。漱石は、自己本位、つまり主体性を失って西洋近代に追随する近代日本の風潮を批判するとともに、次から次へと輸入されてくる西洋近代文化の浅薄さの自覚から、近代一般の浅薄さを見て取ったのである。



苦渋に満ちた鴎外も、また、自然主義文学に現われたような日露戦争後の精神的空白状況に対する批判を通して、近代一般への懐疑を表明した。「礼儀小言」でも語っているように、鴎外は、日本が文明開化を推し進めてきた結果、日常生活にも、精神生活にも、形式というものが失われてきたことを見る。そこから、日本近代の皮相さと虚妄を見て取った。鴎外は、儒教的伝統の立場から、近代化に伴う精神の空白化を、二十世紀初めの日本の軽薄な風潮の中に見たのである。

#### 大正時代の精神的もろさ

だが、漱石や鴎外がその皮相さを批判した日本の西洋近代化と文化の低落は、とどめることのできない時代の趨勢であった。大正時代に入ると、日本の近代化はより一層進展し、それに伴って、知識人群像の中にも、純西洋主義の知識人が主流を占めてくる。彼らは、明治の近代的制度によって育てられた世代であり、西洋近代教育の恩恵に浴した世代であった。だが、それゆえにこそ、彼らは、西洋を唯一の尺度として、それまでの日本の近代化の矛盾を指摘し、伝統的因習を残す明治の文明開化の成果を批判した。明治時代の日本の知識人は、たとえ西洋主義者であっても、明治以前に築き上げられた儒教をはじめ、伝統的精神に拠り所をもった知識人が多かった。だが、大正時代に入ると、知識人は、伝統精神を失い、主体性を失って、その精神的脆弱性を露呈したのである。

二十世紀初頭、ヨーロッパでも、ヨーロッパの伝統的価値観を拒否した一連の知識人群像が登場してきたが、日本では、それが西洋近代主義となって現われてきたのである。彼らは、極度に純粋化された西洋を精神的基盤とし、それを基準に、現実の日本を批判した。彼らがいち描いたヨーロッパ近代は、実際には、理想化された近代ヨーロッパにすぎず、近代ヨーロッパという幻想にすぎなかった。知識人というものは、特に幻想にとらわれる動物である。この近代ヨーロッパという幻想を、彼らは崇拜した。

大正教養派と言われた新しい世代は、多かれ少なかれ、このような精神的雰囲気の中から登場してきた。教養の基準を西洋近代の知識人達の書物において、日本の現実や人間のあり方に深い懐疑の眼を投じた芥川龍之介は、この新しい世代の代表であったが、これは結局自己破壊という結果に終わった。同様な精神的脆弱性は、白樺派のコスモポリタニズムや自由劇場運動や大正時代の自由主義者にも見られた。マルクス主義の立場に立って、近代日本の後進性を批判したプロレタリア文学も、西洋近代を唯一の模範と

して、日本の現実を批判した西洋主義には変わりはない。浮ついた時代だったのである。

明治末期から大正時代、二十世紀の初め約三十年は、明治以来の日本の近代化の皮相さが露呈し、精神的に混乱した時代であった。明治以来の日本は、ともかくも国を存立させていくために、急いで西洋近代の技術や制度、知識や思想を輸入し、急ごしらえの近代社会をつくらねばならなかった。生活から世界観にまで及ぶこの急激な西洋近代化は、日本の文化的伝統を破壊した。知識人が時代を追うことに伝統的基盤を失い、主体性を喪失していったのは、そのためである。それでいて、彼らの西洋近代文化に対する理解は必ずしも深いものではなく、彼らによって移植される文化は浅薄な借り物文化にすぎなかった。このような文化状況のもとでは、西洋近代文化の性急な摂取とその解説・普及のみが、知識人の主な役割になる。そのため、日本の知識人は、多くの場合、何事も西洋の知識だけで考え、主体的に考える能力を失った輸入業者と化した。従って、新しい西洋の思想は次々と流行しはしたが、また次々と忘れ去られてもいった。今も昔も変わらない近代日本のこのような空虚さが特に明確な形で現われたのが、二十世紀の初め明治末年から大正時代にかけてだったのである。

日本人の西洋近代文化の受け入れ方があまりにも性急で上面だけにすぎなかった上に、その受け入れた西洋近代文化そのものが、すでに、ヨーロッパにおいても、伝統的世界を破壊させるような性質のものであったために、明治以来の近代文化は、極めて浅薄なものになってしまった。だが、この浅薄な文化を、大方の日本人は苦痛とは受け取らず、むしろ喜んで受け入れていったのである。二十世紀初頭、明治末年から大正にかけての日本の精神的もろさと文化の低落はぬぐうべくもなかった。

現に、二十世紀初め、特に大正時代は、発展する産業主義の影響下、大都市社会が形成され、大衆社会化現象の見られた時代であった。特に、アメリカの大衆文化がどつと入ってきて、退廃的気分が蔓延し、この時代の文化は頹落の一途を辿った。ジャズやブルースが流行し、アメリカ映画がもてはやされ、外国の映画俳優や運動選手が人気を集め、世間では無気力と退廃が支配し、低俗文化が崇拜された。発達した科学技術のもと、大衆社会が形成され、アメリカの物質文明が怒濤のような勢いで輸入され、映画や音楽、スポーツなどが流行した時代だったのである。軽薄な時代ではあった。ラジオ放送も、一九二五年、アメリカよりも五年遅れただけで開始され、これを切っ掛けとして、日本も、マス・メディアが大衆を糾合していく本格的な大衆社会に突入していった。

大正時代は、また、デモクラシーの進展した時代でもあった。普通選挙運動が盛り上がりを見せ、その結果、一九二五年には普通選挙法が実施されている。この大正デモクラシー運動も、西洋近代の価値観を模範とし、それに少しでも早く追いつこうとする動きであった。

一九一七年のロシア革命が大正時代の知識人に与えた影響も甚大であった。これを切っ掛けにして、日本の社会主義運動はより一層進展し、プロレタリア文学も興隆した。この運動の中で、日本の後進性が盛んに批判されたために、知識人は、幻想動物の常として、日本の社会主義化はすぐ目前に来ているかのような幻想を懐いた。日本もまた、ヨーロッパと同様、革命ロシアがふりまくコミニズムの幻想に惑わされたのである。

二十世紀の世界は、アメリカニズムとコミニズムが支配した時代であった。二十世紀の日本も、この二十世紀の世界史の激流に否応なく洗われ、混迷を深めていった。多くの思想が輸入され、数多くの価値観が乱立し、社会が目まぐるしく変化する中、人々の精神は散乱し、次第に有機的な世界像を見失って、精神的脆弱性を露呈していった。この点では、二十世紀初めのヨーロッパの自壊現象と共通していた。しかも、この二十世紀初めの精神状況は、日本においても、二十世紀末にまで通ずる精神的空白化の原型を形づくったのである。

#### 昭和前期の危機

二十世紀初めの日本は、国内的には退廃的気分が蔓延する中、国際的には微妙な位置に立たされた時代でもあった。アメリカをはじめヨーロッパ諸国は、日露戦争後抬頭してきた日本を警戒し、日本の中国進出に対しても恐れを懐き、日本は次第にアメリカの仮想敵国になっていった。日本は、ワシントン会議やロンドン会議でも不利な立場に置かれ、欧米諸国と同じ行動を取りながら、同時に、欧米諸国から圧迫されるという明治以来の矛盾に面していた。一九三一年の満州事変や一九三七年の日華事変を足掛かりにした日本の大陸進出に対しても、これを警戒した欧米諸国は、日本に対して様々の圧力をかけてきた。

この対外危機を契機に、時代は大きく転換し、欧米中心主義への反発から、それまでの欧米崇拜の時代思潮が急激に退潮、日本的伝統への回帰の思潮が大きな流れとなって現われてきた。保田與重郎をはじめとする日本浪漫派の運動が一時期を画したのも、そのような伝統回帰の風潮を背景にしていた。彼らは、急激な西洋化の波に洗われた明治

以来の日本人が、主体性を失い、故郷を失い、抛り所を失ってしまったことを自覚し、自らの同一性を再び自国の伝統の中に見出そうとした。明治以来日本が受け入れてきた西洋近代文明は、それ自身、人間と自然の一体性を破壊するものであったために、結果として、日本人も精神の喪失に陥り、自己同一性を失ったという。大正末期から昭和初期にかけて流行したプロレタリア文学にしても、その後の日本主義文学にしても、どれも明治以来の近代化の末期現象にすぎず、明治以来の近代文化は退廃し没落しつつあるとみる。日本浪漫派の知識人達は、明治以後の近代文化を虚妄とみ、近代そのものを否定して、日本の古典古代に帰ろうとしたのである。

もともと、二十世紀の前半を振り返って見た場合、創造的なものが生み出されてこなかったわけではない。漱石や鴎外は、明治近代がもたらした精神の空白化への危機意識から、主体性と同一性を求めて独自の文学を創造していた。また、独自の哲学や倫理学を打ち立てた西田幾多郎や和辻哲郎は、それぞれ独自の仕方、西洋の論理を使つて日本や東洋の思想・文化の構造を明らかにした。彼らは、いずれも、伝統と近代の相剋の中から、両者をつことにすることによって、独自の近代文化を築き上げたと言える。

同じことは、芸術の分野でも見られる。横山大観、安田靉彦、梅原龍三郎、滝廉太郎、山田耕作などに見られるように、近代日本の芸術では、西洋風の手法を取り入れて伝統的表現を刷新したり、西洋風の表現の中に伝統的な情感を折り込んだりして、伝統と近代の融合がはかられ、新しい絵画や音楽の形式が作られた。この点では、日本の近代芸術は、二十世紀ヨーロッパの芸術の崩壊に必ずしも追随しはしなかった。

しかし、一九四〇年代を迎えた日本は、すでに重大な危機に瀕していた。日本の中国進出はアメリカの対日経済封鎖を招き、それを契機とした日本の仏印進駐は欧米との決定的な亀裂を引き起こし、ついに、アメリカの対日石油禁輸措置をはじめ、欧米諸国の強烈な圧迫を招いた。かくて、一九四一年、日本は、米英をはじめとする連合国との絶望的な戦いに突入、第二次大戦に巻き込まれていった。そして、この絶望的な戦いによって、日本は潰滅的な打撃を被ったのである。

なるほど、この戦いでは、アジアを植民地化していたイギリス、フランス、オランダも潰滅的打撃を受けたために、アジア・アフリカ諸国はヨーロッパ支配の軛から自立することができた。かくて、この戦いは、ヨーロッパ諸国による世界支配に終止符を打ち、二十世紀の大きな転換点を形成した。

とは言え、この戦争も、ヨーロッパ戦線同様、科学技術の進歩に伴って発達した大量

の殺戮兵器を使い、国民全員を動員した総力戦となったために、非戦闘員を含むおびただしい数の人々の犠牲を招いた。それは、未だかつてなかった悲惨な戦争だったと言わねばならない。それは、人間をはじめ物資や資金、あらゆる面での多大な犠牲と損害を要求する消耗戦であった。原爆や空襲によって多くの都市が被った人的、物的犠牲は、途方もない量にのぼった。それは人間の魂さえ破壊した。日本も、二十世紀の悲惨な運命に否応なく巻き込まれざるをえなかったのである。

もつとも、この悲惨な戦争も、単に好戦的な軍部だけが引き起こしたというわけのものでもない。すでに、ラジオや新聞などマス・メディアは十分発達し、このマス・メディアが危機をセンセーショナルに煽り立て、大衆を煽動し、しかも、その煽動に大衆は熱狂的に応えた。この大衆の支持と熱狂に支えられて、この戦いも遂行されたのである。その意味では、この戦いも、二十世紀の大衆国家の戦争であった。そこでは、絶えず単純なスローガンが叫ばれ、思想は単なる符牒と化し、宣伝手段化してしまった。次々と目まぐるしく量産される言葉は、センセーショナルに叫ばれる分、内容はますます空虚になり、沈黙は失われ、言葉は頹落していった。この戦いは、また、文化的な敗北でもあった。

#### 経済発展の光と影

現に、第二次大戦の敗戦で、日本は、魂の脱け殻のようになり、虚脱状態に陥った。そして、その魂の空白状態を急いで埋め合わせるかのように、日本は経済再建に邁進し、ひたすら物質的豊かさを求めてきた。この豊かな生活の模範を提供したのが再びアメリカであり、アメリカ的生活様式は日本人の憧れの的になった。再びどっと輸入されてきたアメリカ映画やアメリカの文物を通して、文化的生活を学んだ日本人は、豊かなアメリカのイメージをモデルに、廃墟と飢餓の中から、差し当たり経済復興に着手したのである。この経済の復興は意外と速く実現し、第二次大戦後十年、一九五五年には、すでに戦前の生産力を上回るに至った。大戦後の米ソの冷戦構造の中で、日本は、アメリカを中心とした自由主義圏に属し、防衛や国際的役割はすべてアメリカに任せ、経済復興にのみ専念することができたからである。

しかし、豊かさへの憧れは、この経済復興の段階のみではとどまらず、さらに、次の高度経済成長へと受け継がれていった。一九六〇年代、日本は、復興された経済を足場にして、鉄鋼、石油を中心とした重化学工業を発展させ、さらに家庭電化製品を大量生

産し、一般家庭に普及させた。自動車も急速に出回り、エネルギー革命も手伝って、日本の生活革命が始まった。電化製品を使って家事労働を軽減し、出来た余暇を利用して、自動車でピクニックや買い物に出掛けるといったアメリカ的生活様式が定着し出したのである。国民所得も増大して、日本人は、意外と速く、憧れの的であった豊かなアメリカをわが物にした。一九六四年に開業した東海道新幹線や同年開催された東京オリンピックは、日本の経済的成功を象徴するものであった。人口も大都市へどつと集中し、二十世紀初めの日本の大都市を凌ぐ巨大都市が各地に誕生した。取憲かれた時代であった。

だが、豊かさの追求は、この高度経済成長の実現でもやむことなく、一九七〇年代も継続した。確かに、二度の石油危機によって高度成長は終わりを告げた。しかし、日本は、この二度の石油危機を、省エネルギー、省力、省資源技術の開発によって切り抜け、逆に、鉄鋼、自動車、機械、電気、半導体、ロボットなどの分野でアメリカを凌駕し出し、経済大国化の道をひたすら走ったのである。一九八〇年代も、日本は、この勢いを借りて、高度情報化社会の実現に乗り出し、経済はより国際化し、一九八五年には、日米経済力が逆転するまでになった。日本は、敗戦から四十年、アメリカに追いつき追い越すことを目標に、ひたすら経済発展に邁進し、その結果、豊かな社会の夢を実現したのである。

しかし、光あれば影はある。この目覚ましい経済発展にも、その代償がなかったわけではない。日本は、二十世紀初めに次いで、再びアメリカニズムの洗礼を受け、アメリカ文明の獲得のために一途に突き進んできたのだが、その結果は、アメリカと同じ物質万能のビジネス文明を実現したにすぎなかった。確かに、科学技術は発達し、経済は長足の発展を遂げ、人々の生活はより便利になりはした。しかし、それを実現するためにも、どれほど多くの生活の犠牲があったことか。男達は仕事中毒になり、家庭は省みられず、子供の躰はなおざりにされた。また、大都市への人口集中のため、都市は超過密になり、住宅はますます狭くなり、地価は高騰し、住環境は悪化の一途を辿った。しかも、その分、農山村地帯では人口が過度に減少し、過疎化して、村の共同体の良き慣習は壊れていった。

さらに、一九七〇年代に起きたことだが、高度成長による工業化に伴って、その廃棄物や排煙、排水による公害問題が発生し、人体に重大な悪影響を及ぼした。なるほど、この問題は、日本では七〇年代の努力によって解決されはしたが、しかし、八〇年代に

は、これは、より一層大きな地球環境問題となって再びのしかかってきた。二十世紀は大都市の時代であったが、この大都市文明の中で営まれる大量生産と大量消費社会は、大量の物資の浪費によって成り立つ社会であり、物の使い捨てによって成り立つ社会であった。それが解決困難な環境問題を引き起こしたのである。

そればかりでなく、第二次大戦後の日本が作りあげたビジネス文明は、交通、運輸、通信の分野で高度に組織化された社会を形成した。このマス・メディアの発達した情報化社会の中で、次々と提供される情報の洪水にのみこまれて、人々は次第に感覚を麻痺させ、刹那的な生き方をするようになった。次々と大量に生産される映像、音声、出版物の質も、商業主義の波に乗ってますます低俗化し、文化は大衆化し、精神的に退廃していった。極度な経済繁栄は、かえって精神的荒廃を招き、文化的不毛を結果し、創造的精神を剝奪したのである。日本も、二十世紀の文化の頹落の洪水に巻き込まれざるをえなかったのである。

社会思潮をみても、第二次大戦後は、復興経済から高度成長経済へと向かった経済発展に支えられて、アメリカ型のデモクラシーや実用主義が流行し、他方では、奇妙なことに、このアメリカニズムや産業主義文明への批判という形で、ソ連や中共を理想とするマルクス主義が流行した。だが、第二次大戦後の思潮を形づくったこれらの思想は、大正から昭和初期の近代主義の思潮同様、必ずしも独創的なものを生み出したわけではなく、独自の型を創造したわけでもない。むしろ、文化的不毛に陥り、文化はやがて大衆化の波にのみこまれて、無定形化していった。

#### 魂の喪失と精神の荒廃

歴史に常駐不変というものはない。二十世紀末、さしものアメリカも後退し、旧ソ連も解体して、アメリカニズムやコミュニズムへの憧憬の念も色あせた。だが、そのため、日本は巨大な技術文明を抱えて、再び、方向喪失と閉塞状況に陥った。日本は、第二次大戦後、ひたすら豊かさを求めて、物質的に恵まれた成熟社会を形成してきたのだが、その形成の過程で大きなものを犠牲にしてきた。豊かな社会を獲得して満足しはしたのだが、その分、より高いものを求める精神を失って、魂の貧困に陥った。超近代化による共同体の崩壊、経済成長に伴う社会の空洞化、教育の荒廃、高貴な感覚を失った大衆の氾濫、低俗な文物の洪水と文化の崩壊、これらの精神的荒廃現象は、豊かさを獲得するための代償であった。物質的豊かさを得る代わりに、故郷を失い、拠り所をなくし、

魂を見失い、精神的豊かさを失った。魂の空白化は、結局、経済では埋め合わせることはできなかつたのである。

もつとも、この魂の空白化は、すでに二十世紀初めから起きていた現象であつた。ヨーロッパも、二十世紀初め精神的空白化に陥つていたが、同じ空白化現象は、日本でもほとんど間合いをおかずに徐々に起きていた。没落したのは西洋だけではなかつた。日本もまた、同様に、精神の散乱と世界像の喪失に陥つたのである。

日本とつての二十世紀も、激動の時代であつた。日本は、明治以来、西洋近代文明を受容し、議会制度を整え、そのもとで近代産業を育成し、科学技術を発達させてきた。

二十世紀前半の日本も、このことに変わりはなく、デモクラシーの一層の発展のもと、経済と科学技術は長足の進歩を遂げた。なるほど、二十世紀半ばには第二次大戦に巻き込まれ、戦時体制下、民主主義は後退した。しかし、この戦いそのものは、高度な科学技術と当時の発展した生産力を極限まで使つてなされた戦いであつた。この点では、第二次大戦前と第二次大戦後は、必ずしも断絶してはいない。現に、第二次大戦後も、それ以前の科学技術と知識の蓄積のもと、経済の発展がはかられた。第二次大戦後も、再び立て直された民主主義体制を基盤にして、復興経済から高度成長経済へ、日本の産業主義文明は高度な発展を遂げたのである。

二十世紀末の日本の高度産業技術文明はその結果であり、明治以来の西洋近代化の最終的な完成だつたと言えるであろう。その結果、日本は科学技術の高度な発達のもと、豊かな社会を実現し、ありあまるほどの自由と平等を獲得し、高度な生活水準を実現した。しかし、この豊かさを獲得するために、精神的退廃と文化的不毛を代償にしてきたとすれば、日本も、また、二十世紀の光と影の中に立ち、二十世紀の歴史の潮流そのものの中にあつたのだと言わねばならない。



あとがき

現代の文明論的考察に思いを巡らし、文明批評に属する仕事をしてきて、随分な年月がたった。その成果は、何冊かの著作となつて著されているが、今回、『二十世紀とは何であつたか』という題で上梓したこの小著も、今までの著作群の流れを汲むものである。

ただ、前著の、例えば『欲望の体制』では、十九世紀も含めて近代二百年を(現代)として捉え、その種々の様相を論じて、文化・精神的面からの批判的記述を行なつた。また、『ヨーロッパズム』でも、十九世紀を含めた近代二百年を扱うと同時に、その源泉を尋ねてヨーロッパ文化の成立時期にまで遡つて、主に文明の出会い論的面から現代の批判的記述を行なつた。

それに対して、今回の小著は、問題を二十世紀の百年にだけ絞つて、二十世紀の具体例を入れながら、二十世紀そのものを考察してみた。もつとも、同じ種類の現代文明論に属するものであるから、当然、本書も以前に書いてきた著作に通ずる面がある。特に前著と共通する面については、今回は簡略化して記述しておいたので、詳しい点については前著を参照していただければ幸いである。

本書は、まず、第一章で、二十世紀の文明史的枠組みを論じ、その最も大きな特徴が、ヨーロッパの後退と非ヨーロッパの抬頭というところにあることを、二十世紀の政治史の具体例も入れながら跡づけた。次に、第二章では、文化史的観点に転じ、二十世紀文明の最大の特徴を科学技術文明の高度な発展というところに見て、二十世紀の科学技術の性格を考察した。その際、科学技術が二十世紀の人間に与えた恩恵とともに、その影の面にも光を当ててみた。それに続いて、第三章では、高度に発達した科学技術のもたらした大衆社会化現象を捉え、それが二十世紀で演じた社会や国家の狂騒を、その具体例を交えながら考察した。さらに、第四章では、この大衆社会化現象が文化に及ぼした影響を探り、それを低俗の崇拜や専門化というところに見た。さらに、二十世紀の思想や芸術の考察を通して、この世紀の精神状況の本質が、精神の散乱と世界像の喪失というところにあることを指摘しておいた。そして、最後に、二十世紀の様々な精神史的潮流や文明史的波動が、日本の二十世紀にもそのまま現われていることを考察して、本書は終わっている。

二十世紀論と言えば、多くの場合、政治史が中心となり、国家間の紛争や摩擦、戦争や革命などが論ぜられることが多いのだが、しかし、政治史の背後には、より深い文化史・精神史的な問題がある。本書で特に力点を置いたことは、そのような文化・精神史的な面からの二十世紀の精神状況の診断である。二十世紀末の今日、二十世紀全体の文明論的総括を試みなければならない時でもあろう。本書で述べられた思想は、二十世紀のいわば世紀末思想に当たるかもしれない。

二十世紀は戦争と革命の時代であった。だが、この戦争と革命の背後には、二十世紀の高度に進化した科学技術があり、それによってつくりあげられた産業社会のシステムがあった。そのような豊かな産業社会をめぐって、多くの戦争があり革命があったのである。しかも、それによって、おびただしい数の人々が犠牲になっていった時代が二十世紀でもあった。この点から言えば、二十世紀はまた悲惨な時代でもあった。この二十世紀の光と影に着目し、二十世紀への追悼と鎮魂の想いを込めて書いたものが本書である。

二十世紀の前半、一九三〇年代前後のヨーロッパに登場した一連のすぐれた思想家達、例えば、オルテガやホイジンガ、マルセルやビカート、ハイデッガーやヤスパーズなどは、第一次大戦で破壊されたヨーロッパの精神世界や第二次大戦の迫っている暗雲の中で、ヨーロッパの運命を深く考察することによって、二十世紀前半の精神状況の診断を行なった。そこでも、やはり、科学技術の発展によってもたらされた機械的世界、それに照応して登場してきた大衆社会の病理、それに伴う文化・精神の低落の問題などが、それぞれの立場から問題にされていた。彼らが照明を当てた二十世紀前半の精神状況は、第二次大戦後、二十世紀後半になっても本質的には変わりはなく、二十世紀末の今日においても同じような状況が見られる。あるいは、それ以上の深刻な状況かもしれない。時代を追うごとに近代化を進めていった二十世紀後半のアジアも、同じ運命を辿っていくように思われる。

とすれば、二十世紀全体の精神状況は、相当に深刻に受け取らざるをえないであろう。そして、その延長上で迎える二十一世紀の精神状況についても、同様に、深刻に受け取らざるをえない。従って、そう軽々しく、素晴らしい未来がやってくるようにも言えないし、手帳な処方箋を出して、「すべては救済される」というような軽薄な予言もできないであろう。

二十一世紀に対して二十世紀が残した問題は、相当深刻なものであった。そのため、

二十世紀末の現在、かえって、危機を声高に叫ぶ叫び声や、「こうすべき」「ああすべき」という掛け声や、「こうすれば、すべては救われる」というような新興宗教にも似た偽予言がはびこっている。現代は、また、危機を叫んで大衆に戦慄を覚えさせたり、幻想を作り出して大衆に未来を約束したりする偽予言の時代でもある。二十世紀が解決の極めて困難な多くの問題を二十一世紀に託したために、危機や幻想を売る小売り商人が、大衆の歓心を買って登場してきているのである。二十一世紀も、おそらく不安の多い時代になるであろうから、偽予言者は続々と登場してくるであろう。

偽予言は詐欺に似ている。二十世紀は、ナチズムやコミニズムの振りまく偽予言に惑わされた時代でもあった。それも、ついこの間だというのに、人々は、愚かにも、懲りずに新しい幻想を求めていく。だが、単なる幻想に逃避することなく、偽予言に陥らないで過ごすなら、現在、足下に伏在している問題にじっと目を凝らし、そこに立ち止まって、踏みとどまる以外にないであろう。

われわれは、墮落し崩壊した世界に生きている。われわれが住んでいる世界は、否応なしに、われわれ自身のうちに住み込む。墮落の家に住めば、墮落が住み込み、崩壊の家に住めば、崩壊が住み込む。このことから目をそらしてはならない。目をそらし逃避することから、偽予言は出てくるのである。もちろん、人間が未来に向かって生きていくためには、希望というものがなければならぬ。そのために、絶えず安手の予言が流行するのだが、しかし、安手の予言に人々が惑わされ、希望をもって前進している間は、希望をもつことはできないであろう。

現代文明が抱える様々な問題について熟慮を巡らしてきて、すでに何年にもなる。私は、その間ずっと、現代文明が抱える問題は人間精神にかかわる極めて困難なものを受け取り、その重荷を見据えてきた。しかし、それでもなお、そこを通して、なお変わらないもの、永遠なものは何なのかを求め続けてきた。それをつかむために、現代から離れ、一挙に古代世界に帰って見たこともある。同じシリーズの一書として出されている『古代探求』は、その試みの一つである。そこで得られた思想は、大地と生命の永遠という思想であった。現在、私が考えていることは、生命の本質から宇宙の真理にまで及ぶ生命論的世界観の中に、人類の営む文明の問題をも包み込み、包越していけないかということである。現代文明の深刻な問題から気軽に救い出されるのでもなく、それを簡単に乗り越えてしまうのでもなく、それを、生命論的世界観の中に包み込みたいと思っている。しかし、このことについては、次の著作に譲りたいと思う。

平成六年（一九九四年）六月一日

著者